

國際武道大學研究紀要

THE INTERNATIONAL
BUDO UNIVERSITY
JOURNAL

國際武道大學

The International Budo University

28

国際武道大学研究紀要

第 28 号 (2012)

目 次

〈原著論文〉

林 伯原

明代における剣術に関する研究

—剣術の伝習, 剣訣歌・剣法の遺存とその特徴を中心に—…………… 1

望月 好恵

英語の文法力と英文シナリオ理解力の相関性に関する一考察…………… 11

塚脇 誠

2011/12 オーストリアスキー指導法に関するスポーツ運動技術指導方法論的一考察 I …… 25

〈研究報告〉

井上 哲朗・岩切 公治・井島 章・朴 東哲

韓国大学生剣道競技者の使用技に関する研究…………… 37

教育研究活動報告

〈研究成果報告〉

笠原 政志・山本 利春・荻内 隆司・剣持 佑起・竹田 京平・遠藤 誠治

競技復帰に関するスポーツドクターとアスレティックトレーナーの意識調査…………… 43

木村 寿一・松井 完太郎・土居 陽治郎・高見 令英・山平 芳美・渡部 鏝二

大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携事業について…………… 55

〈原著論文（縦書き）〉

上林 昌太郎

ソクラテスの在りか —『大ヒippias』をめぐって— …………… 61

〈研究報告（縦書き）〉

黒羽 友子

「江戸時代後期における小野小町像 —『群書類従』所載「小町集」の歌百十六首から」— …… 75

〈資料（縦書き）〉

宮本 光輝・魚住 孝至

『愛洲陰之流目録』（東京国立博物館蔵）の調査報告書

—新陰流との関係及び『紀效新書』所載の「影流之目録」についての新知見—…………… 95

原著論文

明代における剣術に関する研究

— 剣術の伝習, 剣訣歌・剣法の遺存とその特徴を中心に —

林 伯原

On the Study of Chinese Swordsmanship in Ming Dynasty

— the State of Swordsmanship in Ming Dynasty, Ancient Pithy Formula Songs

for Practicing Swordsmanship and the Characteristics of Ancient Sword

Methods as the Research Centre —

Lin Boyuan

Abstract

This thesis studies mainly the following contents. One, the state of swordsmanship is in Ming Dynasty. The army in Ming Dynasty used currently broadswords not swords. As one of folk martial arts, swordsmanship was still inheriting, and its schools were not a lot. There were not many super skilled persons also. Two, because at that time there were a few persons who practiced playing swords and taught others the skill, the martial artists in Ming paid the most attention to looking for “ancient pithy formulae for practicing sword” and “the ancient sword methods” before Ming Dynasty. But the so called “the ancient pithy formulae for brandishing sword” they found were just “the double-sword skill” which was each hand with a sword not the routine (a series of wushu skills). This double-sword skill was only combined exercises for sword methods. “The ancient methods” they found were Shuangshou jian (brandishing a sword with double hands). Shuangshou jian included “the chapter of position way” (the names of motions) and “the 24 sword methods” (explaining how to use the sword with illustrations). According to their contents the two may come from the time of Song Dynasty and after. Three, at that time, there was Danshou jian (one hand with a sword) inheriting in the folk swordsmanship. “Shoubi Lu” written by Wu Shu” recorded “the pithy formula for practicing sword (in this thesis it is called the former pithy formula)” and “the latter pithy formula for practicing sword”. The both two were typical works. Their contents emphasized that the sword was a short weapon and so in actual combats the warriors were fighting by fast step movements, the changes of body posture, and going forward bayoneting straightly, or using zhuo and xiao to control the opponents’ weapons averting their long weapons.

Key words : 剣 Sword 剣術 Art of fencing ; swordsmanship 剣の勢 Sword postures

剣訣 The pithy formulae for practicing sword

双手剣技 Shuangshou jian (brandishing a sword with double hands)

单手剣技 Danshou jian (brandishing only with single hand and a sword)

1. 問題の提起

中国の春秋戦国時代（B.C.770-B.C.221）、戦争形態が車戦から歩兵戦へと移行するに従い、剣が歩兵の主要な武器として用いられるようになった。また、民間においても剣術を以て官人貴族に仕える剣客や剣術の教育に従事する指導者が現れており、撃剣が盛んに行われていたことがわかる。しかし、前漢時代の初期（紀元前2世紀頃）に至ると、漢と匈奴との大規模な戦争が続く中で剣の地位に変化が生じる。当時、匈奴の騎兵の常用武器は刀であり、一方、漢軍は剣を装備していた。漢匈両軍が交戦する場合、まず弓弩による射撃戦で戦闘が開始され、最終的には刀剣を用いた近接戦で勝敗が決せられたが、騎兵が突撃する際、振り回して斬りつける片刃の刀は諸刃の剣より折れにくく、また扱い易くもあったため、戦場でその威力を大いに発揮した。対抗上、漢軍は大量の環頭長刀を剣に代わる主要な格闘武器として配備せざるを得なかったのである。やがて後漢期（25-220年）に入ると剣は次第に戦場から駆逐され、騎兵、歩兵を問わず刀が軍隊における主要武器となっていった。以降、剣は軍隊の装備としてはほとんど用いられなくなったのである。しかし、剣術そのものは伝統的な武術の一種として存在し続け、民間では護身や健康増進などの目的で剣術が稽古された他、娯楽の演目としても歓迎された。一世紀頃に成立した『漢書』の「芸文志」には『剣道』三十八篇の名称が挙げられており、これらは当時の剣道の技法を総括したものであると考えることができる。また、中国の文人士の間には撃剣と読書を尊ぶ習慣が古代より連綿と存在しており、特に唐代以降は文士が剣術を嗜むことが一種の流行となっていたのである。さらに宋代になると、庶民文化の発達に伴い、都市部において剣術の演武がよく見られた。すなわち、後漢以降、剣術の稽古や技術交流の場は軍隊から民間へと完全に移行したのである。

しかし、十三世紀のモンゴル軍侵入が契機となって剣は再び軍隊の装備として用いられるようになる。モンゴル騎兵が戦場において刀・剣・斧・錘といった柄の短い武器を重視したためである。『元史』『東方聞見録』など元代の文献資料には彼らが剣を用いて戦う様子が記されている。

以上のように明代以前における剣術の歴史については先人の研究があつて明らかにされている。しかし、明代（1368-1644年）における剣術の実態に関する研

究は非常に少なく、これまで出版された『中国武術史』等にも取り上げられているが、その内容はごく一般的な解説に止まっており、原典資料に基づき当時の社会背景との関連まで深く掘り下げて論じた研究は存在していない。そこで、本論文では主として明代の剣術に関する原典資料（唐順之の『武編』、何良臣の『陣紀』、鄭若曾の『江南經略』、茅元儀の『武備志』、呉叟の『手臂録』など）に依拠して剣術をめぐる当時の状況について考察し、特に明代の剣術の伝習、剣訣や剣法の遺存などを問題点として検討することで明代における剣術の全貌を解明しようと試みる。また、今回取り上げた明代の剣術に関する原典資料にはこれまで日本語に翻訳されていないものが多いが、本文ではこれらの資料を初めて日本語訳し、今後の研究活動に資することとした。

2. 明代の文献資料に見る剣術の伝習

元代の史料によると、剣を主要武器のひとつとして用いていたモンゴル軍の侵入が契機となり、軍隊において再び剣術が行われるようになった。14世紀半ば、大規模な農民一揆によって元が滅ぼされ、漢民族の新王朝である明が樹立されたが、剣は元代に引き続き明朝成立後も軍隊で用いられたのであろうか。この点を最初の問題として取り上げ論じていきたい。

元末明初に剣を用いて戦う武将が存在したことは次に挙げる史料から窺うことができる。

花雲は元末明初の武将であり、人並み外れて勇敢であった。『明史・花雲伝』には「至正十三年（1353年）癸巳、剣を持って臨濠で太祖に謁した。（中略）太祖は滁洲を攻略せんと数人の騎兵を率いて大軍に先んじて出発した。花雲も太祖に同行した。にわかに数千の敵に遭遇したが、雲は鉞（両刃の剣の一種）を挙げて太祖を庇い、剣を抜いて馬を走らせ、敵陣に突入した。敵は驚き、『この将は勇ましく強そうだから避けた方がよい』と口々に言った。後発の大軍が到着し、遂に滁洲を奪い取った」とある。

また、『罪惟録』列伝の卷八「華雲龍伝」には次のような記事がある。

「華雲龍は定遠の人で才知と勇猛を備え、剣術に優れていた。（中略）千夫長（官名）として太祖に従って南征し、金陵を攻め落とした。さらに廣徳を攻めたが、敵の周湯元帥は槩（長い矛）を得意としており、馬を疾駆させながら雲龍に向かって突き下ろした。雲龍はおもむろに剣の柄に手をかけると一挙にその槩を

断ち斬り、たちまちこれを捕えた。こうして右副元帥に昇格した。』²

以上のように元末明初には武将の中にも剣を用いる者が現れたが、あくまで例外的な存在であり、その数は決して多くなかった。やがて元朝が滅亡すると、剣は再び軍隊において装備されなくなっていたのである。このような事実は以下の史料によって確認することができる。

明の將軍戚繼光（1528-1587）の『練兵實紀雜集』巻五「軍器解」で取り上げられた短柄武器の中に剣はなく、実戦に用いられたのは腰刀だけであるという³。

また、同じ明代の將軍何良臣（嘉靖・万歴期に生存）は「軍中諸技のうち、刀術と剣術は伝承が少なく⁴と明確に指摘している。

さらに『武備志』の著者茅元儀（1594-1630）も「古来、兵について言う場合は必ず剣に言及したが、今は陣中に用いられず、（中略）その伝承はすでに失われてしまった⁵と述べている。

以上のように明代には軍隊における剣術が完全に廃れたことがわかる。その一方で民間の武術を徹底して弾圧した元朝の滅亡により、一般社会における武術活動が息を吹き返したことは注目に値する。明朝成立後、各地で尚武の気風が高まり、民間では護身や健康、娯楽のために剣が用いられ続けた。中でも文士たちの余技としての剣術はますます盛んに行われるようになったのである。

明の初期においてすでに書と剣を愛好する士が少なくなかったことを、次に挙げる『明史』の記載からも知ることができる。

『明史・鄭定伝』には「（鄭定は）撃剣を好み、陳友定の記室（秘書）を務め、（中略）洪武年間の末には官を重ねて国士助教となった⁶とある。

また、『明史・何真伝』にも次のような記述がある。「何真是字を邦佐と言い、広東は東莞の人である。若くして英偉（堂々として風格がある様子）であり、書と剣を好んだ。（中略）官にあって頗る名声が高かった。』⁷

当時の撃剣は往々にして走馬・博戯・蹴鞠などの娯楽と併せて行われていたようである。黄暉の『蓬窗類記』には次のような記事がある。

「（宋克は）若い頃から義侠心があり、撃剣や走馬、飲酒、博奕といった遊戯を好み、その侠気によって人々を敬服させていた。（中略）洪武年間の初め、鳳翔府同知になった。』⁸

また、明初の詩人である徐舫も撃剣を好み、『明史・徐舫伝』には「徐舫は字を方舟と言い、桐廬の人である。若い頃から俠気を尚び、撃剣、走馬、蹴鞠を好んだ。（中略）彼には『瑤林』と『滄江』二つの詩集がある⁹との記述が残されている。

さらに、明代中後期にも剣を好んだ士人の記録が残っている。

『明史・沈有容伝』にも「（沈有容は）幼い頃から走馬と撃剣を嗜み、兵書を好んだ。万暦七年（1579年）の武郷試に合格した¹⁰とある。

また、『明史・劉宇亮伝』には万暦四十七年（1619年）の進士劉宇亮について次のように記されている。「（劉宇亮は）短軀であったが精悍で撃剣を得意とし、（詔勅を起草する役所の）翰林（院）に居ても日頃から家僮と角逐を楽しんでいた。』¹¹

当時、剣は戦争にこそ用いられなかったが、依然として民間においては武術技能の一つであった。明の穆宗、神宗の頃、武科挙において技勇（武術のこと）を重視すべしという意見が官吏から相次いだことから、万暦末期に科挙担当大臣が将才武科（武将の選抜試験）のために特設すべき科目を申請したが、その際、馬箭（騎射）・歩箭（歩射）・槍・刀・戟・拳搏（徒手での格闘）・撃刺などに加えて剣が初場（実技）の科目として取り上げられている。この提案は実際には採用されなかったのであるが、このような事実からも当時の民間において剣術が武術の一種として稽古されていたことがわかる。

明末の著名な民間武術家である呉爰（1611-1695）も五十歳頃に漁陽老人なる人物から剣法を学んでいる。彼は漁陽老人から授かった「剣訣」及び自ら創案した「後剣訣」を『手臂録』に記している（後詳述）。

以上のように、明代には民間で剣を学ぶ者が少なかったが、優れた技術を伝承している者は稀であった。まさに万暦年間の学者高濂が述べた通り「今は劍客（劍侠とも、劍術に優れた人）も見られず、世に名劍もなく、劍術の伝承もないので、劍よりも刀の方がよく用いられ、世の中に佩刀は普通にあって佩劍は知られることがなかった¹²という状況だったのである。

当時の民間には剣術の流派も剣術に優れた専門家も多くなかった。これについては何良臣が『陣紀』巻二「技用」で次のように述べている。

「剣を用いるには術がある。その方法は『剣経』に記載されているとは言え、具体的な技術は劍侠が身に

つけていたものであるから、(現在その技術の詳細を)知り得ないもの(すなわち、その名だけが知られている剣侠の数)は十数氏を数える。ただ、卞莊の『紛紋法』、王聚の『起落法』、劉先主の『顧応法』、馬明王の『閃電法』、馬超の『出手法』、これら五家(家とは専門家あるいは専門の技術・学問の意で、ここでは剣術専門家を指す)の剣は民間において今でも伝承があるかもしれない(原文:「庸或有伝」)。これらは学ぶ者が心を尽くして求めたら、その秘訣を得ることができるであろう。」¹³

何良臣の「庸或有伝」という言葉からもわかるように、民間において高度な技術を会得している者の数は必ずしも多くなかったのである。

また、鄭若曾の『江南経略』巻八では上述の『陣紀』に記されている五家の剣法に「辺掣厚脊短身」一家を加えて「使剣(剣術)の六家」と称している¹⁴。この「辺掣厚脊短身」という語は茅元儀の『武備志』巻一百零四巻「器械三」にも見ることができ、「最近、辺境の守備の官から『厚脊短身』の剣を製造するよう請われた。このような剣が(辺境では)頗る使用されているからである」¹⁵とある。こうした記述から、この剣はもともと辺境で製造されたものであり、鎗が厚く剣体が短いのが特徴であったことがわかる。

さらに、明代の軍事家・武術家俞大猷(1504-1580年)は「自分は荆楚長剣法を学び、頗るその要点を得る」¹⁶と述べているが、彼の著作である『剣経』では鉞法・棍法だけが解説され、剣術については言及されていない。彼は『正気堂集』の「新建十方禅院碑」で「棍法」を「長剣技」¹⁷と称しており、自らの著述にも『剣経』とは名付けているものの長剣法について述べたわけではなく、長剣法の在り方に共通する鉞法や棍術を中心に論述したのである。

要するに、明代における剣術は民間において主たる武術技能の一つではあったが、実際に剣術を伝習している者の数は少なく、高度な剣術を会得している者はさらに稀だったのである。

ちなみに、当時の剣の形状であるが、茅元儀は『武備志』の中で、「剣は古今を問わずその形状が変わらなかった」ので『武経総要』に記されている二種類の剣を挿絵として取り上げる。剣の飾りには銀、鍮石(銅と亜鉛の合金、または自然銅で質のよいもの)、銅などがある」と述べている(図1)。

また、鄭若曾の『籌海図編』巻十二「経略・兵器」にも剣の挿絵が掲載されている¹⁸。この挿絵を『武備

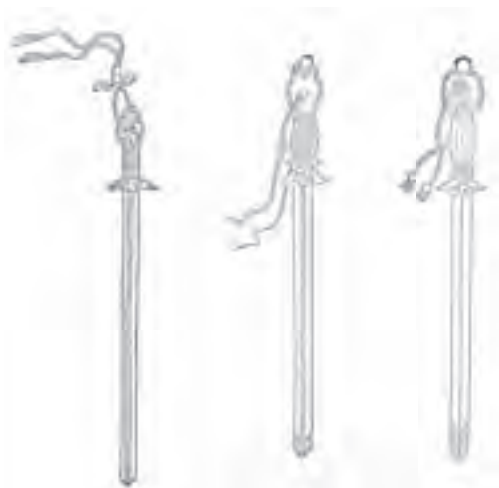


図1 明代の剣 『武備志』『籌海図編』より

志』にある挿絵と比較しても何ら異なる点が見られない。このことから明代に使用された剣は宋代からその形状に変化がなかったことがわかる。

3. 嘉靖以前に遺失した剣訣歌・剣法の収集

剣術の真伝を会得している者の絶対数が少ないという状況下で、一部の武術家は明の嘉靖(1522-1566年)以前に遺失した剣訣歌及び古剣法の収集に努めるようになった。

3.1 断片的資料の中に残された「剣訣歌」

唐順之(1507-1560)の『武編』前集巻五「剣」には以下に挙げる不完全な「剣訣歌」十五句が記されている。「電掣昆吾見太陽、一昇一降把身藏、搖頭進歩風雷響、滾手連環上下防。左進青龍双探爪、右行單鳳独朝陽、撒花蓋頂遮前後、双豎劍、馬歩之中用此方。蝴蝶双飛射太陽、梨花舞袖把身藏、鳳凰浪翅乾坤少、掠膝連肩劈兩旁。進歩滿空飛白雪、回身野馬去思鄉、鏢鐙曾入千軍隊(以降は欠落していると思われる)。」¹⁹

この剣訣の各句には「注」が附されており、読者がこの剣法を理解するために便宜が図られている(図2)。また、茅元儀の『武備志』巻八十六にも同じ「剣訣歌」が収録されているが、「双豎劍」の三文字と最後の一句が欠けた十四句となっている。この「剣訣歌」について茅元儀は次のように述べている。

「古代、剣は戦闘に用いられるものであり、唐の太宗(598-649年、唐の第二代皇帝)の頃は千人もの剣士がいたが、その剣法は伝えられていない。わずかな

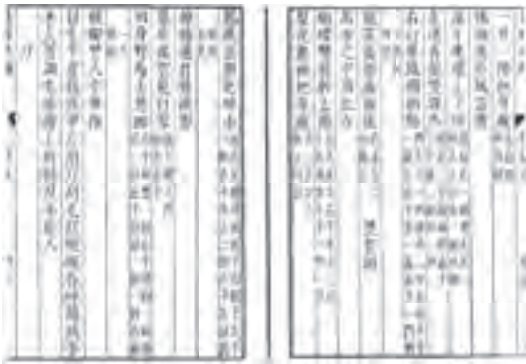


図2 古剣訣 『武編』前集卷五『剣』より

断片的資料の中にその秘訣を歌にしたものが残されているが、その具体的な内容は詳らかではない。²⁰

武術における「訣歌」とは武術の技法の変化を反映させた文句である。一句が5文字あるいは7文字からなり、音韻が踏まれ、リズムを伴っている。口ずさむことで動作の順序や要領を記憶することに役立てられたことから「歌」と呼ばれた。こうした武術の「訣歌」は宋（960-1279年）、元（1271-1366年）の史料にはあまり見られず、武術教育の手段として広く民間に普及したのは明代に入ってからのものである。上述の「剣訣歌」は唐順之（1507-1560年）の『武編』に収録されたのが初出であるため、明代前期の作品と思われる。唐順之が明の嘉靖期の人物であることから、少なくとも嘉靖以前の作品と考えることができるだろう。

この「剣訣歌」は内容に欠落があるものの、古代中国の剣法に関する非常に貴重な資料である。その語句と解釈を通じて、この剣法の特徴を窺い知ることができる。

第一に、この「剣訣」は双剣の使い方を述べたものと考えられる。なぜなら、この「剣訣」は左右の手に持った一对の剣の動きを描写しているからである。例えば「右行単鳳独朝陽」という句に対する「注」には「（原文）用左手一刺，跳進兩歩，左右手各一挑，左右手各一蓋，右手一門轉歩開剣作勢。（訳文）左手の剣で前方を刺突，跳躍して二歩前進。左右の剣をそれぞれ振り上げ，振り下ろす。さらに右手で剣を横に振り，身体を回転させたら剣を開いて構える」とある。また、「蝴蝶双飛射太陽」の「蝴蝶双飛」は左右一对の剣を蝶の羽のように動かす様子を描写しているとされ，その「注」には「（原文）右足進歩，右手来去二剣，左足進歩，左手一刺一晃。（訳文）右足を進め，

右剣で二回刺突し，次いで左足を進め，左剣を刺突した後には振り回す」とある。

以上の記述から，この剣法は左右の手にそれぞれ剣を持って攻防を行う「双剣技」であることがわかるのである。

明以前には双刀技についての記録はあっても双剣技に関する資料は極めて少ない。明以前の剣術に関する各種文献を読むと，唐代の杜甫（712-770年）と同時期の詩人である蘇渙の『懷素上人草書歌』に「忽なること裴旻の双剣を舞うが如し，七星乱れ落ち蛟龍を纏く」²¹という語句がある。これは唐代にはすでに「双剣」の技があったことを反映しているが，あくまで唐代の將軍裴旻が「双剣」を用いて演武した様子を描写する詩句に過ぎず，具体的な「双剣」の技法に関する記録は存在していない。このような点から見ても，上述の「剣訣歌」は古代中国の「双剣技」に関する非常に貴重な資料であると言えるのである。

第二に，この「剣訣」は「套路」（日本の武道における「形」に相当する）のように攻防動作をいくつも連続させて一連の流れとして稽古するものではなく，複数の独立した攻防動作を基礎に構成された連続技，すなわち剣技のコンビネーションである。次に挙げる語句がその根拠となる。

「滾手連環上下防」という句の「注」として次のような解釈が紹介されている。「（原文）開右足一剣，進左足一剣，又左右各一剣，収剣。（訳文）まず右足を踏み出して剣で刺突し，次に左足を進めて剣で刺突，さらに左右にそれぞれ一回ずつ刺突したら剣を収める。」

また，「回身野馬去思郷」の「注」にも「（原文）右手抹眉一剣，右手抹脚一剣，抹眉一剣，左手抹腰一剣，一刺，右剣一手収剣。（訳文）右手の剣で相手の眉を擦めるように斬りつけたら，脚を狙って撫で斬りし，再び眉を擦め斬る。左手の剣で相手の腰を横から斬り払ったら，真つすぐ刺突し，最後に右手で剣を収める。」

以上の二つの「注」の最後に「収剣」（剣を収める）の二文字がある。この「収剣」という言葉は一連の剣法の動作が完了し，次の動作につながらないことを示す用語である。したがって，この「剣訣歌」が示す剣法は各句の動作を接続して一連の動作として完成させるものではなく，一句ごとに独立した攻防の動作として別々に稽古するものであったと考えることができるのである。

3.2 古剣法について

上述の『剣訣歌』以外にも古代中国から朝鮮に伝わった剣法が茅元儀によって収集され、『武備志』巻八十六「陣練志」の「教藝三」に収録されている。この剣法はここで「朝鮮勢法」と呼称されるが、剣法の正式な名称ではなく、古代中国から朝鮮に伝わった剣法によって便宜的な呼称であると考えられる。このため、本論文では以降「古剣法」とのみ称する。この剣法は初習の内容及び各剣の勢法の名称を紹介する篇（以下「勢法篇」と称する）と、二十四種類の剣の攻防応用を解説する篇（以下「二十四剣勢」と称する）から成り立っている。次項からは「古剣法」の成立時期及びその内容の特徴等について検討することとした。

3.2.1 古剣法の成立時期について

茅元儀は『武備志』巻百四「器械・剣」で「古剣法」について次のように述べている。「古来、兵（武事・軍事）について言う場合は必ず剣に言及したが、今は陣中（戦争）に用いられず、その伝承はすでに失われてしまった。余は広く海外にこれを捜し、ようやく得ることができた。」この記述より明らかになるのは「古剣法」を収集したのは茅元儀本人である点である。

また、彼は巻八十六「教藝・剣」では次のように述べている。「最近、ある好事者（謙遜語、茅元儀自身を指す）が朝鮮にてこの剣法を得た。勢法が備わっており、これは中国で失われた方法を四方に求めてきたものである。」

以上の文脈から考えれば、茅元儀の収集した「古剣法」はかつて朝鮮に伝えられた古代中国の剣術であったと判断すべきであろう。しかし、「二十四剣勢」の成立時期についてはどんなに早くても宋代以前ではないと考えることができる。その理由は次のようなものである。

「二十四剣勢」では剣の勢法を解説する際に「撥草尋蛇勢」「裙攔勢」「直符送書勢」「泰山壓頂勢」「蒼龍出水勢」「長蛟分水勢」「白猿出洞勢」「獸頭勢」「朝天勢」「探海勢」「白蛇弄風勢」等々、特徴的な「勢名」が用いられている。しかし、このような「勢名」が武術の用語として用いられるようになった時期は宋代以降なのである。宋元の話本（語り物の底本）及び小説の中にはすでに武術の「勢名」に関する記述が見られる。例えば、上述の「撥草尋蛇勢」は元末明初の『水滸伝』第九回「林冲棒もて洪教頭を打つ」にも見るこ

とができる。また、このような「勢名」は明代に入ってから多くの文献に登場するようになる。上述の勢名のうち「撥草尋蛇勢」「探海勢」は明代の槍法の技法名として現れ（『紀效新書』巻十）、「直符送書勢」（『紀效新書』巻十二）「裙攔勢」「朝天勢」「白蛇弄風勢」（『少林棍法闡宗』）は棍法、「獸頭勢」は拳法の技法名（『紀效新書』巻十四）として登場している。このような勢法の名称が使用されていることから考えて、「二十四剣勢」という作品は少なくとも宋代以降に成立したと考えることができるのである。

3.2.2 古剣法の内容について

この剣法の「勢法篇」には「初習」の他、撃法・刺法・格法・洗法に関してそれぞれの「勢法」（技の構えとその変化）の名称が記されている。具体的な内容は次の通りである。

- （1）「初習」。すなわち剣法で最初に学ぶべき内容であり、この中には眼法・撃法・洗法・刺法（この後に「格法」の二字が抜け落ちているが、補うべきである）が含まれる。
- （2）五種の撃法、すなわち豹頭撃、跨左撃、跨右撃、翼左撃、翼右撃。
- （3）五種の刺法、すなわち逆鱗刺、坦腹刺、双明刺、左夾刺、右夾刺。
- （4）三種の格法、すなわち拳鼎格、旋風格、御車格。
- （5）三種の洗法、すなわち鳳頭洗、虎穴洗、騰蛟洗。

「勢法篇」の後に「二十四剣勢」（図3）が附されている²²。これはこれまでに発見された中で最古の体系的に整理された剣法図譜である。以下、この「二十四剣勢」について検討してゆく。

第一に、この「二十四剣勢」にある勢法であるが、



図3 古代の剣勢図 『武備志』巻86『剣』より

描かれた図絵は主として両手で剣を保持し、かつ長めの剣を使用しており、両手を用いて各種の技法を行っていることが見て取れる。このことは古代中国に両手を用いた剣の技術、すなわち「双手剣技」の歴史が長く存在し、また非常に早くから隣国に影響を与えていたことを表している。

第二に、古代の剣法に関する技術的な資料の希少性、重要性を指摘したい。明代以前の古典にも「剣術」について記されている文書が存在していないわけではない。例えば、『呉越春秋』『莊子・説劍』では剣理が説かれ、曹丕の『典論・自叙』では撃剣の様子が描写されている。しかしながら、剣法の具体的な技術に関する記録や著作は存在していないのである。この「二十四剣勢」では初めて剣法が眼法・撃法・刺法・格法・洗法の五種に分類され、さらに各法の「勢法」の用法が挿絵入りで具体的に解説されたのである。つまり、この「二十四剣勢」は数多ある古典軍事・武術著書の中で最も詳細に古代剣法を紹介した著作であり、古代中国における双手剣法の有り様を理解するために大変重要な意義を持っているとすることができるのである。

最後に、「勢法篇」にある目録との差異について検討したい。前述の通り、「勢法篇」の目録では五種の撃法、五種の刺法、三種の格法、三種の洗法が紹介されているが、「二十四剣勢」にはこれらに当たらないものが含まれている。例えば、撃法には目録にある五種に加えて「腰撃勢」「横撃勢」「鑽撃勢」「展旗撃」「看守撃」「展翅撃」「掲撃勢」「掀撃勢」「横冲撃」「斂翅撃」といった撃法が記されており、合わせて十五種が紹介されている。また、刺法では目録で紹介された五種のうち「双明刺」が取り上げられていない反面、「点劍刺」という刺法が追加されている。また、格法の三種のうち「旋風格」が見られず、代わりに「撩掠格」と「銀蟬格」が加えられている。さらに、三種あるはずの洗法には「虎穴洗」と「騰蛟洗」が見られない。

本来であれば「勢法篇」にある目録と「二十四剣勢」の内容は完全に一致して然るべきであるが、何故この「古剣法」という作品では「勢法篇」と「二十四剣勢」の内容がこれほど懸け離れているのであろうか。これは次のように考えることができる。すなわち、「勢法篇」と「二十四剣法図勢」が本来は二つの別の作品であった可能性である。つまり、後世の人がこれら二つの作品を合わせ「朝鮮勢法」と名付けて一

つの作品として出版したと考えられる。

4. 片手による剣術の伝承

上述した「双手剣技」以外にも、この時期の民間武術には片手による剣術、すなわち現在「单手剣技」と呼ばれる剣法が存在していたことがわかっている。「单手剣技」は中国の伝統的な剣法の中でも重要な技法であるが、明代以前に「单手剣技」の『剣訣』は見られず、明代末期に至ってようやく世に現れる。

明末の著名な民間武術家である呉叟は、五十歳頃に漁陽老人から剣法を学んだ。彼は「只手独運（片手で剣を運用すること）稲妻よりも敏捷」²³と自讃したほどであり、その「单手剣技」は非常に高水準にあったようである。彼は漁陽老人から授かった『剣訣』について次のように述べている。

「漁陽老人は余に剣を伝授した際、『この技は世に絶えて既に久しいが、君はこの技を得たからといって、みだりに人に伝えてはならない』と言った。余はこの技がついに伝承されなくなるのを恐れるが、老人に言いつけられた言葉を思えば剣法そのものを書き記すことはできない。それ故、その剣訣だけを著す。」²⁴

彼が著した『剣訣』には『剣訣』（以下『前剣訣』と称する）と『後剣訣』の二つが含まれる。

『前剣訣』は次の通りである。

「（原文）長兵柄以木，短兵柄以臂。長兵進退手已神，短兵進退須足利。足如鼉身如風，三尺坐使八丈廢。余擅梨花三十年，五十衰遲遇劍仙。劍術三門左右中，右虎中蛇左日龍。手前身後現刀勢，側身左進龍門亟。身前身後隱刀勢，側身右進虎門易。二勢用手身誘之，彼取我身手出奇，點者奇正亦能識。舍身取手主擊客，我退我手進我身，左翻右躍如獅擲，虎躍不入龍，龍翻不入虎，龍翻虎躍皆蛇行，直進当胸不可阻。左右進退有虛實，六法相生百奇出，彼退我乃進，彼退有奇伏，彼進我亦進，彼進乃窮蹙。撲身槍尖迫使發，死里得生坐鉄屋，嘗以我矛陷我劍，矛多虛奇劍實戰。当其決命爭首時，劍短矛長皆不見，自笑學兵已白頭，初識囊中三尺練。」

その訳文は以下の通りである。

「長兵（柄の長い武器）は両手で木製の柄を握って格闘するが、短兵（ここで剣を指す）は臂（肩から手首までの部分）を柄として扱う。長兵の進退変化はすべて両手によって巧妙に行われるが、短兵では足を用いて前後左右に素早く敏捷に移動して戦わねばならない。（対戦において）足を脱兎の如く、身体を風の如

くすれば、三尺（約1m）の剣によって一丈八尺（約5.76m）の槍をたやすく靡（敗）せしむる。余は三十年間一心に梨花（当時の楊家槍術を指す）の研究に打ち込んできたが、五十歳を過ぎてようやく剣術の達人（漁陽老人を指す）に出会うことができた。

劍術には左・右・中の三門（門とは攻防のための構え）があり、龍・虎・蛇の名を借りて左・右・中の構えを表す。（戦闘に臨んで）手を前、身体を後にし、体を半身に開いて剣を相手に見せる姿勢を『現刀勢』と称し、この勢は身体を開いて半身で進み、敵の龍門（左）を急襲するのが要領である。また、身体を前、手を後にし、持っている剣を隠す姿勢を『隠刀勢』と言い、この勢は半身のまま虎門（右）に進めば容易に敵を攻撃できる。二つの勢を用いる目的は、自分の手と身体を用いて相手の攻撃を誘い込むのである。もし、相手が私の身体を狙って攻撃すれば、私はただちに手により応変の処置をとり、奇を以てこれに勝つことができる。実戦の経験者はこうした奇正応変の道理をよく分かっている。（それ故、）身を捨てて相手の手を狙って主動的に打ち込んでいく方法が有効であり、これを『主撃客』という。手を下げ、身体を張って相手を誘い込む場合、左方に身を翻し、右方に跳ね、獅子のように起伏することが必要だが、その際に左右の基本的な構えを崩してはならない。すなわち、虎（右）の変化は龍（左）に入らず、龍（左）の変化は虎（右）に入らず、これら左右の変化はすべて蛇（中、胴体）によって発揮されるべきである。相手が正面から真っすぐ打ち込んでくる場合にはそれを避けるべきであり、左右進退の虚実（変化）でもって対応する。このようにすれば、劍の六法²⁵とその変化は互いに連携して応用され、複雑多様で極め尽くせないほどとなる。（槍と対戦する場合、）相手が退けば我は進んで打ち込むべきだが、相手に隠された意図（陷穽）があることを注意すべきである。相手が攻め来たれば我もまた進んで対応し、（長柄の）敵を不利な状態に陥れねばならない。

また、先に剣を用いて打ち込むことで相手に槍を動かさせ、相手の隙を誘発して反撃の機会を見つければ死中に活を得ることができる。自らが矛を持って剣を攻める様子をイメージすることができれば、矛の奇正の変化を予測して剣の実戦応変の理解を深めることができる。結局のところ、命を投げ出して対戦の主導権を握ろうと戦えば、もはや剣の長さも矛の長さも見られない（武器の長短に関係なく、対戦者の敏捷性によ

って勝敗は決せられる)。数十年武術を習った余は(年老いて)髪が白くなった今日、やっと三尺の剣の使い方を初めてきちんと理解することができた。」

呉父の書き残した『前剣訣』にある剣の使い方をまとめると以下になる。

①剣を用いて槍などの長柄武器に対抗するためには進退変化を足に求めるべきことが強調されている。フットワークを駆使した迅速な進退と巧妙な変化によってリーチに優る長柄武器を持つ敵を敗退させるべきであるという主張である。すなわち、呉舜が漁陽老人から得た剣術の要諦はそのフットワーク、歩法にあるということが理解できる。

②剣術における攻防のための構えを左・右・中（龍・虎・蛇）の三門に分け、三門をめぐる攻防を手の構えと身体の位置の配合から解説することによって剣法における虚実、奇正の有り様を示している。こうした虚実、奇正を応変の基礎として、敵に対しては無限の変化を以て応ずべしという教えである。

③フットワークの活用及び虚实、奇正を以て敵に応ずる剣法を根底で支えるのは敵の隙を誘発するために身を捨てることのできる胆力であり、さらには（長柄武器を用いる）敵に対する深い洞察と理解であると述べている。すなわち、不利な状況を打開し、死中に活を得るためには歩法や応変のテクニック以上のものが剣法に必要であることが示唆されているのである。

また、呉殳は『前剣訣』の後に『後剣訣』を公開している。その理由について彼は次のように述べている。

「剣という武器は軽清（軽くて鋭い）であり、その
 用い方は刀のそれと大きく異なる。上述した剣訣（『前
 剣訣』を指す）には実は隠されたところがあり、余は
 古人たちが心血を注ぎ尽くした剣術の成果が失われて
 しまうことを恐れ、いま一度『後剣訣』を作ってその
 要領を多少公開したい。」

彼が公開した『後剣訣』は次の通りである。

「(原文) 劍術真傳不易傳，直行直用是幽元。若唯砍斫如刀法，笑殺漁陽老劍仙。」²⁶

その訳文は次の通りである。

「剣術の真髓を伝えるのは容易ではないが、（剣を用いるに）直行直用（真っすぐ進んで真っ直ぐ刺突すること）こそが要領である。ただ刀のように斬りつけるだけであれば甚だ滑稽であり、もし漁陽の老剣仙が見れば笑いきけるであろう。」

梟が『後剣訣』の中で強調している点は、剣術の

真龍が「直行直用」にあり、円を描いて振り回す刀の用法とは峻別されるべきであるという主張である。これを見る限り、呉叟は確かに撃剣の要点をよく心得ていたと言うことができるであろう。

さらに、呉叟は『手臂録』巻三「単刀図説」においても中国の剣術について言及している。

「斫削粘杆という技法は私が漁陽老人から習った剣技であり、単刀法には見られず、これを刀術の中に取り入れたのは、実はこの私である。」²⁷

ここで呉氏が述べている「斫」と「削」による粘杆とは、剣の短を以て長い武器を制する場合に最も重要な技法である。「斫」とは「切る、打つ（撃）」の意味であり、「削」は文字通り「削る」ことである。また、粘杆とは「付着、粘着」の意味である。つまり、「斫」と「削」二つの技法による粘杆とは、剣を用いて槍などの長柄武器と対戦する場合に「斫」あるいは「削」を用いつつ足さばきの利を以て敵の武器に粘り着き、相手を不利な状態に陥れて勝利を得るための技法である。

剣と刀は共に短兵であり、両者には「虚を避けて実を打つ」という用法上の共通点があるが、呉氏は中国の剣術である「斫削粘杆」という技法を倭刀の技法にも取り入れたと言うことができる。

5. まとめ

本研究の主要な知見は、以下のように要約される。

1. 13世紀のモンゴル軍侵入が契機となって剣は再び軍隊で用いられるようになったが、明代に入ると軍では完全に廃れ、民間においてのみ武術技能の一つとして護身・健康・娯楽などを目的に剣術が行われた。また、民間においても剣術を伝習する者の数は決して多くはなく、高度な剣術を会得している者はさらに稀少であった。
2. このような背景の下で一部の武術家は明の嘉靖（1522-1566年）以前に遺失した剣訣歌及び古剣法の収集を行った。こうして収集された剣術文献史料のうち最も重要な資料が2点あり、それは唐順之の『武編』と茅元儀の『武備志』に記されている「剣訣歌」と茅元儀の『武備志』に収録されている『古剣法』の「勢法篇」及び「二十四劍勢」である。
3. 「剣訣歌」の剣法は左右の手にそれぞれ剣を持って攻防を行う「双剣技」であり、また「套路」（日本の武道における「形」に相当する）のよう

に攻防動作をいくつも連続させて一連の流れとして稽古するものではなく、複数の独立した攻防動作を基礎に構成された連続技、すなわち剣技のコンビネーションである。

4. 『武備志』に収録されている『古剣法』は古代中国から朝鮮の地に伝わった剣法である。その「勢法篇」と「二十四劍勢」は本来二つの別の作品であった可能性があり、後世の人がこれら二つの作品を合わせて「朝鮮勢法」と名付けたと考えられる。また、勢法の説明に特徴的な勢名が使用されていることから考えて「二十四劍勢」という作品は少なくとも宋代以降に成立したと考えることができる。
5. この時期の民間武術には片手による剣術、すなわち現在「单手剣技」と呼ばれる剣法が存在していた。呉叟の『手臂録』に記されている「剣訣」（本論文では「前剣訣」と記す）と「後剣訣」は「单手剣技」に関する代表的な作品である。「前剣訣」では剣法の動きを足の移動、左右中の構え、虚实の変化によって説明しており、「後剣訣」では真つすぐ進んで真つ直ぐ刺突することこそが要領であると強調されている。また、斫と削による粘杆という技法は剣法における重要な技法として刀術にも取り入れられた。

注

- 1 清・張廷玉：『明史』巻289、「花雲伝」、北京中華書局、1974年復刻版、pp.7408-7409。
- 2 清・查繼佐：『罪惟録』、列伝の巻8、「華雲龍伝」、『中国野史集成』編委会、四川大学図書館：『中国野史集成』、第16冊、1993年、巴蜀書社、p.202。
- 3 明・戚繼光：『練兵實紀雜集』巻5、「軍器解」、中華書局、叢書集成初編本による、1985年復刻版、pp.220-221。
- 4 明・何良臣：『陣紀』、巻2、「技用」、中国人民解放軍出版社、遼沈書社：『中国兵書集成』、第25冊、1989年復刻版、p.726。
- 5 明・茅元儀：『武備志』、巻104、「器械三・剣」、中国人民解放軍出版社、遼沈書社：『中国兵書集成』、第31冊、1989年復刻版、p.4322。
- 6 清・張廷玉：『明史』、巻124、「鄭定伝」、北京中華書局、1974年復刻版、p.3717。
- 7 清・張廷玉：『明史』、巻130、「何真伝」、北京中華書局、1974年復刻版、pp.3834-3835。

- 8 黄暉の『蓬窗類記』, 卷3, 『中国野史集成』編委会, 四川大学図書館: 『中国野史集成』, 第37冊, 1993年, 巴蜀書社, p.169。
- 9 清・張廷玉: 『明史』, 卷298, 「徐舫伝」, 北京中華書局, 1974年復刻版, p.7625。
- 10 清・張廷玉: 『明史』, 卷270, 「沈有容伝」, 北京中華書局, 1974年復刻版, p.6938。
- 11 清・張廷玉: 『明史』, 卷253, 「劉宇亮伝」, 北京中華書局, 1974年復刻版, p.6536。
- 12 明・高濂: 『遵生八牋』, 卷15, 「燕閑清賞牋」中卷「琴劍」, 人民衛生出版社, 1994年復刻版, p.591。
- 13 明・何良臣: 『陣紀』, 卷2, 「技用」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第25冊, 1989年復刻版, pp.726-727。
- 14 明・鄭若曾: 『江南經略』卷8上「兵器総論」, 文淵閣四庫全書, 子部。第728冊, 台湾商務印書館, 1988年復刻版, p.427。
- 15 明・茅元儀: 『武備志』, 卷104, 「器械三・劍」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第31冊, 1989年復刻版, pp.4323-4324。
- 16 明・趙本学, 俞大猷: 『重刊續武經総要』(八卷)『統修四庫全書』(959冊)・子部・兵家類, 上海古籍出版社, 2002年復刻版, p.460。
- 17 明・俞大猷: 『正氣堂集』の「新建十方禪院碑」「詩送少林寺僧宗擎有序」無谷, 劉志学編: 『少林寺資料集』(上編), 北京書目文獻出版社, 1982年, p.105。
- 18 明・鄭若曾: 『籌海図編』卷12「経略・兵器」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第16冊, 1989年復刻版, p.1329。
- 19 明・唐順之: 『武編』前集卷5, 「劍」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第13冊, 1989年復刻版, pp.799-801。
- 20 明・茅元儀: 『武備志』, 卷86, 「教藝三・劍」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第30冊, 1989年復刻版, p.3391。
- 21 唐・蘇渙: 『懷素上人草書歌』, 『全唐詩』卷255(第4冊)より, 中華書局, 1960年復刻版, p.2867。
- 22 明・茅元儀: 『武備志』, 卷86, 陣練志, 「教藝三・劍」, 中国人民解放军出版社, 遼沈書社: 『中国兵書集成』, 第30冊, 1989年復刻版, pp.3395-3418。
- 23 吳旻: 『手臂録』卷4, 「双刀歌」, 中華書局, 叢書集成初編本による復刻版, 1985年, p.90。
- 24 吳旻: 『手臂録』卷4, 「劍訣」, 中華書局, 叢書集成初編本による復刻版, 1985年, p.89。
- 25 六法とは一般的に「規・矩・權・衡・準・繩」と解釈されるが, ここではあくまで剣法を指しているため, 六法が何であるかは不詳である。茅元儀の『武備志』卷86「教藝三・劍」に記されている剣の「勢法」によれば, 撃・刺・格・洗・掲・撩(掠)・掀(挑)・剪(磨)・斬などがあるとされる。
- 26 吳旻: 『手臂録』卷4, 「劍訣」, 中華書局, 叢書集成初編本による復刻版, 1985年, p.91。
- 27 吳旻: 『手臂録』, 卷3, 「单刀図説」, 中華書局, 叢書集成初編本による復刻版, 1985年, p.61。

(2012年12月13日 受理)

原著論文

英語の文法力と英文シナリオ理解力の相関性に関する一考察

望月好恵

A Correlative Study between English Grammatical Knowledge and the Comprehension of Transcribed English Dialogues

Yoshie MOCHIZUKI

Abstract

Some data taken from English courses for freshman and sophomore college students is presented in this paper. Materials for those courses are scripts of movies or dramas—"transcribed dialogue." Every week, students are presented with a translation quiz. They are asked to translate a small portion of English dialogue into Japanese. They are allowed to consult their dictionaries. In this way, their grammatical knowledge is emphasized and made measurable. At the end of the semester, a final exam measures students' cumulative English knowledge.

A certain correlation between average quiz scores and final exam scores suggests that students with more grammatical knowledge have a greater understanding of conversational texts. Conversely, test scores suggest that students with lower grammatical knowledge have trouble understanding transcribed dialogue.

The words, "appropriate language activities should be conducted in English" are specified in the revised government course curriculum guidelines for high schools. More emphasis will be placed on English speaking skills in high school curricula to the detriment of more basic English language requirements such as grammar and vocabulary. However, this study asserts that grammatical knowledge should be emphasized earlier for junior high, high school, and college students to understand spoken English.

キーワード：文法力，英文シナリオ理解，相関性，学習指導要領

1. はじめに

学校教育の英語授業に「オーラル・コミュニケーション」という科目が登場したのは1989年。同年に告示された中学校学習指導要領には、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」という文言が明記された。学校教育におけるオーラル・コミュニケーション重視の方向性は、それ以前の英語教育に比べ、より効果を上げたのかどうか、全国的に実証的に見直されることなく、現在に至っている。⁽¹⁾

文部科学省は2002年に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想—英語力・国語力増進プラン」を策定し、2003年には「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を示してきたが、近年、一層オーラル・コミュニケーション重視の方向性が打ち出されている。2008年、小・中学校の新しい学習指導要領が、2009年には高等学校学習指導要領が告示され、2011年から順次施行されている。

2011年度から、小学校における外国語活動が必修化され、2012年度は中学校における英語の授業時間が週

3 コマから 4 コマに増やされた。2013 年度には、高等学校における英語の授業は英語で行うことが基本とされる。中学校での英語の授業数が増やされたことは歓迎されるべき点であるが、これは、一度減らされた時間数が元に戻ったということである。⁽²⁾ 特に疑問の声が上がっているのは、小学校の外国語活動の必修化と高等学校の「英語の授業は英語で行うことが基本」と明記された部分である。

こういった学習指導要領の方向性や、経済界からの、学校で使える（話せる）英語を身につけさせるように、という圧力に対して、疑問と反対意見を表明している人たちは多い。例えば、大津由紀雄氏は、2008 年に、教育再生懇談会に対して「英語教育の在り方に関する要望書」（全文は『危機に立つ日本の英語教育』に掲載されている）を提出している。

また、学習指導要領で使われている「コミュニケーション」という語が明確に定義されないまま話が進められていることも問題である、という指摘もある。一体、何ができれば「コミュニケーション」力があると言えるのか、目標が明確にされていないのである。

さらに、パブリック・コメントの「オーラル・コミュニケーション」を重視して文法などの基本をおろそかにするのは問題ではないか」といった趣旨の問いかけには、「学習指導要領には、話す能力だけでなく、4 技能をバランスよく伸ばす、と明記している」という内容で回答されている。しかし、一コマの授業の中で会話の練習もし、同時に 4 技能をバランスよく伸ばすことを目標にしても、授業時間数も一クラスの生徒数も改善されないままでは、これまでのオーラル・コミュニケーションの授業以上に困難な状況が予想される。あれもこれも望ましいことは次々に教育現場に要求していくといったやり方は常識から判断しても無理がある。刈谷剛彦氏は『格差社会と教育改革』の中で、日本の教育の議論に見られるこのような態度、すなわち、それをどうこなしていくのか、キャパシティを考えないで、いいと思うものは何でもリストに加えていくという態度を、教育の場に適さないものとして批判している。⁽³⁾

授業中に英語を話すために割かれる時間は、確実に文法等の基礎力に費やす時間を侵食する。⁽⁴⁾ 2012 年現在の大学生は英語の語彙数も文法事項も軽減された授業を受けてきた。⁽⁵⁾ それより前の世代に比べて文法力が低いとしたら、英語で会話する時間を何割か増やしたとしても英語力養成に関して十分な成果は得ら

れないと考えられる。実際、大学生においても、英語の授業で良い成績をあげるのは基本的な文法力を身につけている者が多いと筆者は実感している。

本稿では、大学 1・2 年生を対象にした英語授業で得られたデータを分析する。教材は映画やドラマのシナリオ、すなわち、会話テキストである。⁽⁶⁾ 毎回、小テストという形で、会話の一部を各自が辞書を使用して日本語に直す。辞書使用可であるから、このテストでは語彙力ではなく文法力が測られることになる。学期末には学期中に扱った英文テキスト（シナリオ）全体を範囲として、テキストの理解度を測る期末テストを行う。この小テストと期末テストの結果を比較検討する。英語の会話テキストの理解度も文法力と相関性があることを示すことを試みる。

2. 英文シナリオを日本語に訳す

以下で取り上げるのは、法学部 1・2 年生対象、1 クラス 40 名、英語（regular reading）の授業で得られたデータである。受講生はシラバスを参照して希望するクラスを受講する。1 年生のとき受講した学生が 2 年生でも同じ教員の授業を再び希望して受講することがあるので、各教員は 2 年連続して同じ内容の授業をしないことが前提となっている。

当該の授業で扱う英文テキストは映画・ドラマのシナリオであるが、法学部の学生が興味を持てるよう、法廷でのやり取りが含まれる題材を選んでいる。

2.1. なぜ法廷シーンを含む英文シナリオか

西洋には優れた法廷ドラマが多い。言葉で相手を説得することが求められる社会だからだろう。空気を読んでお互いの本心を察することに神経をとがらせる日本社会とは対照的である。シェークスピアの『ヴェニスの商人』も、見せ場はポーシャが裁判官に変装して「契約書に記されていないから、血は一滴も流してはならぬ」と判決を下すまで語り進める裁判のシーンである。日本で同じような状況になったら、窮地に陥った男女を救うために水戸黄門が現れて印籠を出して事態を収めてしまう、という展開になりそうだ。つまり、言葉を用いて相手を説得することにはならないということである。

しかし、そのような日本国内だけで通用する問題解決の方法は時代遅れなものになりつつある。

新学習指導要領にも「言語活動の充実」が謳われ、次のように述べられている。

「知識社会の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化中、次代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている。」(下線は筆者による。)

ここに記されている通り、現代のグローバル社会を生き抜くために、日本人はもっと活発で中身のある言語活動を行うようにならなければならない。そこには、異なる文化を背景に持つ者同士が様々な場面で意見を交わし、対立点があればそれを明確にし、妥協点や解決策を言葉を通じて探っていかなければならない時代になった、という認識がある。

法廷や裁判は、まさに、互いの主張を対立させ、言葉で戦い、言葉で妥協点を探す場である。言語を通じて関係を築き、争いを解決する能力は、現代の若者が身につけなければならない生きる力の一つである。

そのような観点からすれば、法学部の学生に限らず、日本の若い人はもっと欧米の映画やテレビドラマに接して、「私はそうは思わない」と誰かが述べるところからこそ物語が始まることを知るべきである。法廷・裁判を含んだ作品を見て、「私の意見を察してほしい」という甘えは許されないこと、言葉で証明して相手を納得させるために努力することの意義を学ばなければならない。そのような背景も考慮して、英文テキストは、法廷シーンや、裁判にかかわる登場人物のやり取りから取り上げている。

2.2. テストの内容

2.2.1. 小テストの内容・採点基準

授業は次のように進めている。毎回、A4で4ページ程度の英文シナリオを配布する。その英文に該当するシーンは、映像で確認する。その際、日本語字幕をつけたままにする。日本語字幕は、1秒間に4文字しか提示できない(16文字の台詞なら4秒間画面に提示しておかなければならない)という制約があるので、もとの英語とはかなり違った表現になることがある。それでも、交わされる言葉の「内容」は理解することができる。学生は、映像を見てその内容を確認し終わったところで、教員に指定された箇所を各自で日本語にする作業に入る。辞書使用可である。本稿ではこれを小テストと呼ぶ。

小テストの採点基準は以下のようである。

英文を5つの箇所に区切り、減点法で採点する。5

か所全部正解の場合は5点。各箇所、いくつか挙げである採点ポイントに抵触する間違いが一つでもあれば、-1点とする。複数ポイントにわたって間違えても、一つの区切りで減点するのは1点のみである。5か所全部で間違いがあれば、得点は0点になる。但し、学生に返却する小テストの答案には、出席点15点を加えた点数を記入しているので、以下のデータも小テストの得点は、0点~5点ではなく、15点~20点の範囲で動く。⁽⁷⁾

学生は、日本語字幕つきで映像を見て内容を確認した上で、英語の台詞を日本語にする。知らない単語は辞書で調べられる。辞書に載っていない可能性があるような表現は※をつけて意味を記載している。そのような条件のもとであれば、全員がほぼ満点になるのではないかと考えられそうだが、必ずしもそうではない。

実際に授業で扱ったテキストを一部、以下で取り上げてみる。

Kingsfield: The facts of *Carbolic Smoke Ball*. Miss Farranti?

スモークボール裁判の事実関係を。ファランティ君。

Farranti: This is a case where the defendants entered an advertisement in the *Pall Mall Gazette* November 1891 stating that a £100 reward would be paid by The Carbolic Smoke Ball company to any person who contracted influenza or a cold or any disease caused by taking cold after using the ball 3 times daily for 2 weeks according to the directions. Now, on the strength of this advertisement a Mrs. Carlill bought a smoke ball, used it according to the directions until she developed influenza.

※ a + 固有名詞: …という人

Kingsfield: What were the reasons for the court's finding in favor of Mrs. Carlill?

※ finding:《法》(裁判所の)事実認定;《陪審の》評決
裁判所が夫人に有利に判断した理由は?

このテキストのうち、Farranti (ファランティ (ハーバード・ロースクール1年生の女性の名前))の台詞を日本語にしてもらった。(時間は約25分間となっている。)

具体的な採点の基準となるポイントを次に挙げる。

① This is a case where the defendants entered an

advertisement in the *Pall Mall Gazette* November 1891

「これは以下のような事例〔裁判／案件〕です。被告は1891年11月、ポール・モール〔ペル・メル〕・ガゼット〔新聞〕に、ある広告を載せました。」

- (a) 関係副詞節 (where = in which) は文末まで。
- (b) enter の意味は、「入る」ではなく「…に載せる」。
- (c) 関係副詞節を先に訳して、「…事例です。」のように最後に case を訳出してももちろん可。

② stating that a £100 reward would be paid by The Carbolic Smoke Ball company

「カーボリック・スモーク・ボール社によって100ポンドの見舞金〔報酬〕が支払われると述べる (→広告)」

- (a) 全体が advertisement にかかる修飾節である。
- (b) £は、「ドル」ではなく「ポンド」。
- (c) 「…社が払う」と能動態にしても可。

③ to any person who contracted influenza or a cold or any disease caused by taking cold

「インフルエンザや風邪、または風邪をひいたことによって引き起こされるあらゆる病気にかかった人、誰に対しても」

- (a) contract は「契約する」ではなく「[[病気]にかか]る」。
- (b) 肯定文中の any の訳語、「どんなもの〔人〕でも」。
- (c) caused by taking cold は any disease のみ修飾し、その前の influenza や cold にはかからない。

④ after using the ball 3 times daily for 2 weeks according to the directions

「(問題となっている〔スモーク・ボール社の〕)丸薬を、使用法に従って、1日3回、2週間使った後で)」

- (a) ball は「丸薬」でも「ボール」でも可。
- (b) according to … は「…に従って」。「…によって」は減点対象。
- (c) directions は「(薬の) 使用法〔説明書〕」。

⑤ Now, on the strength of this advertisement a Mrs. Carlill bought a smoke ball, used it according to the directions until she developed influenza.

「さて、この広告に力を得て、カーリル夫人という人がスモーク・ボールを買い、インフルエンザを発症するまで使用法に従って服用しました〔使用法に従って服用し、インフルエンザを発症しました。〕」

- (a) now は、間投詞、「さて〔そこで〕」。「今」でも減

点しない。

- (b) on the strength of … は「…をもとに」でも「…に力を得て」でも可。
- (c) until の前後は、訳文にあるように、どちらを先に訳しても、「服用して」「発症した」の順序が間違っていなければ可。

この採点基準で学生(37名)の答案を採点したところ、クラス全体の平均点は、17点だった。

上記の①から⑤の5つの区切りのうち、3つの区切りで、採点基準に抵触する何らかの間違いがあり、平均3ポイント減点だったことになる。

この回の小テストの最高点は19点で、6名。最低点の15点は4名だった。

十分な文脈が与えられていて、辞書使用可であっても、英語の会話テキストを日本語にすることは意外に難しい。勿論、Farranti はハーバード・ロースクールの学生であるから、ごくふつうの人に比べたら難しい語彙も使うし、論理的な話し方もするだろう。しかし、これはあくまでも話し言葉であり、会話に出てくる英語なのである。⁽⁸⁾ 学生たちは将来、Farranti のような人々と切磋琢磨する職場に身を置く可能性がある。日本国内の企業でも、社内公用語を英語にする会社が出てきている。厳しい市場経済の世界で、ビジネスマンの言葉が貧しい語彙と中途半端に論理的な文で構成されて問題がない、とは考えられない。「大学を出たら、各自の仕事の分野で英語が使えることを望む」というのであれば、Farranti の台詞のような会話テキストを理解できるだけの英語力を身につける必要があるのである。

もっとシンプルな英語表現でも正しく読めないことがある。例えば、次の会話テキストをみてみよう。

Devasher: This brother's doing time.

※ do time: 服役する

この兄貴っていうのがムショに入ってるんだ。

Avery: How did you find that out?

どうやって調べたした？

Devasher: What do you think I am here, a fucking night watchman?

あんた、俺がここで何をしてると思ってるんだ？ 夜勤のガードマンだとしても？

Avery: I get confused sometimes.

ときどき、ごっちゃになるよ。

Devasher: Well, don't!

ふん、ごっちゃんにするな！

上の会話を日本語に直させると、第3番めの台詞にある、What do you think I am here, ...? の文を、「あなたは私がここにいるのを何だと思いますか」と誤訳する学生が少なくない。

この文は、文脈から判断すると例えば、I am a security manager here. のように、「わたしはこのスパイ対策責任者です[スパイ対策責任者の仕事をしています]。』といった肯定文に対応している。しかし、下線の部分を尋ねるため、疑問文、what am I here? ができ、この文頭に Do you think が加わるので、what は do you think の前に来る。間接疑問文になったので、am I here の語順は I am here の語順になる。誤訳をした学生は、このような基本的な構文分析ができていないことになる。

小テストは採点后、翌週に返却し、採点基準の各ポイントについて、すべて解説している。解答例を与えた後で、「これが論理的構造なので、日本語として自然な表現になるように、各自直してくればよい」と付け加えている。翻訳家の鴻巣友季子氏が『翻訳教室はじめの一步』で示しているように、これでは駄目だ、というような翻訳文は基本的にはないと筆者も考える。当該の授業では翻訳の領域までは踏み込まないが、話者の言いたいことを適切に捉えてできるだけふさわしい日本語の表現を探ることを奨励している。但し、その日本語を見て、逆に英語に訳してもらうとき、「この日本語では、もとの英語表現を誰も思い浮かべないだろう」というような飛躍しすぎた日本語訳は減点することになっている。構文分析ができた上でその訳になったのかどうか分からないからである。

毎時間、学生は解説を聞いていれば自分がどこで間違えたのかを明らかにできる。採点に問題があれば、その時間内に申し出るように周知している。筆者は大手予備校で英語試験採点の仕事に携わり、第3者から採点のチェックを受けていたので、採点基準に従って正確に採点する訓練は十分に積んでいる。今回データとして用いる小テストの採点結果については、客観的に正確な得点が表示されていると考えて問題ないと思われる。さらに、辞書使用可なので、単語の意味がわからなくて訳せないということは起きないし、単語の誤訳は構文分析ミスに伴うものが大半である。したがって、小テストの得点は個々の学生の文法力を概ね正し

く測っていると考えられる。

2.2.2. 期末テストの内容・採点基準

期末テストは毎学期、同じ形式で行っている。その学期で扱った英文シナリオ(A4で約50頁)全体を出題範囲とする。日本語訳の問題のみ、小テストで扱った範囲に限る。(試験時間は70分間。)

出題と配点は以下のようなものである。学生の答案の一部を例として図1～図4で示す。

①空所補充：各1点×30問=30点

補充すべき単語、30語は提示してあり、そこから選んで入れる形になる。

(例)



図1

図1の答案では、(2)の4番目の()に入れた語が間違っているが、正解は against である。ここに knows を入れては英語の構文としても成立しない。against ではなく knows を選択したということは、The Crown's case against them is that ... の英語を読む(聞く)とき、それが「彼らに対する検察側の主張は…ということです」の意味内容であることを理解できないであろうことを示している。

②整序：各2点×10問=20点

(例)



図2

図2の(1)では up to の位置が違っている。この間違いは、for up to a year で「1年間まで」の意味に

なることが理解できていないことを示している。

(2) については、riot squad で「機動隊」の意味になることが理解できていない、というのが示されている。

③適切な形に直す：各2点×10問=20点

(例)

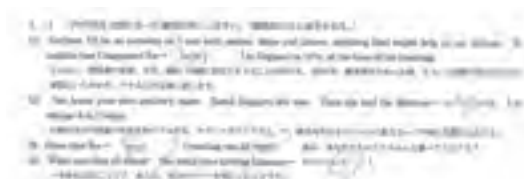


図3

図3の(1)の正解はto beである。happen to [動詞の原形]で「たまたま[偶然]…」の意味であることが理解できていない。

(2)の解答unfortunateは、これを発話する場合は、聞き手がmisfortuneと言いたいのだろうと判断してくれる可能性がある。しかし、この解答をした学生がmisfortuneを読んで(聞いて)その意味を正しく理解できるかどうかはわからない。理解できない可能性がある。

④日本語訳：各5点×6問=30点

(例)



図4

図4の答えは構文分析は適切であるが、enterの意味がふさわしくない。その部分で1点減点され、得点は4点になっている。

以上、計100点。学期によって、日本語訳の問題が各6点×5問になるなど多少の変化はあるが、概ねこの構成で出題している。⁹⁾

3. 分析と考察

期末テストは事前に周知な準備をして臨めば高得点が取れる可能性がある。しかし、普段小テストの成績が振るわないのに期末テストの得点では上位に入っ

た、というような採点結果を得た経験はほとんどない。

経験的に、小テストで測られる文法力が期末テストの結果も左右するということを感じていたが、実際にはどうなのか、数字を挙げて比較してみる。

3.1. 小テスト平均点と期末テスト得点の相関性

一学期間を通した個々の学生の小テストの平均点と期末テストの得点の間に何らかの傾向があるかを見るために、具体的なデータを提示する。

データは次のA・B・C・D、4クラスのものである。AクラスとBクラスについては2012年度前期の成績が、CクラスとDクラスについては、2011年度前期・後期、2学期間のデータがある。前期・後期の区別をそれぞれ(1)・(2)で示すと、学期とクラスの対応は以下のようになる。

2011年度 (前期)	2011年度 (後期)	2012年度 (前期)
Cクラス(1)	Cクラス(2)	Aクラス
Dクラス(1)	Dクラス(2)	Bクラス

図5は各クラス、各学期の得点データである。

「期末テスト 得点と順位」とあるグラフは、期末テストの得点を高得点者から順に並べたものである。

「学生間的小テスト平均点の比較」は、期末テストで高得点を取った者から順に、その期の小テストの平均点を取り、折れ線グラフにしたものである。

例えば、Aクラスの期末テスト1位の学生は、期末テストの得点が90点強。その学生の小テスト平均点は、19点強。同じくAクラスで期末テスト2位の学生は、期末テストが約85点、小テスト平均が約19.5点である。

「10人単位の小テスト平均点の比較」は、期末テストの得点順位によって、1位～10位、11位～20位、21位～30位、31位～40位(授業放棄の学生が出るため38位、39位で終わるクラスもある)の4つのグループに分け、各グループに含まれる学生の小テスト平均点の平均点を出したものである。

「学生間的小テスト平均点の比較」は、どのクラスのものを見ても山あり谷ありである。例えば、Aクラスで期末テスト順位2位の学生は、期末テスト順位1位、3位の学生より小テスト平均点が高いため、順位2位の学生の部分で山ができています。しかし、全体的

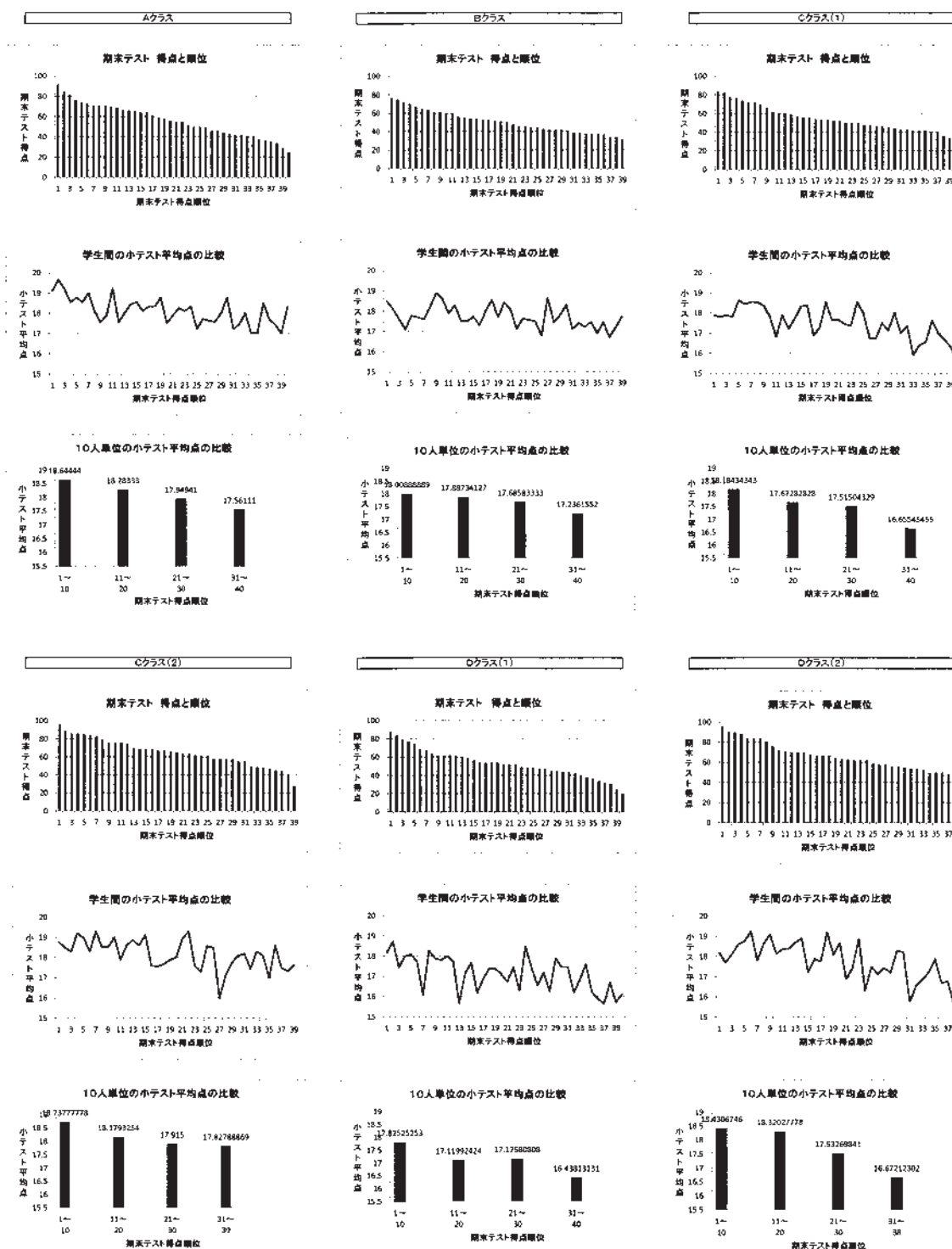


図 5

に見ると、折れ線グラフは「期末テスト 得点と順位」の右下がりに沿った傾きを示している。

「学生間の小テスト平均点の比較」が全体的に右下がりの傾向を示していることを数値で表すために、上位から10人単位で「小テスト平均点」の平均点を出した。だいたいどの10人単位グループで比べても、上位グループのほうがその右隣のグループの得点より高くなっている。

唯一の例外が、Dクラス（1）に見られる。11位～20位グループと21位～30位グループで、21位～30位グループのほうが、0.056点（小数第4位以下四捨五入）上回っている。しかし、小テストの得点が15点から20点の間で変動することを考えれば、5点の変動幅があるうちの0.056点であり、期末試験得点の偶然誤差も考慮すれば、逆転と言えるほどの差ではなく、ほぼ同点とみなしてよい範囲に含まれるであろう。

図5のグラフ群から、期末テストの得点と小テスト平均点の間には相関関係が認められたと判断してよいだろう。文法力を測る小テストの得点と、会話テキストの理解力を測る期末テストの得点の間には相関関係があることが示されたことになる。

3.2. 文法の意識化による小テスト平均点の向上

今回の分析を通じて、経験上予測できていなかったことで興味を引かれるデータがあった。

2011年度に1年生でCまたはDクラスに出席していた学生で、2012年度、2年生になってからもA・Bクラスで筆者の授業を受講した学生が7名いる。この7名に関しては3学期連続してデータがあることになる。期末テストの得点と小テスト平均点を抜き出してみた。各学生の得点は表に示されている。

表中の小テスト平均点は小数第2位以下を四捨五入したものである。期末テストの得点については、3学期とも比較的高め、比較的低め、といった程度のことしか言えないが、小テストの平均点の推移については一定の傾向が認められる。2011年度前期と2011年度後期の小テスト平均点では、7名すべての学生について、後期のほうが点数が上がっている。

2011年度後期と2012年度前期を比較すると、NO.3とNO.5の2名がそれぞれ0.1点、0.7点下げている。NO.2は同点だが、正確には、18.1から18.1111…と微増している。他の学生は、この期間にも平均点を上げている。NO.3とNO.5は、この期間に平均点を下げたが、1年前の2011年度前期と比較すれば、それぞれ、0.5点、0.8点高い平均点を取っている。

この7名については、クラスの中で英語の成績が上位・中位など、どのレベルに属するか程度は把握していたが、各学生が少しずつでも小テスト平均点を上げていることは気づかなかった。小テスト平均点で2点の差があるとする、採点している側としては、かなりの英語力の差があると感じられる。0.5点、0.8点の伸びは小さくはない。

1年前と比較すると7名全員が平均点を上げているということは、実際に文法力が上がったかどうかは別として、少なくとも、文法をより意識して小テストに臨むようになったことが考えられる。小テストに取り組んでいるとき、学生たちは集中して辞書を引いている。答案をチェックしていると、辞書の引き方が回を重ねるごとに丁寧になっていくことが伺える。関連する文法事項を辞書の例文の中で探す姿勢ができたために得点が上がったということは大いに考えられる。

データを取った授業の英語テキストはすべて話し言

表 3 学期連続して受講した学生のデータ

個別学生の3期の小テスト平均点 得点推移			
学生 NO.	2011前期 小テスト	2011後期 小テスト	2012前期 小テスト
1	18.5	19.1	19.2
2	17.8	18.1	18.1
3	17.9	18.5	18.4
4	17	17.6	18.3
5	16.8	18.3	17.6
6	15.9	16.8	16.9
7	16.7	17.8	18.1

個別学生の3期の期末テスト 得点推移			
学生 NO.	2011前期期末 テスト	2011後期期末 テスト	2012前期期末 テスト
1	72	83	69
2	57	55	71
3	78	76	65
4	40	67	55
5	60	84	71
6	34	48	38
7	52	67	60

葉の英語である。したがって、相手の話す英語をより適確に理解するには、文法力を上げることが必要になるはずである。⁽¹⁰⁾

しかし、この点について一般の人々の間に誤解があると考えられる。次節ではその誤解を取り上げる。

4. 会話と文法は別のものだ、という誤解

学校の授業科目の中でも、英語という科目ほど一般の人によって議論される科目はないであろう。それらの議論の中には様々な誤解が含まれている。

堀口誠信氏は堀口(2011)「英語教育に関する啓蒙活動の必要性：『英文法通りでは生きた英語にならない』に見られる誤解」において、それらの誤解を構造的に分析している。その中で指摘されている一つの誤解が「話し言葉の英語は文法などのルールに従って構築されたものでなく、何か一瞬のひらめきや実践への慣れで出来上がる」というものである。英語教師や言語学・英語教育学など関連専門分野に携わる人々には、それは誤解に過ぎない、という共通認識があるが、一般の人々の間にはそのような思い込みは確かに存在する。

以下では、会話・話し言葉の英語に文法力は関係がない、という誤解が生まれる背景を概観する。

4.1. 英語または文法が苦手、という思い込み

必要以上に、自分は英語ができない、と思い込んでいる日本人は多い。朝日新聞の社会部長、山中季広氏は、朝日新聞の「ザ・コラム」で日本人の英語苦手意識について言及している。関連箇所を引用する。

… 教授も長野五輪の際に滞日したほか、日本からの留学生とも接して日本人の英語のくせに通じている。「目立つのは、自分は英語が話せないという思い込み。実は結構できるのに、会う人会う人みな英語に驚くほどのコンプレックスをお持ちです。英語の公用語化を議論する前に、苦手意識を和らげたほうが良いと思います」

言われるまでもなく、私たちの英語苦手意識はかなり根深い。しかも津々浦々まで浸透している。理由のひとつは、社会全体が英語力を問いすぎることではないだろうか。中1（今は小5！）から高校まで毎週のように試され、大学入試でも英語はまず避けて通れない。就職後も、TOEIC 試験を無理強いされたり、ユニクロや楽天では英語が公用語とされ

たり、試練が続く。ここまで延々痛めつけられれば、老若男女あげて苦手意識に染まるのも当然だろう。⁽¹¹⁾

上の記事に出てくる「教授」とは、外国人向け英語教育の第一人者、ビル・エギントン教授である。教授は「実は結構できるのに、会う人会う人みな英語に驚くほどのコンプレックスをお持ちです」と述べている。日本人と他の国の人とを比べることができる専門家によってこのように言われるのであるから、日本人は結構英語ができるのである。それにもかかわらず英語コンプレックスが非常に強い。

この記事を書いた山中氏本人も2001年の署名記事に、日本人の英語コンプレックスについて次のように書いている。「有礼や漱石に限らず、英語に寄せる日本人の思いはねじれている。モンゴル語をうまく話せなかったと傷つく人は少ないが、英語となると私もあなたも内心大騒ぎする。」⁽¹²⁾

一般の人々の中には、英語を話すには文法・語法等英語基礎力は横に置いておいて、別の教授法を採用しなければいけない、例えば、教室にネイティブ・スピーカーの AET（外国語指導助手）を呼んできて、歌を歌ったり、ゲームをしたり、ダンスしたりする必要がある、と考えている人がいる。しかし、それは本当に有効な教授法なのだろうか。2011年度に小学校で必修化された外国語活動については、児童・保護者・担当教員たちから様々な不満が出されているということが、新聞記事等でも報告されている。鳥飼久美子氏が『危うし！小学校英語』や『「英語公用語」は何が問題か』で強調するように、英語に関しては多くの日本人が冷静に対応できていない。そもそも、全国民に学校教育の中である程度使える英語を習得させることが現実的に可能なのか、仕事で使える英語とはどの程度のものなのか、といった根本的な問題が、一般の人々の間ではほとんど顧みられていないのである。

日本人の英語コンプレックスは、そのまま文法コンプレックスにもなっていると考えられる。必要以上に文法ができないと思い込んでいる人が多いのではないだろうか。少なくとも、センター試験導入前の共通一次試験世代までの人々には、現在よりも授業で文法を学ぶ時間が多かったこともあり、文法力はある程度ついているのである。『たかが英語、されど英語―日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』の中で著者の星野三喜夫氏は、ニューヨーク赴任中に現地の人から

「お前は俺よりずっとしっかりした英語を使うが、一体どこで習ったのか」とよく聞かれた、という経験を書いている。⁽¹³⁾ もちろん日本で習ったのだが、星野氏は日本人の英語は文法がしっかりしていることを認めて、それを生かすようにと読者を励ましている。

必要以上の文法コンプレックスが、英語の会話と文法は関係ない、という誤解を導く一因になっている可能性は高いと考えられる。

4.2. 日本人だけが英語に苦労するという思い込み

楽天の社長である三木谷浩史氏が記した『たかが英語!』には、2011年8月末にハーバード・ビジネス・スクールのケース・スタディとして発表された論文に、楽天の社内公用語英語化プロジェクトに関する取り組みが上げられたことに関する顛末が書かれている。⁽¹⁴⁾ 社員は社長が想像しているよりもはるかに強いストレスを感じていた、という点も興味深いし、ハーバード・ビジネス・スクールの留学生たちが、英語の習得に苦労した自分の経験と照らして、このケース・スタディが自分のことを描いていると語った、という点は一層興味深い。

ハーバード・ビジネス・スクールで学ぶ留学生たちは知的エリートであるが、それでも彼らにとって外国語である英語を習得することは大変困難なことであり、楽天の社員の人たちの苦労は他人事ではなく、まさに自分のことなのである。

日本人が英語を学ぶことと逆の状況を参照してみよう。英語のネイティブ・スピーカーが日本語を学ぶ場合である。筆者は留学生に日本語を教える授業も担当しているが、1年間日本に暮らしていても「て形」を使いこなせるようになる英語ネイティブ・スピーカーは多くはない。「て形」というのは、「書いてください」「立っています」というようなごく基本的な表現にも必要な動詞の活用形なのだが、これが獲得できないまま1年を過ごしてしまった留学生を何人も見てきた。英語と日本語は仕組みが非常に離れている。韓国人が日本語を、日本人が韓国語を学ぶ場合と比べると、ずっと時間がかかるのである。

文法を学ぶという苦労を経ずして外国語を身につけることはできない。その苦労は日本人が英語を学ぶ場合だけに伴うものではない。母語と構造が大きく異なる外国語を学ぶときには誰でも大きな困難を感じる。しかし、その点が見過ごされているために、自分たちは必要以上に文法に苦しんできたのに英語の会話に参

加できない、と誤った認識を持ってしまうのではないだろうか。そのことが安易に、会話に文法は必要ない、といった誤解に結びついてはならない。

4.3. ネイティブ・スピーカー信仰

楽天の社員の人たちが知的に優れている人たちだということは、週刊誌で紹介されている新卒採用者多数の大学名を見れば理解できる。その人たちも社内で使う言語が英語になることには強いストレスを感じていた。

ところが、それらの人たちもフィリピンで語学研修を受けたら、英語に対する抵抗感が取れたそう。楽天がTOEIC基準点に達していない社員の一部を語学研修に派遣した先が、フィリピンの語学学校である。⁽¹⁵⁾

三木谷社長は前掲の著書の中で、フィリピンの語学学校で研修を受けてきた人たちについて「…TOEICテスト対策としてはあまり効果がなかった。ただ、英語に対する抵抗感を和らげたという意味では、顕著な効果が見られた。それまで英語を話したことのなかった人でも、帰国すると、自分から積極的に英語で話しかけるようになっていたのだ」と評価している。

この事例は、日本人が英語を話すことに対して必要以上にストレスを感じるのは、白人（あるいは英米人）コンプレックスが理由の一つであることを示している。

しかし、楽天のように明確にグローバル化を目指す企業が、社員の語学研修先として欧米ではなくアジア地域のフィリピンを選んでいるということからは、グローバル社会での活動を前提とするビジネスマンにとって、「英会話を習うなら英米人から」というネイティブ・スピーカー信仰はすでに過去のものになっていることが伺われる。

ネイティブ・スピーカー信仰が取れてしまえば、日本人の英語の発音を無用に恥ずかしがることもなくなってくるだろう。末延岑生氏の『ニホン英語は世界で通じる』では、日本人特有の「ニホン英語」は、インド英語や中国英語と同様、国際的に異端視されているわけでもないことが、多数の事例と数値で示されている。⁽¹⁶⁾ 例えば、ラリー・スミス教授による、世界の人々の間で、英語がどの程度理解しあえるかを探る実証的研究の研究結果から、日本人とアメリカ人に関する数値が上げられている。次のような数値である。

- (1) アメリカ人の英語は、アジアの人々に対し55%の伝達率でしかないのに、
- (2) 日本人の英語は、アジアの人々に75%という高い伝達率で理解されている。⁽¹⁷⁾

アメリカ人のように発音したいと思ってその発音を真似ても、アジアで仕事をする場合、伝達率が低くなってしまうことになる。グローバル社会で活動するビジネスマンがネイティブ・スピーカー信仰から自由になりつつあるのは、このあたりの事情を経験的に知っているということもあるのではないだろうか。

ネイティブ・スピーカーの中には、日本人の英語の発音を「悪い」と断定する人もある。例えば、デーブ・スペクター氏は「子どもをカタカナ英語に染めないで」(『40歳の教科書』所収)の中で「日本人の英語の発音は悪すぎる」と述べている。しかし、これは、米国式発音が良い発音だとする米国中心主義と結びつきはしないだろうか。世界の約20億人が英語を使うと言われているが、そのうち英語を母語とする人は約4億人に過ぎない。残りの約16億人はそれぞれの母語に影響を受けた英語を使っている。それが世界の現実である。スペクター氏の意見は世界で様々な英語の違いを許容しながら伝達手段として機能していることを前提としてはいない。やや行き過ぎた一般化であると考えられる。

学校の授業の中で、英語を使って会話をするという言語活動を行う際、その主たる目的はコミュニケーションをはかる力を養うことである。何かを伝達し合うことである。ネイティブ・スピーカー、特に米国人の発音を真似て話すことと、英語を媒介にしてコミュニケーションをはかることは、同義ではない。米国人のような発音で話すことに重点が置かれすぎると、コミュニケーションを支えるはずの文法力が軽視される恐れがあるのではないだろうか。

5. まとめ

大学1・2年生を対象にした英語の授業で得られたデータを分析し、英文シナリオの台詞の理解度と文法力の間には相関性があることを示した。文法力が身についている学生ほど会話を文字化した英文テキストがよりよく理解できる傾向がある。

中学校・高等学校の英語の授業時間数には限りがある。高等学校では英語の授業は英語で行うことを基本とする、と学習指導要領に明記されたが、英語を話す

ことに重点が置かれて、文法等の基礎力を養う時間が少なくなるのではないかと懸念される。文法は学習指導要領にも記されているようにコミュニケーションを支えるものである。文法の学習がお疎かになっては、会話を理解する力も伸ばすことができなくなる。

一般の人々の間には、英語あるいは英語教育について様々な誤解が存在する。そのような誤解の一つが、会話と文法は関係がない、という事実に反する考えである。この誤解の背景には、日本人が英語に対して抱いている複雑な感情がある。学習指導要領でも謳われているように、グローバル社会で生きるために、日本人がもっと言語活動を意識的に行うべきときがきている。同様に、世界で英語がどのように使われているのかに目を向けて、英語に対する誤解や偏見から自由になるべきときがきていると考えられる。

注

- (1) 市川研氏は市川(2006)で、高等学校でのオーラル・コミュニケーション(以下OC)の授業に関するアンケート調査(2大学273名の大学生が対象)の結果を考察している。アンケート項目の一つ「OCの授業であなたは英語でのコミュニケーション能力がついたと思いますか」に対する回答結果は、

- ① 大いについた 4%
- ② ついた 18%
- ③ あまりつかない 41%
- ④ ほとんどつかない 19%
- ⑤ わからない 18%

であった。ここには、オーラル・コミュニケーションの授業の効果に疑問を投げかける数値が示されている。市川氏は「…今ではOCといっても内容は学校、教師によって様々であり、十分に実施されていたわけではない。加えて学校現場では生徒もOCに対して大きな成果があったとは言っていない」としている。2009年の学習指導要領の改訂では高等学校の英語科目は「コミュニケーション英語」と「英語表現」が中心となるが、英語の授業は英語で行うことを基本として会話の要素を強調する以上、まず、これまでのオーラル・コミュニケーション授業の成果が検証されるべきであろう。

- (2) 生徒や保護者のニーズにより敏感な私立中学校においては、英語の授業時間数が週5時間以上ある学校が多い。私立中学校の学校説明会では、英語の授業時間数は十分用意してあるので塾に通う必要はない、

と説明されることがある。主要な受験科目である英語に関して、塾に行く必要がない環境が整っていることは、受験生獲得の一つのセールスポイントとなっている。大方の私立中学校は英語の授業が週4時間では少ないと認識しているということである。

(3)『格差社会と教育改革』pp.11-12.

(4) 岡田伸夫氏は岡田(1990)で、間違わずに正しく英語を理解するためには、a. 文法・文型・語法について正確に把握すること、b. 筆者・話者の気持ち・意図を正確に掴むこと、等が必要である、としている。本稿では、a. の文法・文型・語法をすべて含めて文法と呼び、文法等の基礎力という場合には、文法力に語彙力やb. のために必要な文脈判断力等を加えた力を指す。

(5) 今回の学習指導要領の改訂で、中学校で学ぶ単語数は900語から1200語に、高等学校では1300語から1800語にそれぞれ増やされた。合計して2200語から3000語への増加である。1970年には、高等学校進学コースの単語数は合計して4700語であったことと比較すると、3000語が十分な語数であるのかどうか判断することは難しい。しかし、言語習得の分野の専門家によれば、英語の全語彙数は約100万語で、そのうち4技能にそれぞれ使用される語彙数は、

Reading 25000

Listening 13000 (但し、2200語で99% がカバーされる)

Speaking 2000

Writing 2000~3000

程度であろうと言われている。これらの数字から判断すれば、3000語は、reading 以外の listening, speaking, writing の3技能をカバーするにはほぼ妥当な語彙数であると考えられる。

(6) スクリプトは主に登場人物の台詞から成っており、それに場面の説明などのト書きが加わるが、当該授業では台詞の部分のみを対象とした。登場人物が独白で状況や心情を語る部分も含む。本稿では、会話テキストは、書かれた会話文を指す。また、書き言葉と話し言葉の違いについては、栗原優氏が栗原(2007)で示している、英語における「書き言葉」と「話し言葉(口語)」の代表的な相違、を本稿でも前提としている。栗原氏の挙げる代表的な相違は次の3点である。(①、②の具体的説明については、一部を抜粋。)

①「省略形」の使用

たとえば、“do not” は「書き言葉」であるのに対し

て、“don’t” は一般的に「話し言葉(口語)」として扱われる。

②「高級語彙」の使用

「話し言葉(口語)」において“but”が使われるのに対し、「書き言葉」(論文など)においては一般的に“however”が使われることが多い。

③一文の短文化

一般に「話し言葉(口語)」は「書き言葉」に比べて一文の長さが短い。(栗原(2007), p.39)

英語でも日本語でも、典型的なものは別として、話し言葉と書き言葉の区別を厳密に行うことは困難である。書き言葉だけでも、言文一致体を含め多様なスタイルがあることは中江兆民の『一年有半・続一年有半』でも論じられている(岩波文庫, p.45)。話し言葉についても、スティーブン・ピンカーは『言語を生み出す本能(上)』の中でラボーフの研究を引きながら、話し言葉でも短縮形が使われない事例を提示している。黒人日常英語(BEV)と標準米語(SAE)を比較したとき、ある種の助動詞については、SAEの話し手が通常短縮形を使う(「見た(I’ve seen)」)のに対して、BEVの話し手は短縮しない(I have seen)。ピンカーはこれを、BEVの話し手のほうが言葉を省略する傾向が強い、という一般的な思い込みに反する事実として挙げているのだが、話し言葉では省略形の使用が多い、という基準がすべての英語にあてはまるわけではないことも示されている。

(7) 小テストの返却答案に出席点15点を加えるのには3つの理由がある。第一点は、0点~5点で得点を明記して返却すると、特に0点、1点といった低い点数を受け取った学生の学習意欲が下がったという経験があるので、そのような学習動機の低下を防ぐためである。第二点は、成績評価にかかわる問題である。単位取得可能な学生にはA~Dの成績がつけられるが、Aだけは相対評価で、クラス内で上位20%以内の者に出してもよいことになっている。教員によっては一度でも欠席したらAは出さない、という条件をつけてAの選別をはかる場合もあるが、止むを得ない欠席は誰にでも生じる可能性がある。止むを得ない欠席を挽回できる可能性を残すために、小テスト・期末テストの点数に出席点も含めた素点の合計点数で順位をつけている。第三点は、授業で得た文化的・社会的背景に関する知識事項など、英語力を総合的に上げるために必要な学習事項で小テストや

期末テストでは測れない部分を出席点で評価するためである。そのような意味合いであるならば授業中に眠っている学生には出席点は出せないが、幸い、当該授業に出席している学生は概して真面目であり、出席点を減点する必要に迫られたことはない。

- (8) ハーバード・ロースクールの授業という知的水準の高い場で交わされる言葉だとしても、やはり会話表現であり、話し言葉である。Farranti の話す言葉は書き言葉に近いのではないか、だから文法事項が色々出てくるのではないか、という意見が出される可能性もあるので、Farranti の台詞が典型的な書き言葉からは離れているものであることを示しておく。斎藤兆史氏が『英語達人列伝』で取り上げている英文と比較すれば、その英文と Farranti の話す言葉を同じ「書き言葉」に分類されるものとは考えられないことが了解できるであろう。斎藤氏が例示している英文は以下のようなものである。

Considering our present advanced state of culture, and how the Torch of Science has now been brandished and borne about, with more or less effect, for five-thousand years and upwards; how, in these times especially, not only the Torch still burns, and perhaps more fiercely than ever, but innumerable Rush-lights, and Sulphur-matches, kindled thereat, are also glancing in every direction, so that not the smallest cranny or doghole in Nature or Art can remain unilluminated, — it might strike the reflective mind with some surprise that hitherto little or nothing of a fundamental character, whether in the way of Philosophy or History, has been written on the subject of Clothes. (『英語達人列伝』, p.5)

カーライルの『衣服哲学』から抜粋された文であるが、斎藤氏によれば、「大学の英文科の（平均的な）学生ではとても歯が立たない」この英文を、「英語学習教材がいまとは比べ物にならぬほど貧弱であった明治時代、留学経験もない一八歳の青年が、…スラスラと読みこなしていた」のである。その青年とは新渡戸稲造のことで、斎藤氏により、英語の達人の一人として紹介されている。

- (9) 期末テストは同学期に行う場合でも、例えば、1 時間目 A クラス、2 時間目 B クラスの場合には、A・B、2 クラスの問題は 50% 程度違う内容になっている。したがって、クラス平均点の違いは問題の違いによることも大きいので、期末テストの平均点に

よってクラス単位の英語力を比べることはできない。

- (10) 中学校学習指導要領、第 2 章第 9 節「外国語」、第 2 「各言語の目標および内容等」の中でも、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に結びつけて指導すること」と明記されている。
- (11) 朝日新聞、2012 年 4 月 8 日、「慢心の米国で 受験英語ですがパードン？」
- (12) 朝日新聞、2001 年 5 月 6 日、「旅する記者 50 人 18 シリア・レバノン 屈折した思い 大好きだから大嫌い」
- (13) 『たかが英語、されど英語—日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』, p.265.
- (14) 楽天では、2012 年 7 月から社内公用語が英語になった。
- (15) 楽天が社員を派遣した語学学校も含めて、フィリピンの語学学校が新聞記事（朝日新聞、2012 年 7 月 26 日「英語学ぶならフィリピン」）でも紹介されている。フィリピンでは英語がフィリピン語と並ぶ公用語で、語学学校の講師はフィリピン人である。記事には、学校を視察した会社役員の「欧米人と話すことに気後れしがちな日本人も、同じアジア人の講師の丁寧な教え方や、短期集中型のカリキュラムが研修に向くと思った」という言葉が載せられている。費用もマンツーマン授業の場合、オーストラリアの 5 分の 1 程度で済むという。
- (16) 印象的な事例を二つだけ挙げる。一つは、アメリカ人の作家と日本人の妻がインド旅行をしたときのことである。アメリカ人作家よりも日本人の妻のほうがインド人の英語を理解し、彼女の発音のほうがインド人に理解されやすかったということである。二つ目は、末延氏が中国の大学で英語を教えていたときの話で、アメリカ人の英語教師が中国人学生たちから、発音が聞き取れないから末延教授のようなしつかり区切るしゃべり方をしてほしい、と注文をつけられたことである。
- (17) 『ニホン英語は世界で通じる』, p.137.

引用・参考文献

- 星野三喜夫 『たかが英語、されど英語—日本人の「英語メタボ症候群」の処方箋』, Parade books, 2009.
- 堀口誠信 「英語教育に関する啓蒙活動の必要性：『英文法通りでは生きた英語にならない』に見られる誤解」『徳島文理大学研究紀要』18, 31-42, 2011.

- 市川研 「高等学校英語オーラス・コミュニケーションの実態調査」『聖学院大学論叢』18（3），239-248，2006.
- 刈谷剛彦・山口二郎 『格差社会と教育改革』，岩波書店，2008.
- 鴻巣友季子 『翻訳教室 はじめの一步』，筑摩書房，2012.
- 栗原優 「新聞記事に見られる『書き言葉』と『話し言葉（口語）』の混同についての一考察」『駿河台大学文化情報学部紀要』14（1），39-43，2007.
- 三木谷浩史 『たかが英語！』，講談社，2012.
- 中江兆民著・井田進也校注 『一年有半・続一年有半』，岩波書店，1995.
- 大津由紀雄編著 『危機に立つ日本の英語教育』，慶応義塾出版会，2009.
- 岡田伸夫 「コミュニケーションのための学校文法」『英語教育』39（2），27-29，大修館書店，1990.
- ピンカー，スティーブン著・椋田直子訳 『言語を生み出す本能（上）』，日本放送出版協会，1995.
- 斎藤兆史 『英語達人列伝』，中央公論新社，2000.
- スペクター，デーブ 「子どもをカタカナ英語に染めないで」『40歳の教科書』，講談社，2010.
- 末延岑生 『ニホン英語は世界で通じる』，平凡社，2010.
- 鳥飼久美子 『危うし！ 小学校英語』，文藝春秋，2006.
- 鳥飼久美子 『「英語公用語」は何が問題か』，角川書店，2010.
- (2012年12月13日受理)

原著論文

2011/12 オーストリアスキー指導法に関するスポーツ運動技術 指導方法論的一考察 I

塚脇 誠

Eine lehrmethodische Forschung der österreichischen Lehrmethodik des alpinen Skilaufs 2011/12 I

Makoto TSUKAWAKI

Zusammenfassung

In den letzten Jahren wurde Carving Ski in der ganzen Welt popularisiert. Die Einführung des Carving Ski hatte maßgeblichen Einfluss auf die teilweise Kurventechnik im alpinen Skilauf und führte zu neuen Ansätzen in Lehrmethodik und Didaktik der Bewegungstechnik. Infolgedessen wurden innerhalb der verschiedenen nationalen Skilehrerverbände entsprechende Lehrmethoden für Carving Ski entwickelt oder aufgebaut. Im Jahr 2003 stellte auch der österreichische Skilehrerverband eine Lehrmethode für Carving Ski vor.

Aufgrund meiner Forschungen zur Bewegungstechnik des Carving Ski bin ich zu dem Schluß gekommen, daß nach der Einführung des Carving Ski keine wesentlichen Neuerungen in der Bewegungstechnik beobachtet werden können und somit keine neue Lehrmethode erforderlich ist.

In dieser Arbeit wurde die derzeitige Lehrmethode des österreichischen Skischulverbandes unter bewegungstheoretischen und lehrmethodischen Aspekten betrachtet und die spezifischen Merkmale dieser Lehrmethode herausgearbeitet. Innerhalb der Lehrmethode können die drei Stufen "Lernen", "Anwenden" und "Perfektionieren" unterschieden werden. In diesem Forschungsbeitrag befasste ich mich lediglich mit der ersten Stufe. Aufbauend darauf sollen in weiteren Arbeiten auch die Stufen 2 und 3 eingehender untersucht werden.

Abschließend bin ich zu folgendem Ergebnis gekommen : Die Lehrmethodik der ersten Stufe "Lernen" zeigt keine signifikanten Abweichungen von der Lehrmethode vor Einführung des Carving Ski und stellt somit keine erarbeitete bzw. neu strukturierte Lehrmethode dar, sondern kann lediglich als minimale Weiterentwicklung vorhandener Lehransätze gesehen werden.

キーワード (Schlüsselwort) : Carving (カーヴェン／カービング), Schwingen (シュビンゲン), Lehrmethodik (指導方法論), alpine Grundeinstellung (アルペンスキーの基本姿勢), ein alpine Fahrverhalten (アルペンスキーの滑走姿勢), Bewegungsverwandschaft (運動技術の類縁性), Bewegungsqualität (運動質), Bewegungstransfer (運動の学習転移)

I. 緒 論

筆者は先行研究¹⁴⁾において、1996年を日本におけるカービングスキー元年と位置付けた。その後、カービングスキーの急速なマテリアル開発・普及等によって、アルペンスキーのターン運動技術論、及びその技術指導方法論に関して、日本のみならず、世界各国で様々な研究・開発・考察が行われ実践されてきた。

オーストリアは、アルペンスキースポーツ発祥の地域に属し、現在も国技とされ、国家産業としての位置づけにもなっている。そのアルペンスキー運動技術指導方法（論）は、常に世界各国から注目を集め、スキー指導の専門家から、世界的に最も優れた指導方法（論）の一つであると評価され続けている。現在も実践的な成果を上げる（学習者の技能向上）といった実績を積み重ねており、現場の実践指導に直結した指導方法（論）なのである。

そしてオーストリアは、アルペンスキー運動技術指導方法論・運動技術論において、これまで世界を牽引する重要な役割を果し、今後もその任を担うスキー大国の一つであると言える。

その実践指導の具現者であるアルペンスキー指導者（一般初心者から競技者育成まで）の養成・育成においては、国家試験（検定）としての資格・称号（学士号：Diplom）制度が確立され、理論と実践を融合し、実践的な成果＝学習者の技能向上・指導成果に繋がっているのである。

筆者も、ドイツ・オーストリアにおけるスポーツ指導法（主にアルペンスキーのコーチング）研修を目的とした留学において、オーストリアの国家検定アルペンスキーコーチ、スポーツコンディショニングコーチ、そしてスキー教師（指導者）資格を取得（学士号：Diplom）し、その課程において、徹底したオーストリアスキー指導方法（論）の基礎理論から実践までの研修・教育を受けた。

そのオーストリアは、2003年のインタースキー（Interski in Crans Montana）において、新たな指導方法（論）⁷⁾を発表した。その要因の一つは、急速に普及したニューコンセプトスキー＝カービングスキーであることが、容易に推測できる。

その指導法では、これまでのターン運動技術の名称を含む専門用語の変化・削除・追加等を、確認・指摘することができる。一般的には、（スポーツ運動技術）指導方法の変化・再構築（つくり直し）の主要因

の一つは、指導（習得・学習）目標となるスポーツ運動技術そのものの変化によるものである。従って、アルペンスキー運動技術指導方法の変化は、ターン運動技術の変化を意味・示唆することを、ここで推測することもできるのである。

しかしながら筆者は、これまでのスポーツ運動技術論的な考察による先行研究¹⁷⁻²⁹⁾において、カービングスキー普及以後、その使用におけるターン運動技術に、“決定的で顕著な変化は認められない”，とした。

つまり、指導（習得・学習）目標とされるスポーツ運動技術に、決定的で顕著な変化が認められないため、そのスポーツ運動技術習得・学習のための具体的な指導方法を、再構築する必要性が生じないことが、示唆されていることにもなるのである。勿論そこでは、スポーツ運動の指導方法論の基本原則等に合致した変更（進化、指導者個々の創意工夫、バリエーション、etc…）、環境の変化（リフト、雪面状況、滑走速度、etc…）等による、更に有効な指導方法（論）の研究・構築（進化、マイナーチェンジ）が重要であることは言うまでもなく、ここでそれを否定するものではない。

そこでカービングスキー普及以後、2011/12シーズンにおけるオーストリアの最新アルペンスキー指導方法（論）に、どのような変化・変更・再構築があったのか、そのコンセプト・特徴を、スポーツ運動技術指導方法論的な観点から考察することが必要と考えられる。これは、オーストリアの指導法再構築の要因が、ターン運動技術論であるのか否か、又はその他に要因が存在するのか否か、を考察するための基礎資料としても重要である。

また、カービングスキー普及以後の最新オーストリアスキー指導方法（論）に関して、そもそもその変化・再構築されたのか否かを含めて、スポーツ運動技術指導方法論的な観点からの詳細な考察・研究は、日本においてはまだ行われていない。

筆者は、本研究課題の準備段階（予備研究）としての先行研究^{28), 29)}において、オーストリアのカービングスキー普及以後の最新アルペンスキー指導方法（論）¹¹⁾を採り上げ、その具体的な指導方法を適確に把握（翻訳）することを行い、カービングスキー普及以前の実践指導方法（論）と、普及以後の実践指導方法（論）とを比較検討・考察するための基礎資料を得ている。

しかし先行の予備研究^{28), 29)}においては、その専門用語等の変更点等に関して、若干の考察は行われてい

るものの、その指導方法（論）に関する指導方法論的な観点からの総合的で詳細な考察は行われておらず、今後の研究課題とされている。

II. 研究目的

前述の通り、カービングスキー普及以後のオーストリアにおける実践スキー指導方法が、変化（再構築された）したと捉えることもできる。そして、その主要因の一つとして、ターン運動技術に変化があったと推測することも可能である。

これは、スポーツ運動技術の決定的で顕著な変化・相違が生じた場合、つまり習得・学習目標とされる運動技術に変化が生じた場合、その具体的な指導方法の再構築＝変化が、必然的に生じるためである。

このように、スポーツ運動技術の変化は、その具体的な指導方法再構築の最大主要因の一つと考えられるからである。

そこで本研究の目的は、カービングスキー普及以後の最新オーストリアスキー指導方法（論）に関して、決定的で顕著な変化が生じているのか否かを含めて、スポーツ運動技術指導方法論的な観点から考察し、現在のオーストリアにおけるターン運動技術指導方法（論）構築のコンセプトを適確に把握すること、そしてその特徴を、スポーツ運動技術指導方法論的に解明することとする。

本研究は、スポーツ運動技術指導方法論的な観点から、アルペンスキーターン運動技術の具体的・実践的な指導方法を考察するものであり、更に安全で適切・より有効的・より実践的なカービングスキー指導方法（論）構築のための貴重な基礎資料ともなるものである。従って本研究の成果・結果は、以下の点においても、重要な基礎資料ともなるものである。

◆現在の日本の一部において再構築が行われている指導方法（論）の安全性・適切性・有効性・実践性を考察すること。

◆現在オーストリアのスノースポーツ学校において、その学校長や指導者養成教官は、近年の学習者の技能向上の成果が、これまで以上に上がっていると認識しており、現在の指導法は適切であると主張している。その要因を考察すること。

また本研究の考察により、その指導方法（論）に決定的で顕著なコンセプトの変化が認められた場合、カービングスキー普及以後、オーストリアにおいて、ターン運動技術（論）に決定的で顕著な変化があったこ

とを、示唆することにも繋がることとなる。

この場合、筆者のこれまでの先行諸研究¹⁷⁻²⁹⁾におけるターン運動技術論とは、相反する結論が示唆（導かれる可能性）されることとなり、カービングスキー普及以後のアルペンスキーのターン運動技術論に関して、スポーツ運動技術論的な観点からも解明する必要性がでてくる。

III. 研究方法

本研究は先ず、先行研究^{1-3), 12), 13), 21)}におけるカービングスキー普及以前の指導方法（論）の確認（適確な把握）と、カービングスキー普及以後の最新指導方法（論）^{28), 29)}を適確に把握する必要がある。

本研究において、カービングスキー普及以前の指導法に関しては、筆者がオーストリアで実際に国家資格取得のために、理論・実技共に実地研修し、国家試験に合格した指導方法（論）である1985年以降のもの^{1-3), 12)}を主に採用する。

カービングスキー普及以後の最新オーストリア指導法に関しては、先行研究^{28), 29)}より適確に把握（翻訳）された、2011/12年度現在の最新指導方法（論）を主に採用する。

また本研究において、対象となる最新オーストリアスキー指導方法（論）^{28), 29)}の指導対象者は、一般的な成人（Erwachsene）とされている。

そして、それぞれの具体的な指導方法において、スポーツ運動技術指導方法構築に不可欠な基礎理論^{13) P.110-112, 21) P.59}となる、“スポーツ運動技術の系統発生 of 順序性”、“スポーツ運動の類縁性（ファミリー）”、“スポーツ運動学習の転移現象”等の観点から、その構築のコンセプト・特徴を考察する。

更に本研究では、2006年4月に北海道：マウントレースイにて実施されたISIA（国際スキー教師連盟）国際会議におけるオーストリアスキー指導方法論（理論、実技）の発表内容⁸⁾と、2012年3月22～28日に実施された、SIA（日本職業スキー教師協会）公認：杉山スキー&スノースポーツスクールにおける、オーストリアスキー指導法研修会（講師：現役オーストリア国家検定スキー教師養成教官）での実技・理論研修の内容、そして2011' オーストリアスキー指導法DVDの内容等を重要な補足資料とし、より適確に、その指導方法を把握することを試みることにする。

最後に特筆して考察しなければならない点は、オーストリアスキー指導方法（論）に変化があるのではな

いか、と認識される主要因である、専門用語の変化（追加・削除）・変更に関してである。具体的には、“ブルークボーゲン（Pflugbogen）とクルベン（Kurven）”、“アルペンスキーの基本姿勢（Alpine Grundeinstellung）とアルペン滑走姿勢（Alpines Fahrverhalten）”、そして“シュビンゲン（Schwingen）とカーヴェン（Carven）”である。

また本研究においては、カービングスキー普及以前の指導方法（論）^{1-3), 12), 13), 21)}と、普及後の最新指導方法（論）の第1段階である“学習する”^{11), 28)}の段階を中心に考察することとし、第2段階以降“応用する”、“完成させる”の段階、そして総合的な考察は、今後の課題とする。

IV. 結 果

IV-1：カービングスキー普及以前のオーストリアスキー指導法

本研究において採り上げる、カービングスキー普及以前のオーストリアスキー指導法は、1985年に F. ホッピヒラー（Franz HOPPICHLER）によって構築¹⁻³⁾されたものである。先行の諸研究^{1-3), 13), 21)}を基に、その指導展開を作図すると、〔図：I〕のようになる。

その指導展開では、“基本段階（Grundstufe）”⇒“中上級段階（Fortbildung）”⇒“応用段階（Meisterstufe）”といった3段階に分けて構成されている。また同時

に、この3つの指導展開の段階は、オーストリア国におけるプロスキー教師の指導技能レベル（3段階の指導者資格制度≡指導可能なターン運動技術領域）としても、そのまま適用されてもいる。

この指導法においては、用具（マテリアル）に慣れるといった初心者から、“直滑降（Schüßfahren）”⇒“ブルーク（Pflug）”⇒“ブルークボーゲン（Pflugbogen）”（⇒“斜滑降：Schrägfahren，横滑り：Rutschen”）⇒“シュテム＝シュビンゲン（基本形：Stemmschwingen Grundform）”⇒“シュテム＝シュビンゲン（谷開き：Stemmschwingen Öffnen unten）”⇒“バラレル＝シュビンゲン（谷開き：Parallelschwingen Öffnen unten）”までは、基本的には順序（性）を追って指導展開（縦の学習転移現象）されることになる。〔図：I〕においては、“斜滑降，横滑り”が明記されていないが、ブルークボーゲンの後、“アルペンスキーの基本姿勢（Alpine Grundeinstellung）”を含めて指導展開される。

また、“バラレル＝シュビンゲン（山開き：Parallelschwingen Öffnen oben）”、“バラレル＝シュビンゲン（立ち上がり：Parallelschwingen mit Hochgehen）”、“バラレル＝シュビンゲン（沈む込み：Parallelschwingen mit Beugedrehen）”、“シェーア＝シュビンゲン（山開き：Scherschwingen Öffnen oben）”、“シェーア＝シュビンゲン（谷開き：Scherschwingen Öffnen unten）”に関しては、指導の順序（性）が明記・提示されてい

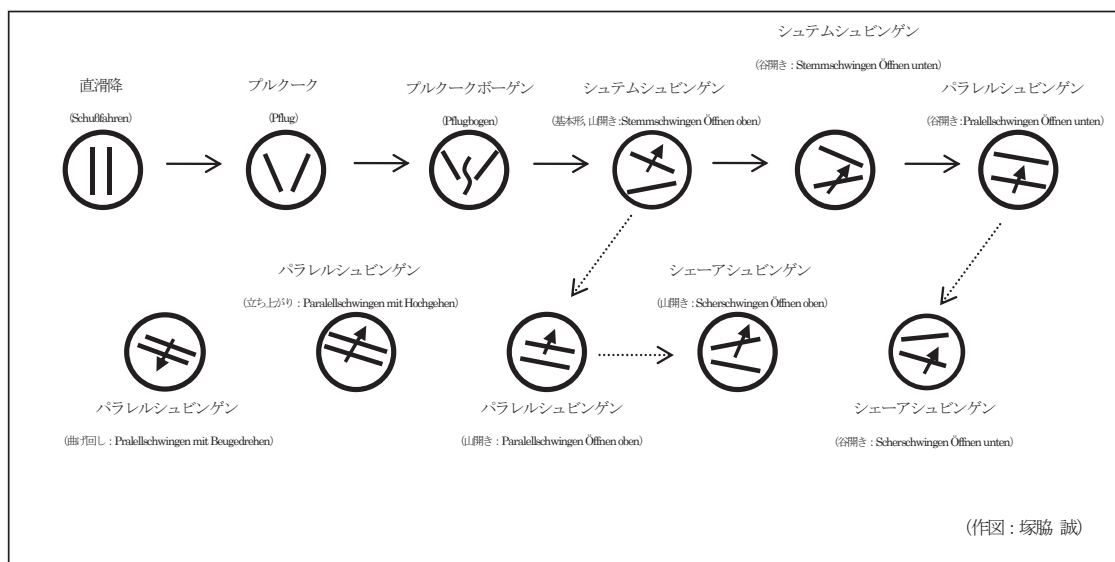


図 I オーストリアの指導法^{1-3), 13), 21)}
(カービングスキー普及以前)

ないが、滑走環境（斜面、雪質、体力、趣向、等…）に適応して、それぞれ指導展開（順行性促進、または逆行性促進の学習転移）するようになっている。これは、自然環境の中で実践される人間の行為としてのスポーツ運動であるアルペンスキスポーツにおいて、より実践的なターン運動技術は、「スキーヤー自身のコンディション能力も含めて、条件・状況に応じて、適時適用・応用されなければならない」^{30), 31)} といった F. ホッピラーの指導方法構築の基本コンセプトが、明確に形となったものと考えられる。

“基本段階”は、“直滑降”から“シュテム＝シュビンゲン（谷開き）”までで展開・構成されており、同時にオーストリア州立検定助教師（Anwärter Skilehrer）が、実践指導（指導理論・実践指導技能認定済み）できる範囲である。

“中上級段階”は、“パラレル＝シュビンゲン（立ち上がり）”までで展開・構成されており、オーストリア州立検定教師（Landes Skilehrer）が、実践指導（指導理論・実践指導技能認定済み）できる範囲である。

“応用段階”は、その他全てのターン運動技術で展開・構成されており、オーストリア国家検定教師

（Diplom Skilehrer）が、実践指導（指導理論・実践指導技能認定済み）できる範囲である。

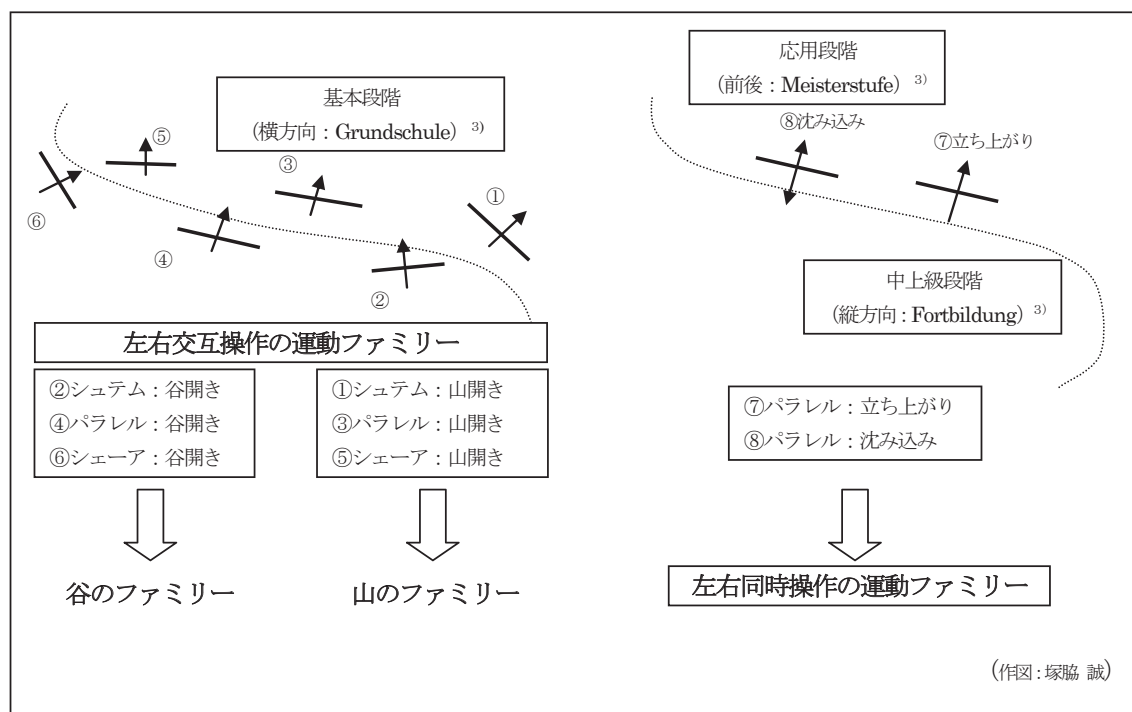
この指導方法（論）構築においては、エッジングの切り換え技術を伴ったターン運動技術を、1980年に F. ホッピラーがシュビンゲン（Schwingen）と命名・発表した。そして、〔図Ⅱ〕の8つのシュビンゲンを提示し、ターン運動技術の指導（習得・学習）目標とした。

また、ターン運動における脚の運動の仕方に着目した、スポーツ運動技術の類縁性の観点からは、以下のような分類・運動ファミリーを構築している。

まず、“脚の左右交互操作による運動ファミリー”と、“脚の左右同時操作による運動ファミリー”に分類している。そして更に、“脚の左右交互操作による運動ファミリー”を、“山のファミリー（Berg Familie）”と“谷のファミリー（Tal Familie）”に細分化している。

以上のターン運動における脚の運動の仕方による分類（類縁性・ファミリー）を基点に、オーストリアのアルペンスキー指導方法（論）が構築されている。

その後 F. ホッピラーは1994年の著書³⁾において、これまでの指導方法に、若干の修正（進化、マイナー



図Ⅱ 8つのシュビンゲン^{1-3), 13), 21)}

チェンジ)を加えている。その特徴としては、ターン運動技術の分類、つまりターン運動の類縁性に関する観点に違いを考察^{21)P61-63}することができるが、[図Ⅰ]の通り、指導展開における3つの段階と、ターン運動技術の指導順序に変化は確認できないことである。

具体的には、左右交互操作による運動ファミリーを、“横(左右)方向の運動ファミリー”とし、左右同時操作による運動ファミリーを“縦(上下)方向の運動ファミリー(パラレル＝シュビンゲン：立ち上がり)”と“前後方向の運動ファミリー(パラレル＝シュビンゲン：沈み込み)”に分類した点である。これは、シュビンゲン(エッジングの切り換え：ターン運動の主要局面)の際、“体重(荷重/抜重)移動・交換の方向：前後/左右/上下”による観点からの分類となっているのである。つまりこの修正は、ターン運動の分類(ターン運動技術の類縁性)に関する観点の相違による、進化・マイナーチェンジと捉えることができる。

しかし、ターン運動技術指導の展開順序が同じであることから、その運動技術の系統発生の順序性や、学習の転移現象には、影響(変化)は無いと言える。

また、指導の最終段階である応用段階においては、より具体的な滑走環境(コブ、深雪、ポール・競技、等…)への応用が明示されている。これは、アルペンスキーにおけるターン運動技術が、滑走条件・状況に応じて適時適応・応用されなくてはならない(Situation Skiing)といった基本コンセプトを、より明確に充実(進化)させたものと捉えることが妥当である。

従ってF.ホビヒラーが、指導方法を再構築(一からつくり直した)したものでもなく、ましてやターン運動技術の変化を認識・導入した結果、生じた変化でもないことが考察される。

Ⅳ-2：カービングスキー普及以後の最新オーストリアスキー指導法

先行研究²⁸⁻²⁹⁾によって、カービングスキー普及以後の最新オーストリアスキー指導方法(論)が、適確に把握(翻訳)された。その内容を図式化(翻訳)したものが、[図：Ⅲ]¹¹⁾である。

その指導展開においても、“学ぶ(lernen)”⇒“応用する(Anwenden)”⇒“完成させる(Perfektionieren)”といった3つの指導段階に分けて構成されていることがわかる。また同時に、この3つの指導展開の段階

は、オーストリア国におけるプロスキー教師の指導技能レベル(3段階の指導者資格制度＝指導可能なターン運動技術領域)としても、現在もそのまま適用されている。

この最新の指導法においては、先ず“学ぶ”といった段階²⁸⁾において、用具(マテリアル)に慣れるといった初心者の“導入”から、“直滑降”⇒“ブルークーク”⇒“クルベン(Kurven)”⇒“エッジング(Kanten)－横滑り(アルペン滑走姿勢：Alpines Fahrverhalten)”⇒“カーヴェン基本段階(Carven Grundstufe)”までの展開となり、順序性を伴った指導展開(縦の学習転移現象)となっている。

またこの段階は同時に、オーストリア州立検定助教師(Anwärter Skilehrer)が、指導実践(指導理論・実践指導技能認定済み)できる範囲となっている。

V. 考 察

V-1：“学習する”の段階における特徴

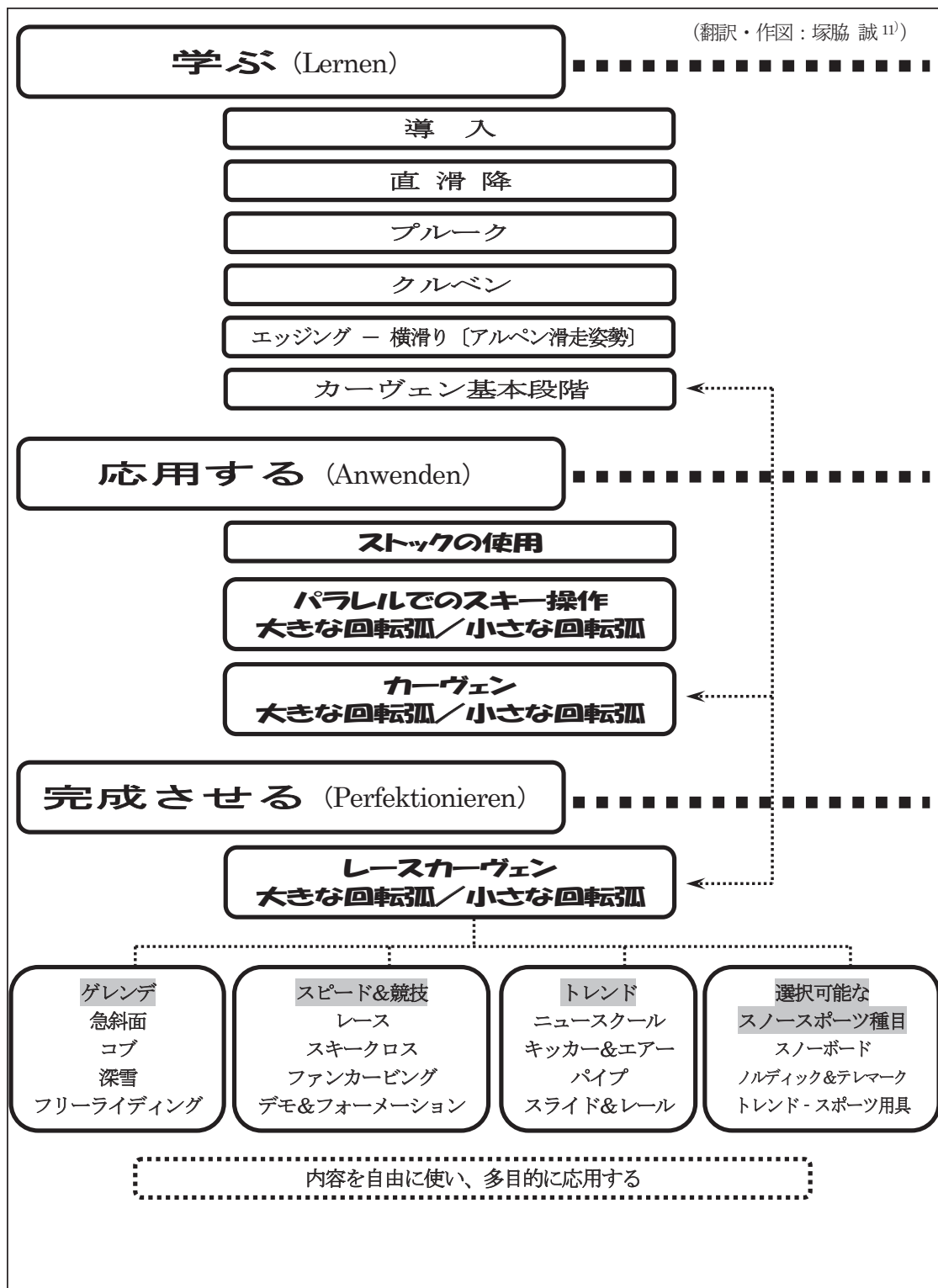
“学習する”の段階においては、本論：第2節[図：Ⅲ]のような指導展開となっている。

この段階は、カービングスキー普及以前の指導法^{1-3),12),13)}における“基本段階”に該当し、その内容を比較・考察すると、表面的(表現、名称等)には、“斜滑降”、“ブルークボーゲン”、“シュテムシュビンゲン”が除外され、“クルベン”、“エッジング”、“カーヴェン基本段階”といった名称が新しく導入されている。

除外された“斜滑降”は、最新の指導法では“エッジング、横滑り(アルペン滑走姿勢)”において指導展開されている。そして、“アルペン滑走姿勢(Alpines Fahrverhalten)”は、「アルペンスキー滑走のための基礎として、練習されなければならない重要な構成要素」^{11),28)}とされている。

この段階で特筆すべきは、これまで斜滑降の指導段階において最重要指導(習得・学習)課題とされていた“アルペンスキーの基本姿勢(Alpine Grundeinstellung)”が、“アルペン滑走姿勢(Alpines Fahrverhalten)”として、これまでと同様、最重要指導(習得・学習)課題とされている点である。

ここでは、名称の変化(アルペンスキーの基本姿勢⇒アルペン滑走姿勢)が生じている。これは、カービングスキーのサイドカーブの構造的な特性と、適切な雪面へのエッジングにより、斜滑降・山回りにおいて、顕著な外向傾姿勢を、これまでのように強調する



図Ⅲ 2011/12オーストリアスキー指導法

のではなく、滑走中の内外力を、より自然に有効活用できる姿勢として、滑走（運動）姿勢を捉えようとした意図が存在しているのである^{6-11), 14)}。

また筆者は先行研究^{19), 24-25), 27)}において、その運動姿勢の記述や運動技術、その意味・価値に関して考察し、ISIA 国際会議（2006年）においても、オーストリア代表の講師陣に直接質問し、以下の点を確認している。

“アルペンスキーの基本姿勢”と“アルペン滑走姿勢”は、全く同様の滑走運動姿勢であり、その名称変化の要因は、前述のとおりである^{1-3), 7-14)}。つまり変化ではなく、改名と捉えることが適切である。

そして先行研究^{19), 22), 24-25), 27)}の考察から、適切な滑走姿勢（外向傾姿勢：基本姿勢、アルペン滑走姿勢）は、自由自在なエッジングを可能とする前提条件（最適な準備姿勢）でもあり、これまで通り、この段階での最重要指導（習得・学習）課題として、指導されるべきと考えられる。

また、斜面を斜めに直線的に横切ることを意味する典型的な“斜滑降”は、カービングスキーの構造的特性から、現在困難となってきた。それは、「エッジングされたカービングスキーによる斜滑降は、そのサイドカーブによって扇形となり、斜滑降終盤のシュプールは、山側へ引かれる」^{11), 28)}からである。つまり実際の滑走では、直線的な斜滑降ではなく、弧を描く曲線的な滑走である“山回り”となってしまうのである。従って、斜滑降といった表記・表現が適切でなくなった背景を指摘することができる。

新規に追加・導入された“エッジング”は、筆者の先行研究²²⁾においても、その運動技術構造論的な観点から、カービングスキーでのターン運動において必要不可欠な運動技術要素であり、尚且つその重要性がより増す（大きくなる）ことが考察されている。従って、カービングスキー普及以後の運動技術指導法において、明記されるべき重要な指導項目と考えられる。また“エッジング”は、“横滑り”と密接な関係系にある専門用語でもあり、エッジングの重要性をより強調しているとも考えられる。

“カーヴェン基本段階”も新規導入されているが、その運動記述^{1-3), 7-14)}や、筆者の理論・実技の研修等から、除外されたこれまでの指導法におけるシュテム＝シュビンゲン（基本形）のことであり、ターン運動技術の変化ではなく、改名と捉えることが適切である。

1980年以降、オーストリアのアルペンスキー指導方法（論）においては、F. ホッピヒラーが発表した“シュビンゲン（Schwingen）”がターン運動技術の中核として、ターン運動技術論・技術指導方法論が展開されてきた。しかし2003年のインタースキー（Interski in Crans Montana）において、オーストリアは、ターン運動技術として“カーヴェン（Carven）”を発表し、新たな指導方法（論）を発表した。

シュビンゲンとは、ターン運動の主要局面においてエッジングの切り換えの存在するターン運動技術^{1-3), 12), 13), 15)}であるが、カーヴェンも同様に、ターン運動の主要局面においてエッジングの切り換えの存在するターン運動技術⁷⁻¹¹⁾である。

2012年の杉山スキー&スノースポーツスクールにおけるオーストリアスキー指導法：理論研修会において、筆者は、以下の点を講師（指導教官）への直接の質問から確認している。「シュビンゲンとは、“振り子時計の振り子の運動”⇒“スキーを左右にスイングする”、“左右に振る”といった意味合いが含まれていた。しかし、カービングスキー普及以後においては、スキーを左右に大きくスイングする（振る）といった運動が観察され難くなり、カービングスキーのターン運動の実践において、その意味合い・名称が適していないことが、名称変更（改名）の最大要因の一つである」。

従って、シュビンゲンとカーヴェンは、同様のターン運動技術であることが考察できるのであり、ターン運動技術の変化ではなく、改名と捉えることが適切である。

また除外された“ブルークボーゲン”は、ターン運動（滑走方向の変換）において、その主要局面におけるエッジングの切り換えが存在せず、これまでもシュビンゲンとは異なったターン運動技術として、位置付けられていた。同様に、“クルベン”は、ターン運動（滑走方向の変換）において、その主要局面においてエッジングの切り換えが存在せず、カーヴェンとは異なったターン運動技術と位置付けられているのである。

従って、その運動記述・意味・価値をも含めて、“ブルークボーゲン”と“クルベン”には、その運動技術そのものに関して、相違点が存在していないのである。つまり、ターン運動技術の変化ではなく、改名と捉えることが適切である。

従って、“学習する”の段階における指導の展開方

法は、名称変更（改名）・除外・追加等が確認できるが、カービングスキー普及以前の指導法^{1-3), 12-13)}と同様に、脚の左右交互操作の運動ファミリーに属するターン運動技術を中心とした運動技術の指導を展開しており、またその指導展開の順序も同様であることがわかる。

またこれは、人間の生活運動である“歩行運動”が、脚の左右交互操作の運動ファミリーに属することから、初心者新しいスポーツ運動技術習得・学習のために重要となる、運動学習の転移現象の観点からも有効性が認められ、カービングスキー普及以前^{1-3), 12-13)}の指導法と同様に、最も実践的で有効・適切・安全な指導法であることが考察できる。

V-2：オーストリア指導法における“Carven（カーヴェン）”の意味

V. 考察-1の通り、カービングスキー普及以後のオーストリア指導法において特筆すべき点は、ターン運動技術を表す専門用語である“シュビンゲン”が“カーヴェン”へと改名された点である。しかしこの専門用語の改名には、カービングスキーの普及といった時事的現象の意味・価値のみならず、スポーツ運動技術論的・指導方法論的な観点から、その意味・価値においても、本研究において考察された。

カービングスキー普及以後のオーストリアスキー指導方法（論）における“カーヴェン”とは（シュビンゲンと同様）、ターン運動技術の総称であり、ターン運動の主要局面においてエッジングの切り換えの存在するターン運動技術を意味するものである。従って、ターン運動の質を表す重要な一つの要素である、ターン運動中のスキーのズレの度合い（伴う＝横ズレ、伴わない＝切り込み）を意味する・表現する専門用語ではないのである。つまり、オーストリアのスキー指導方法（論）において“カーヴェン”は、“切り込みターン”を直接意味していないのである。

また、カービングスキー普及以後の指導方法（論）においても、「横滑りは、滑降中の困難な場면을克服する、一つの可能性」^{11), 28)}として重要であり、切り込みターン（カービング）のみがターン運動技術ではないのである。

そしてカーヴェンとは、「近代的なスキー技術のみではなく、オーストリアスノースポーツ学校が提供するブランド（商標概念）でもある（翻訳：塚脇誠）」^{9) P28}と明記されている。

しかしながら、現在の日本においてカービングとは、「スキーが横ズレをすることなく滑走していくことである。つまりスキーヤーが左右のターンを行っている際、スキーヤーのエッジングにより雪が鋭く切り込まれ、スキーのテールは、スキーのトップとほぼ同じシュプールを通過すること」^{14) P121}と理解・認識されているのが一般的である。これは、オーストリアのスキー指導方法（論）においては、“切り込みターン”に限定されたターン運動技術を意味・指摘することとなる。

従って、オーストリアのスキー指導方法（論）における“カーヴェン”と日本における“カービング”が、現在のアルペンスキーの指導方法論において、またターン運動の運動技術論においても、同じ意味・価値を持たないことに注意が必要である。

近年、オーストリアの最新指導方法論（カービングスキー指導方法論）の翻訳⁹⁾も発刊され、そこでは、“Carven（カーヴェン）”が“カービング”と翻訳（直訳）¹⁰⁾されている。勿論、原本⁹⁾を熟読し、同時にその指導実践（実技）に照らし合わせて総合的に考察すれば、オーストリアにおける“カーヴェン”と日本の“カービング”といった専門用語の認識・概念の違いを確認することは、可能と思われる。勿論筆者も、翻訳者の一人¹⁰⁾であり、“Carven（カーヴェン）”を“カービング”と翻訳（直訳）している。

しかし本研究考察によって、その意味・価値の相違をより明確に表現・表記するための提案として、筆者は“Carven”を“カーヴェン”と翻訳し、オーストリア指導方法論における切込みのターン運動を、“カービング”と表現・表記することが、混乱・誤解を避けるためにも適切であろうと考える。

従って本研究においては、“カーヴェン”と“カービング”を、その意味・価値の違いから、使い分けて表記することを試み、同時に提案している。

VI. 結 論

本研究では、スポーツ運動技術指導方法論的な観点からの比較・考察によって、カービングスキー普及以前の指導法と普及以後、つまり2011/12オーストリアの（最新）アルペンスキー指導法の第1指導段階である“学習する”において、以下のような結論を導くことができた。

1. カービングスキー普及以後の指導方法（論）においても、カービングスキー普及以前の指導方法

(論)と同様、3段階での指導展開となっており、そのそれぞれの指導段階は、改名されてはいるが、基本構造・順序性に相違点はなかった。

2. 指導方法(論)における専門用語(ターン運動技術の名称含む)には、改名・除外・追加が存在する。しかし、それらの専門用語は、スポーツ運動の指導方法論的な観点から、その理論的な根拠を考察・解明した。
3. 本研究において、最も特徴的な改名(名称変更)は、“シュビンゲン”⇒“カーヴェン”である。その要因は、スポーツ運動の運動技術論的・指導方法論的な観点から、その理論的な根拠を考察・解明した。
4. “学習する”の段階における指導法において、ターン運動技術の類縁性の観点からは、脚の左右交互操作の運動ファミリーで指導が構築・構成・展開されており、カービングスキー普及以前の指導法と何ら相違点がなかった。

つまり、スポーツ運動技術指導法構築に不可欠な基礎理論¹³⁾P.110-112.21)P.59となる、スポーツ運動技術の系統発生の順序性、スポーツ運動技術の類縁性(運動ファミリー)、スポーツ運動の学習転移等の観点から、オーストリアのカービングスキー普及以前^{1-3),12-13)}の指導法と、カービングスキー普及以後の(最新)指導法¹¹⁾とを比較・考察したが、その枝葉(改名、等…)における相違点は確認できるが、幹(コンセプト)に関して、つまり決定的な相違点は、確認・考察できなかった。

従って、スポーツ運動技術指導方法論的な観点から、2011/12オーストリアの(最新)アルペンスキー指導法の第1段階である“学習する”の段階においては、まったく新しく構築された、つまり再構築されたものではなく、更に充実した発展形(マイナーチェンジ)と捉えることが妥当と考えられる。

最後に提案として、日本の指導方法(論)との比較検討・考察等においては、誤解を防ぐためにも“Carven(カーヴェン/カービング)”の翻訳・表記の仕方に、注意が必要である。

今後の課題

本研究におけるスポーツ運動技術指導方法論的な考察によって、オーストリアの最新アルペンスキー指導方法(第1段階:学習する)が、更に充実した発展形であることが考察されたが、その主役である指導対象

者(学習者)は、主に一般的な成人¹¹⁾であった。

近年のオーストリアのスキー指導方法論においては、その指導対象者を、その趣向(アルペン、ノルディック、テレマーク、等…)別に分類することはもとより、子供(ジュニア)の指導方法(論)に関する研究と実践が重要な位置付けとなり、独自に構築されてきている。従って、この領域に関する研究・考察も重要な課題である。

しかし、オーストリアのアルペンスキースポーツにおいて、“ゲレンデー一般スキー(基礎スキー)”と“アルペン競技スキー”といった、日本固有の趣向別の分類は存在せず、これはスポーツ指導法論的にも、スポーツ運動技術論的にも意味・価値が存在していないことは、ここで追記しておく。

今後、第2(応用する)段階、第3(完成させる)段階、そして指導法全体を対象とした総合的な研究考察が課題となる。

引用・参考文献

- 1) HOPPICHLER Franz: BEWEGUNGS -und UNTERRICHTSLEHRE Skriptum der Staatl. Skilehrerausbildung und aller Österreichischen Landesskilehrerausbildungen 1. Auflage, Arbeitsgruppe der Österr. Skilehrerausbildungen Zell am See, 1985
- 2) HOPPICHLER Franz: Ski mit uns DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE, Otto Müller Verlag Salzburg 1985
- 3) HOPPICHLER Franz: DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE, EDITION HERANT -Verlag Sportmagazin, 1994
- 4) 金子 明友・朝岡 正雄 編著: 運動学講義, 大修館書店, 1990
- 5) MEINEL Kurt: BEWEGUNGSLEHRE -VERSUCH EINER DER SPORTLICHEN BEWEGUNG UNTER PÄDAGOGISCHEM ASPEKT, BERLIN, 1960 (マイネル, 金子 明友 訳)『スポーツ運動学』大修館書店, 1981年
- 6) Österreichischer Skilehrerverband -Lehrteam: CARVING FÜHRERSCHEIN Österreichischer Skilehrerverband 1996/97: カービング運転免許証(塚脇 誠 訳), (株)アシックスウィンター事業部 報告書 添付 1997
- 7) Österreichischer Skischulverband: AUSBILDUNGSPROGRAMM für Skilehrer (innen)

- Ausbildungen ÖSTERREICHISCHER SKILEHRPLAN
ÖSSV Ausbildungsprogramm 2003
- 8) Österreichischer Skischulverband : Snowsport in Österreich, SIA Festival Mt.Racey APRIL 2006 (オーストリアのスノースポーツ, スキー指導方法論等発表資料)ISIA 会議資料 (マウントレースイ 2006年)
- 9) Österreichischer Skischulverband : SNOWSPORT AUSTRIA DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE VERLAG BRÜDER HOLLINEK 2007
- 10) 日本職業スキー教師協会 監修:最新オーストリアスキー教程 日本語版, 実業之日本社, 2007 (翻訳: 児玉榮一, 穴田慎一, 河西豊光, 川田彰一, 塚脇誠)
- 11) Tiroler Skilehrerverband : SNOWSPORT TIROL Lehrschema Ski Erwachsene, Gesamtedaktion:Rainer Schultes, Konzept & Gestaltung:Thomas Schrott & Michael Holzknecht, 2011,
- 12) TSUKAWAKI Makoto : Österreichische staatliche Skilehrerausbildung "Protokoll der praktischen methodischen Übungen", "Protokoll der Bewegungs - und Unterrichtslehre" 1992
- 13) 塚脇 誠: オーストリアスキーメソッドの指導方法論的一考察, 日本スキー学会誌 Vol. 8 No. 1 (P.109~120), 1998
- 14) 塚脇 誠: 日本におけるカービングスキーの指導方法論的一考察, 日本スキー学会誌 Vol. 8 No. 1 (P.121~132), 1998
- 15) 塚脇 誠: 縦のゲレンデスペースを使用したアルペンスキー指導法の指導方法論的一考察, 日本スキー学会誌 Vol.10 No. 1 (P.209~220), 2000
- 16) 塚脇 誠: アルペンスキーにおけるターン運動の局面構造, 日本スキー学会誌 Vol.11 No. 1 (P.141~152), 2001
- 17) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅰ (障害・傷害とターン運動技術) 日本スキー学会誌 Vol.12 No. 1 July (P.241~252), 2002
- 18) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅱ《アルペンスキーのターン運動における内脚に関する一考察》日本スキー学会誌 スキー研究 Vol.13 No. 1 (P.87~98), 2003
- 19) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅲ《アルペンスキーのターン運動における内外向姿勢に関する一考察》2004年度 国際武道大学紀要第20号 (原著論文)P.1~14
- 20) 塚脇 誠: アルペンスキーにおけるターン運動の局面構造Ⅱ《ブルークボーゲン》2005年度 国際武道大学紀要第21号 (原著論文)P.21~32
- 21) 塚脇 誠: アルペンスキーにおけるターン運動技術の類縁性に関する一考察 2006年度 国際武道大学紀要第22号 (原著論文)P.57~75
- 22) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅳ《アルペンスキーにおけるターン運動の運動構造に関する一考察》2007国際武道大学研究紀要 No.23 (原著論文)P.41~60
- 23) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅴ《アルペンスキーにおけるストックワークとターン運動に関する一考察》2008国際武道大学研究紀要 No.24 (原著論文)P.43~60
- 24) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅵ《アルペンスキーのターン運動における内・外傾姿勢に関する一考察》2009国際武道大学研究紀要 No.25 (原著論文)P.9~30
- 25) 塚脇 誠: カービングスキー技術論Ⅶ《アルペンスキーのターン運動における外向傾姿勢に関する教授学的一考察》2010国際武道大学研究紀要 No.26 (原著論文)P.27~48
- 26) 塚脇 誠: アルペンスキーの滑走運動におけるエッジングに関する教授学 (技術論) 的一考察 東京国際大学論叢 商学部編 第83号 2011年 (原著論文)P.67~88
- 27) 塚脇 誠: アルペンスキー技術論Ⅱ《アルペンスキーにおける外向傾姿勢とターン運動における主要局面に関する教授学 (運動技術論) 的一考察》2011国際武道大学研究紀要 No.27 (原著論文) (P.13~36)
- 28) 塚脇 誠: 2011/12 オーストリアのアルペンスキー指導法 2013 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis Vol. 3 (印刷中)
- 29) 塚脇 誠: 2011/12 オーストリアのアルペンスキー指導法Ⅱ 2013 東京国際大学論叢 商学部編 第86号 (印刷中)
- 30) WALLNER Hermann : richtig CARVEN Offizielles Lehrbuch der österreichischen Skiinstruktoren, 1. Auflage 2008 Die Deutsche Bibliothek - CIP - Einheitsaufnahme
- 31) 吉田茂・三木四郎: 教師の為の運動学, 大修館書店, 1996
- 32) 財) 全日本スキー連盟: 日本スキー教程・指導教本副読本 [カービングスキーのスキー指導], スキージャーナル, 1997

(2012年12月13日 受理)

研究報告

韓国大学生剣道競技者の使用技に関する研究

井上哲朗*, 岩切公治*, 井島 章*, 朴 東哲**

Investigation about the skill of the Korean university Kendo players

Tetsuro INOUE*, Kimiharu IWAKIRI*, Akira IJIMA* and Dong Churl PARK**

Abstract

In this study, we performed questionnaire survey about the skill to use during the Kendo practice and matches for Korean university student kendo players and compared it with the skill that the Japanese university student kendo players used. The results are as follows.

1) As the skill to use during the Kendo practice and matches, high score skill in the Korean students were hiki- men, kote-men, hiki- do and hiki- kote. On the other hand, in the Japanese students, high score skill were debana-kote, debana-men, hiki-men, kote-men, hiki-do, hiki-kote, men-kaeshi-do and katsugi-men.

2) As Yuko-Datotsu, high score skill in the Korean students were hiki-do, hiki-men. On the other hand, in the Japanese students, high score skill were debana-kote, debana-men and hiki-men.

key words : kendo, korea, university student kendo players, kendo skill

I 目 的

世界剣道選手権大会は、1970年に第1回大会が開催され、その後、3年に1度開催されている。この世界剣道選手権大会において、日本は、第1回から第12回まで団体戦において連続優勝して、王座を守ってきた。しかし、第13回世界剣道選手権大会（2006年、於：台湾）では、日本は準決勝でアメリカに負け、決勝ではアメリカを破った韓国が初優勝し、日本以外の国が初めて優勝した。韓国の剣道の実力については、以前から世界剣道選手権大会の活躍などからみても、世界でもトップレベルにあることは、誰もが認める事実であった。

韓国は、日本から最も近い国であり、日本に次ぐ剣道人口の多さであるといわれている¹¹⁾。それに関わ

らず、韓国の剣道事情については、日本ではあまり知られていないのが現状である。韓国では日本人が想像している以上に剣道が盛んに行われており、日本同様に少年期のうちから剣道を始める者も多い。これまで、海外の剣道事情に関する報告^{3, 4, 9, 12)}は、いくつかなされているが、そのほとんどが欧米に関する報告であり、韓国に関する報告^{6, 7)}は少ない。

剣道は竹刀を用いて互いに定められた部位を打突しあい、有効打突を奪い合うことによって勝敗を競う競技である。剣道で発現される技には、仕掛けていく技と、相手の技に対して応じる技に大別できる。トップレベルの選手の多くは、少年期から剣道を始め、各種剣道大会で活躍した選手が多く、少年期から青年期にかけて、剣道で使用する技の練習を数多く行い、養われていると考えられる。それは、韓国においても同様であると考えられる。

そこで本研究では、韓国の大学生剣道競技者を対象として、地稽古中および試合中に使用する技について

* 国際武道大学

** 韓国木浦大学校

アンケート調査を行った。そして、日本の大学生剣道競技者の使用する技と比較を行った。

Ⅱ 方法

1. 対象者

対象者は、韓国の大学剣道部に所属する男子大学生80名（年齢 20.0 ± 1.2 歳，段位 2.2 ± 0.9 段，剣道経験年数 7.3 ± 2.1 年）および日本の大学剣道部に所属する男子大学生97名（年齢 19.1 ± 1.1 歳，段位 2.9 ± 0.3 段，経験年数 11.3 ± 2.4 年）の合計177名であった。

2. 使用技に関するアンケート調査

使用技については、剣道に関する指導書^{10, 13, 14}などから選んだ。使用頻度が明らかに高い基本技（面，小手，胴，突き）をのぞく、しかけ技23技（払い面，払い小手，払い胴，払い突き，かつぎ面，かつぎ胴，引き面，引き小手，引き胴，出ばな面，出ばな小手，出ばな突き，小手一面，小手一胴，面一胴，突き一面，突き一小手，面一面，小手一面一胴，片手面，片手小手，片手突き），及び応じ技22技（面抜き面，面抜き胴，面抜き小手，小手抜き面，小手抜き胴，面返し面，面返し面，小手返し面，小手返し面，胴返し面，面すりあげ面，面すりあげ胴，面すりあげ小手，小手すりあげ面，小手すりあげ面，突きすりあげ面，面打ち落とし面，小手打ち落とし面，小手打ち落とし小手，小手打ち落とし突き，突き落とし面，胴打ち落とし面）に関して、以下の5段階で回答してもらった。

- 1：いままでにまったく使用したことがない技
- 2：いままでに1，2回は使用したことがある技
- 3：たまに使用する技（地稽古及び試合中の5回に1回程度の割合で使用する技）
- 4：かなり使用する技（地稽古及び試合中の2回に1回程度の割合で使用する技）
- 5：必ず毎回使用する技

アンケートは、地稽古及び試合中に使用する技（必ずしも有効打突にならなくてもよい）と、有効打突になったことがある技について、それぞれ回答してもらった。

3. 統計処理

各使用技について5段階の値の平均値と標準偏差を求めた。そして、日本の学生と韓国の学生の平均値の比較には対応のないt検定を用い、有意水準は5%とした。

4. 結果

（1）地稽古および試合中に使用する技

地稽古および試合中に使用する技の結果を表1に示した。使用する技において日本と韓国との間に有意差が認められた技は多くみられた。しかも、韓国の方が日本よりも有意に高い得点を示したものが多くみられた。使用する技として、得点が高かった技（3.5以上を示した技）は、次の通りであった。韓国の学生において得点が高かった技は、引き面 $3.90 (\pm 1.06)$ ，小手一面 $3.90 (\pm 1.13)$ ，引き胴 $3.61 (\pm 1.27)$ ，引き小手 $3.55 (\pm 1.09)$ の4つの技であった。一方、日本の学生において得点が高かったのは、出ばな小手 $4.22 (\pm 0.88)$ ，出ばな面 $4.11 (\pm 0.99)$ ，引き面 $4.02 (\pm 1.09)$ ，小手一面 $3.95 (\pm 0.97)$ ，引き胴 $3.62 (\pm 1.12)$ ，引き小手 $3.60 (\pm 1.18)$ ，面返し胴 $3.57 (\pm 1.07)$ ，かつぎ面 $3.52 (\pm 0.95)$ の8つ技であり、韓国の学生よりも多かった。引き面，引き小手，引き胴，小手一面の4つの技については、日本，韓国ともに高い値を示し、両国間で有意差は見られなかった。一方，かつぎ面，出ばな面，出ばな小手，面返し胴については、有意差が認められ、いずれも日本の学生の方が高い値を示した。

逆に、使用する技として、得点が低かった技（2.0未満を示した技）は、韓国の学生では5つの技であったのに対して、日本の学生では14の技であり、日本の学生の方が多かった。韓国の学生において低かった技は、片手小手 $1.64 (\pm 1.00)$ ，払い突き $1.80 (\pm 0.83)$ ，出ばな突き $1.80 (\pm 0.99)$ ，小手打ち落とし突き $1.98 (\pm 1.09)$ ，片手面 $1.99 (\pm 0.96)$ の5技であり、突き技や片手技の得点が低い傾向が見られた。突き技に関しては、日本の学生と有意差が認められ、日本の学生の方が高い使用頻度を示した。

（2）地稽古および試合中に有効打突になったことがある技

次に、地稽古および試合中に有効打突になったことがある技の結果を表2に示した。有効打突になったことがあると回答した技において、日本の学生と韓国の学生との間に有意差が認められた技は多く、韓国の学生の方が日本の学生よりも有意に高い得点を示した技が多くみられた。そのうち有効打突になったことがある技として、得点が高かった（3.5以上を示した）技は、次の通りであった。韓国の学生において得点が高かったのは、順に、引き胴 $3.58 (\pm 1.19)$ ，引き面 $3.55 (\pm 1.12)$ の2つの技であった。一方、日本の学生において得点が高かったのは、順に、出ばな小手 $4.00 (\pm$

表1 使用する技

		韓国	有意差	日本
しかけ技	払い面	3.34(1.01)		3.07(0.79)
	払い小手	3.21(0.96)		3.06(0.86)
	払い胴	2.69(0.91)	**	2.00(0.97)
	払い突き	1.80(0.83)	*	2.16(1.05)
	かつぎ面	3.10(0.99)	**	3.52(0.95)
	かつぎ小手	2.41(1.01)	*	2.77(1.16)
	かつぎ胴	2.28(1.06)	*	1.66(0.85)
	引き面	3.90(1.06)		4.02(1.10)
	引き小手	3.55(1.09)		3.60(1.18)
	引き胴	3.61(1.27)		3.62(1.12)
	出ばな面	3.44(1.09)	**	4.11(0.99)
	出ばな小手	3.34(1.12)	**	4.22(0.88)
	出ばな突き	1.80(0.99)	*	2.14(1.12)
	小手-面	3.90(1.13)		3.95(0.97)
	小手-胴	3.30(0.96)	**	2.76(1.08)
	面-胴	2.93(1.05)	**	1.62(0.86)
	突き-面	2.38(1.10)	*	2.69(0.89)
	突き-小手	2.13(1.13)	*	1.77(0.94)
	面-面	3.01(1.12)		2.90(1.00)
	小手-面-胴	2.01(1.15)	**	1.52(0.77)
	片手面	1.99(0.96)		1.73(1.17)
	片手小手	1.64(1.00)		1.56(1.15)
	片手突き	2.33(1.06)	**	2.91(1.02)
応じ技	面抜き面	2.99(1.02)	**	2.37(1.02)
	面抜き胴	3.41(1.12)		3.27(1.11)
	面抜き小手	3.41(1.23)	**	2.16(1.06)
	小手抜き小手	2.60(0.91)	**	2.13(0.89)
	小手抜き面	3.26(0.99)		3.15(0.91)
	面返し胴	2.68(1.18)	**	3.57(1.07)
	面返し面	2.60(1.13)		2.38(0.94)
	小手返し小手	2.48(0.97)	**	2.06(0.97)
	小手返し面	2.69(0.89)	**	3.14(1.02)
	胴返し面	2.46(1.07)	**	1.76(1.00)
	面すりあげ面	2.69(1.11)		2.59(0.94)
	面すりあげ胴	2.73(0.99)	**	2.20(0.99)
	面すりあげ小手	2.46(1.08)	**	1.97(0.95)
	小手すりあげ小手	2.25(1.06)		2.03(1.05)
	小手すりあげ面	2.73(0.99)		2.93(1.02)
	突きすりあげ面	2.06(0.95)		1.96(1.11)
	面打ち落とし面	2.25(1.03)	*	1.93(1.00)
	小手打ち落とし面	2.66(1.08)	**	2.25(1.02)
	小手打ち落とし小手	2.49(1.10)	**	1.61(0.81)
	小手打ち落とし突き	1.98(1.09)	**	1.47(0.74)
	突き打ち落とし面	2.06(1.12)		1.96(1.12)
	胴打ち落とし面	2.10(0.96)	**	1.71(0.80)

注) 値はすべて平均値(標準偏差), **:P<0.01,*:P<0.05

0.99), 出ばな面3.81 (±1.05), 引き面3.55 (±1.09)の3つの技であった。

逆に有効打突になった技として, 得点が低かった技

表2 有効打突になったことがある技

		韓国	有意差	日本
しかけ技	払い面	3.00(1.03)		2.89(0.90)
	払い小手	2.79(1.04)		2.59(0.99)
	払い胴	2.68(1.04)	**	1.80(0.95)
	払い突き	1.83(1.05)		1.89(0.96)
	かつぎ面	2.99(0.99)		3.06(1.13)
	かつぎ小手	2.43(1.02)		2.24(1.08)
	かつぎ胴	2.50(1.14)	**	1.62(0.95)
	引き面	3.55(1.12)		3.55(1.09)
	引き小手	3.21(1.06)		3.03(1.07)
	引き胴	3.58(1.12)	*	3.12(1.16)
	出ばな面	3.18(1.11)	**	3.81(1.05)
	出ばな小手	3.13(1.08)	**	4.00(0.99)
	出ばな突き	2.01(1.10)		1.95(1.11)
	小手-面	3.38(1.13)		3.18(1.08)
	小手-胴	2.90(1.03)	**	2.40(1.14)
	面-胴	2.63(1.11)	**	1.62(0.99)
	突き-面	2.14(1.04)		2.44(1.08)
	突き-小手	2.24(1.30)	**	1.65(0.85)
	面-面	2.85(1.13)		2.63(1.21)
	小手-面-胴	1.91(0.96)	**	1.52(0.96)
	片手面	1.90(1.17)		1.72(1.23)
	片手小手	1.64(0.94)		1.61(1.13)
	片手突き	1.93(0.95)	*	2.28(1.08)
応じ技	面抜き面	3.13(1.12)	**	1.89(0.99)
	面抜き胴	3.16(1.14)		2.86(1.25)
	面抜き小手	3.03(1.08)	**	1.99(1.03)
	小手抜き小手	2.51(0.87)	**	1.76(0.95)
	小手抜き面	2.91(1.13)		2.92(1.10)
	面返し胴	2.60(1.10)	**	3.32(1.25)
	面返し面	2.49(0.99)	**	2.08(1.05)
	小手返し小手	2.48(1.09)	**	1.76(0.99)
	小手返し面	2.51(1.08)	*	2.89(1.05)
	胴返し面	2.35(0.90)	**	1.82(1.06)
	面すりあげ面	2.69(1.25)	**	2.05(1.00)
	面すりあげ胴	2.71(1.14)	**	2.12(1.22)
	面すりあげ小手	2.45(1.14)	**	1.76(1.01)
	小手すりあげ小手	2.40(1.07)	**	1.79(0.96)
	小手すりあげ面	2.55(1.09)		2.81(1.18)
	突きすりあげ面	2.34(1.21)	**	1.74(1.02)
	面打ち落とし面	2.49(1.19)	**	1.80(1.06)
	小手打ち落とし面	2.68(1.17)	**	2.22(1.13)
	小手打ち落とし小手	2.49(1.24)	**	1.62(0.82)
	小手打ち落とし突き	1.96(1.15)	**	1.40(0.75)
	突き打ち落とし面	2.13(1.08)		1.86(1.10)
	胴打ち落とし面	2.23(1.20)	**	1.57(0.90)

注) 値はすべて平均値(標準偏差), **:P<0.01,*:P<0.05

(2.0未満を示した技)は, 韓国の学生では6つの技であったのに対して, 日本の学生では22の技であり, 日本の学生の方が多かった。韓国の学生において低かつ

た技は、使用する技と同様に、突き技や片手技の得点が高い傾向が見られた。しかし、突き技に関しては、地稽古および試合中に使用する技の場合とは違い、日本の学生と有意差が認められなかった。

5. 考 察

地稽古や試合で使用する技と、有効打突になったことがある技において、日本の大学生よりも高い得点を示した技の数は、韓国の大学生のほうが多かった。しかし、使用する頻度を得点でみると、3.5以上を示したのは、韓国の学生は4つの技に対して、日本の学生が8つの技であった。韓国の学生が高い得点を示した4つの技（引き面、引き小手、引き胴、小手-面）は、すべて日本の学生においても高い得点を示し、有意差は認められなかった。

恵士¹⁾らは、全日本剣道選手権大会における一流選手の発現打突を調査したところ、基本技のとび込み技を除いた技で一番多く発現されたのは、連続技（二、三段技）で、その次が引き技だったことを報告している。このことから、韓国と日本の学生が普段使用する技は、一流競技者の試合において多用される技とほぼ同じであったといえる。

一方、日本の学生が高得点を示し、かつ韓国の学生と有意差が認められたのは、かつぎ面、出ばな面、出ばな小手、面返し胴であった。その中でも、4.0以上の高い得点を示した技は、出ばな面と、出ばな小手であった。4.0以上を示した技は、韓国の学生では無かったのに対し、日本の学生は、出ばな小手 (4.22 ± 0.88)、出ばな面 (4.11 ± 0.99)、引き面 (4.02 ± 1.10) の3つの技があった。

有効打突になったことがある技に関しても、その頻度を得点でみると、3.5以上を示したのは、韓国の学生が、引き胴 (3.58 ± 1.12)、引き面 (3.55 ± 1.12) の2つの技に対して、日本の学生は、出ばな小手 (4.00 ± 0.99)、出ばな面 (3.81 ± 1.05)、引き面 (3.55 ± 1.09) の3つの技であった。

韓国の剣道と日本の剣道について、第10回世界剣道選手権大会韓国代表チーム総監督と監督が述べている²⁾。それによると、「韓国剣道は、体力や技のスピードはあるが、自分がどう攻めるかなど試合の組み立てに関しては劣っている。それに対し、日本の剣道は隙あれば鋭く確実に攻める」と述べている。

本研究の結果からも、韓国の学生は、常に動いて打突を繰り返していると考えられるため、使用する技の

種類は多い。しかし、近い間合いでの攻防を繰り返して行っているために、鏑迫り合いになると先に、引き技を出すことが多く、それが有効打突には結びついていないものの、他の多くの技は決め技にはなっていないと考えられる。それに対して日本の学生は、剣先の攻防から技を出しているため、繰り出す技の種類は韓国に学生に比べて少ないものの、攻め勝って繰り出す技が、一本になっていると考えられ、本研究の結果からも、特に剣先の攻防から相手を引き出しての出ばな技が有効な技となっていると考えられる。

剣道では、相手の「起こり」、「居ついたところ」、「技のつきたところ」を三つの許さぬところと言い、打突の絶好のチャンスとされている⁸⁾。その「起こり」ととらえるのが出ばな技である。出ばな技は、自分が攻めて勝った結果、相手が前に出てくるところを捉える技で、自分自身の攻めが重要となってくる。日本の学生は、この自分自身の攻めを重視して稽古や試合に臨んでいると考えられる。

特に、突き技に関して、日本の学生の方が高い使用頻度を示しているにもかかわらず、有効打突になったことがある技でみると、韓国の学生同様に低い値を示している。つまり、日本の学生の場合、突き技は有効打突を取りに行く技というよりも攻めた結果の技であると考えられ、それが出ばな技につながっているものと考えられる。

韓国と日本の大学生剣道競技者を対象として意識調査を行った研究⁵⁾によると、「剣道に何を求めるか？」の問いに対して、日本の学生は76%が精神的なこと、11%が技術的なことであったのに対して、韓国の学生は精神的なことが28%、技術的なことが50%であった。このように日本の学生は剣道に対して精神的なものを求め、稽古や試合においても精神的に相手よりも優り、攻め勝ち、一本をとるという考えをもっているものと思われ、それに対して、韓国の学生は、精神的な面よりも、技術的な打突をもって相手に勝つという考え方なのではないかと思われる。つまり、剣道を武道と捉えるか、スポーツと捉えるか、の考えの違いであると考えられ、それが今回の結果に表れたものと示唆される。

6. まとめ

本研究では、韓国の大学生剣道競技者とを対象として、地稽古中および試合中に使用する技についてアンケート調査を行い、日本の大学生剣道競技者の使用す

る技と比較を行った。その結果は、以下の通りである。

- 1) 使用する技として、得点が高かった（3.5以上を示した）技は、韓国の学生では、引き面、小手一面、引き胴、引き小手であった。一方、日本の学生では、出ばな小手、出ばな面、引き面、小手一面、引き胴、引き小手、面返し胴、かつぎ面であった。
- 2) 有効打突になったことがある技として、得点が高かった（3.5以上を示した）技は、韓国の学生では、引き胴、引き面であった。一方、日本の学生において得点が高かったのは、出ばな小手、出ばな面、引き面であった。

文 献

- 1) 恵土孝吉, 端由紀美, 渡辺香: 剣道試合における分析的研究——流選手の技術——. 金沢大学教育学部紀要教科教育編, 32, 81-91, 1983.
- 2) 月刊剣道時代: 体育とスポーツ出版社, 22-31, 1997 (6).
- 3) Honda, S : Kendo at Secondary Schools in the U. K.: Development of school Kendo in Gloucestershire, 武道学研究, 39 (1), 23-33, 2006.
- 4) Honda, S : Kendo within a Spanish University Curriculum, 武道学研究, 40 (2), 51-61, 2007.
- 5) 井島章, 岩切公治, 井上哲朗, 朴東哲: 韓国における剣道の意識調査—韓国及び日本の大学生を比較して—, 国際武道大学紀要, 16, 191-196, 2000.
- 6) 井上哲朗, 井島章, 岩切公治, 朴東哲: 韓国の剣道の道場に関する調査. 武道学研究第36巻別冊, 58, 2003.
- 7) 岩切公治: 韓国剣道競技者の意識. 月刊武道 (3), 144-145, 2001.
- 8) 蒔田実: DVDでわかる剣道入門. 西東社, 108-109, 2006.
- 9) 大野伸行, 本田壮太郎, 香田郡秀, 久保田健吾, 吉水浩: ギリシャ共和国における剣道の定着課程—連盟設立から現在—, 武道学研究43 (2), 13-24, 2011.
- 10) 大島宏太郎, 安藤宏三: 剣道入門. 東京書店, 1978.
- 11) 朴東哲: 韓国剣道事情. 月刊武道 (2), 146-147, 2001.
- 12) 高橋健太郎: アメリカ合衆国南東部における剣道事情. 武道学研究, 41 (1), 39-44, 2008.
- 13) 湯野正憲, 岡憲次郎, 土居安夫, 菅原東: 剣道指導ハンドブック. 29-31, 大修館書店, 1976.
- 14) 全国教育系大学学部剣道連盟研究部会編: 剣道の学習指導. 84-85, 不昧堂出版. 1987.

(2012年12月13日 受理)

教育研究活動報告

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

大学教育研究プロジェクトは、本学の教育研究活動を活発化させるために2007年度から始まったが、2010年度から第二期に入った。本学の教育研究の柱となる「1. 武道, 2. 競技力の向上, 3. 学校教育, 4. スポーツの振興」(1. 武道は研究所プロジェクトで対応)に沿った3ヵ年のもの6件と単年度の一般公募4件が研究支援委員会で審議の上、選定された。この内、最初の1件は2011年度に科学研究費補助金基盤研究(B)に採択された。2011年7月に学内プロジェクト研究発表会で研究の中間経過を発表し、研究所掲示板にポスター発表をしている。

研究報告書は研究完了年度の翌年度に本紀要に掲載することになっているので、今年度は3ヵ年のものではなく、諸般の事情により、昨年度で終了した1件(No 6)と、単年度で研究完了した一般公募研究1件の報告書を掲載することにする。

2011年度大学教育研究プロジェクト一覧

No	研究課題名	分 類	研究代表者
1	スポーツ医科学サポートを通じたトレーナー育成システムの構築に関する研究	競技力の向上	山本 利春
2	学校水泳教育の位置づけに関する実態調査と将来展望	学校体育	土居陽治郎
3	幼少年のライフスタイル改善と体力向上に関わる近隣地域との共同調査介入研究	学校体育	小磯 透
4	地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果	スポーツの振興	谷口 有子
5	公共スポーツ施設の指定管理者制度に対応できる体育系学部教育内容の開発 ～千葉県内施設管理者企業との連携を中心に～	スポーツの振興	鈴木 知幸
6	大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携事業について	スポーツの振興	木村 寿一
7	メディカルスタッフの競技復帰に関する認識調査	一般公募	笠原 政志

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

【プロジェクト名】

メディカルスタッフの競技復帰に関する認識調査

【プロジェクトの分類】

一般公募

【研究期間】

2011年4月～2012年3月

【プロジェクト代表者氏名・所属部局・職名】

笠原 政志（スポーツトレーナー学科・助教）

【共同研究者・（所属）】

山本 利春・荻内 隆司・遠藤 誠治（国際武道大学大学院）

劔持 佑起・（帝京大学）

竹田 京平・（株式会社カロ）

【キーワード】

競技復帰、アスレティックリハビリテーション・意識調査

【研究成果の概要】

本研究は、スポーツドクター（以下 Dr.）とアスレティックトレーナー（以下 AT）を対象にスポーツ選手の競技復帰に関する意識調査を行い、スポーツ選手の安全で、迅速に競技復帰させる際のアスレティックリハビリテーションを遂行するための基礎資料を得る事を目的とした。結果は Dr. と AT において共通見解が得られている点と Dr. よりも AT の方が重要視している点が明らかとなった。本結果を踏まえ競技復帰に対する考え方を整理することが必要であると同時に、競技復帰について選手や指導者がどのように考えているかも同時に調査する必要があると考えられる。

なお、報告書はプロジェクト名の「メディカルスタッフの競技復帰に関する認識調査」をより厳密にした「競技復帰に関するスポーツドクターとアスレティックトレーナーの意識調査」を題名とする。

【プロジェクト予算額及び執行額】

（金額単位：円）

	予算額	執行額
2011年度	285,000	243,920
合 計	285,000	243,920

競技復帰に関するスポーツドクターとアスレティックトレーナーの 意識調査

笠原政志, 山本利春, 荻内隆司, 劔持佑起, 竹田京平, 遠藤誠治

The Opinion Poll about the game return of the Sports Doctor and the Athletic Trainer

Masashi KASAHARA, Toshiharu YAMAMOTO, Takashi OGIUCHI, Yuki KENMOCHI,

Kyouhei TAKEDA and Masaharu ENDO

1. 目 的

競技者が怪我をした後、元の競技により早く安全に復帰させることを目的としたリハビリテーションの必要性がスポーツ界で認識されてきている。この競技復帰を目的として行うリハビリテーションは、日常生活に復帰させることを目的としたメディカルリハビリテーションと対比してアスレティックリハビリテーション（以下アスリハ）と呼ばれている。つまり、競技復帰を可能にするために様々な身体機能を獲得させることがアスリハの最終ゴールとなる。

近年では、安全に効率よくアスリハを遂行して選手の競技復帰を目指すために、アスリハに携わる医師、理学療法士、アスレティックトレーナー（以下AT）など様々なスタッフが関わり、それぞれの専門性を活かしながら選手の競技復帰に向けたアプローチが行われている。しかし、専門スタッフの役割や立場、あるいはそれぞれが教育を受けてきた環境などが異なるため、必ずしもそれぞれの専門スタッフが競技復帰やアスリハの進行について共通認識を持っているとは限らない。また、アスリハに関する参考書は1980年代から数多く出版され、アスリハの必要性や意義については、どの書物においても紹介されているが、特に競技復帰近くなった際のアスリハに関する情報はまだまだ少ない状況である。さらに、実際のアスリハ指導場面

では、選手のアスリハに関与するスタッフの見解が異なり、選手が困惑しているケースも少なくない。すなわち、競技復帰に近くなればなるほど、その進行、競技復帰の見極め、判断が不明瞭な点が多いからこそそれに関わるスタッフ間の共通認識が大事になる。現実的に競技復帰と言っても、競技種目や競技環境の違いなど様々な要素が複雑に絡みあっているため、競技復帰を明確に定義することは難しい。しかし、スポーツ現場においては選手のアスリハに関与する方々が多いだけに、選手を安全且つ迅速に競技復帰させるためには、それぞれの職種の者が競技復帰をどのように認識しているかを理解することは重要であるが本当に共通認識を持てているかは不明である。

そこで、本研究は、選手の競技復帰に関与する医師とATに対して競技復帰に関する意識調査を行い、スポーツ選手の安全で、迅速に競技復帰させる際のアスリハを遂行するための基礎資料を得る事を目的とした。

2. 方 法

競技復帰に関する意識調査の対象はスポーツドクター（以下Dr.）とATとした。なお、対象とするDr.とATへのアンケート送付方法については、無作為に関係各者に直接郵送および電子メールにてアンケート協力をお願いし、アンケートに同意を得られた方のアンケート結果を有効回答とした。

アンケート用紙は独自のアンケート用紙を作成し、回答者のプロフィール、過去のスポーツ選手の診察およびアスリハ経験に関する調査、競技復帰に対する考え、診察およびアスリハでの戸惑い、競技復帰に重要な要素などについて選択式で設けた。なお、アンケートの回収数は Dr. が36名、AT が86名であった。

3. 結果

Dr.36名のプロフィールを表1に示した。本アンケート調査に回答した Dr. は日本体育協会公認スポーツドクターの資格を有している方が80.6%であり、取得経験年数は 8.8 ± 5.9 年であった。AT の86名のプロフィール集計を表1に示した。本アンケート調査に回答した AT は日本体育協会公認アスレティックトレーナーの資格を有している方が92.9%であり、取得経験年数は 8.6 ± 4.7 年であった（表1）。

表1 アスレティックトレーナー・スポーツドクターアンケート回答者の取得資格

アスレティックトレーナーのアンケート回答者プロフィール

資格	所得率(%)	取得年数(年)
日本体育協会公認アスレティックトレーナー	92.9	8.6 ± 4.7
NATA公認アスレティックトレーナー	7.1	10.7 ± 7.3
理学療法士	19.0	20.7 ± 1.7
柔道整復師	8.3	18.6 ± 7.7
鍼灸あん摩マッサージ	32.1	17.6 ± 6.7

スポーツドクターのアンケート回答者プロフィール

資格	所得率(%)	取得年数(年)
日本体育協会公認スポーツドクター	80.6	8.8 ± 5.9
日本整形外科学会スポーツ医	47.2	9.5 ± 6.6

アスリハにおける競技復帰時の問題点に関するアンケート結果では、アスリハにおける競技復帰時の問題点があった経験があると回答したのは Dr. は86.1%、AT は90.1%であり、どのような問題点があったかについては「再発のリスクがある」、「本人の勝手な判断での復帰」、「競技復帰について指導者との共通認識ができていない」の順に多く、Dr. と AT とともに同様な競技復帰に対する問題を経験していた。逆に、アスリハにおける競技復帰時の問題点がなかった経験がある

と回答したのは Dr. は47.2%、AT は58.1%であり、問題なく競技復帰できた点は Dr. では「Dr. と AT との共通理解あり」、「再発のリスクがない」、「競技現場でチェックができている」の順に多かった。一方、AT では「競技復帰となるチェックをできていない」、「競技現場でチェックができていない」、「指導者との共通理解」の順に高くなった。なお、「選手本人の理解度」という点においては Dr. よりも AT の方が多く理由として挙げていた（図1）。

次に、過去に競技復帰と判断した際に「かなり重要視した」と回答した項目においては、Dr. と AT で共通して「運動機能評価」、「競技パフォーマンス評価」、「本人の理解度」の順で多く、「試合日程」を「かなり重要視する」と回答した回答率は Dr. よりも AT の方が多かった（図2）。

Dr. ではスポーツ選手の診察時に、AT ではスポーツ選手のアスリハの実施時について「戸惑った経験がありますか」という問いについては、なんらかの形で戸惑ったと回答した Dr. は83.7%で、AT では82.8%であった。その戸惑った理由については Dr. では「選手の競技レベルが高い」、「選手が言うことを聞かない」、「競技特性がわからない競技」の順で多く、AT では「競技レベルが高い」、「選手を診る機会が少ない」、「選手が言うことを聞かない」の順で多かった（図3、4）。

逆に Dr. と AT 共に戸惑った経験がないと回答した方の経歴でみると、日本体育協会公認スポーツドクター取得後の経験年数が長く、スポーツ選手の外来だけでなく、チームドクターや救護ドクター経験など幅広い経験がみられ、AT では日本体育協会公認アスレティックトレーナー取得後の経験年数が長く、なんらかの形で全国レベル以上の競技レベルの選手サポートがある者が多かった（表2、3）。

最後に「競技復帰させるために重要な条件はなんですか」という設問に対して Dr. は「運動機能評価」、「競技レベル」、「競技特性」の順で多く、AT は「運動機能評価」、「競技特性」、「スケジュール」の順となり、「スケジュール」、「競技特性」、「競技環境」においては Dr. よりも AT の回答率が高かった（図5）。また、「競技復帰を判断するために理想的な場所はどこですか」という設問に対して Dr. も AT もスポーツフィールド、トレーニング環境のある部屋、リハビリ室、診察室の順に多く、Dr. は57.7%、26.9%、5.8%、9.6%、AT は70.0%、20.0%、4.5%、5.5%であった（図6）。

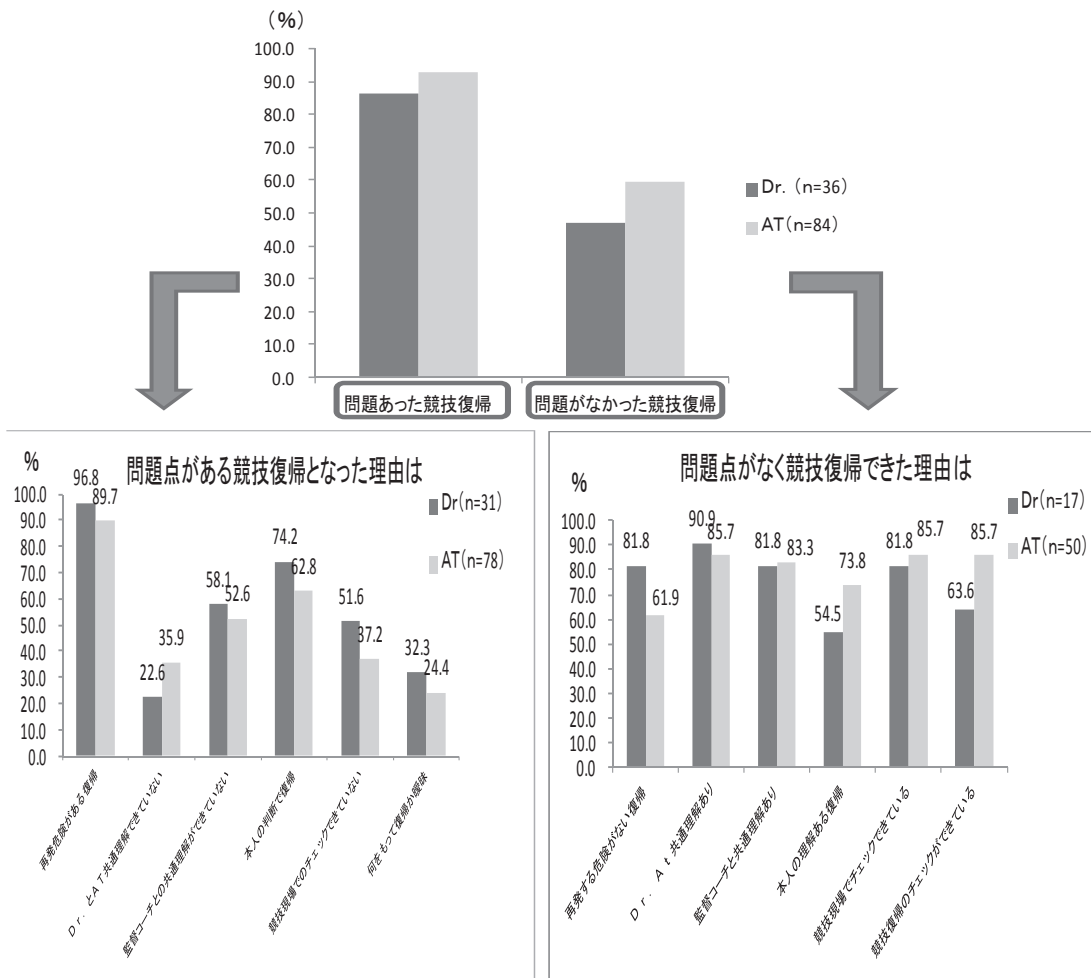


図1 競技復帰時の問題点の有無

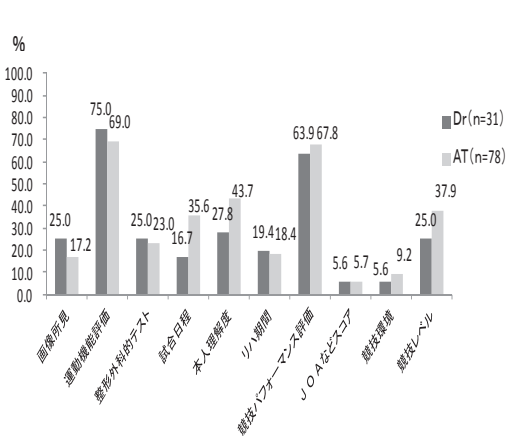


図2 競技復帰と判断した際に【かなり重要視】した点はなんですか

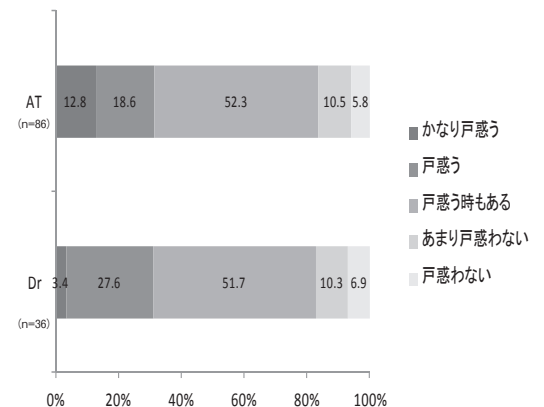


図3 Dr. においてはスポーツ選手の外来について AT においてはアスリハの進行について戸惑うことはありますか？

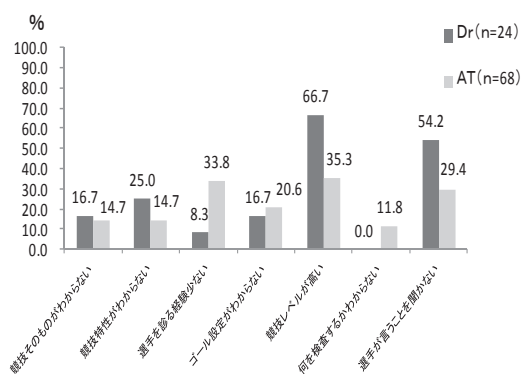


図4 戸惑う理由は何ですか

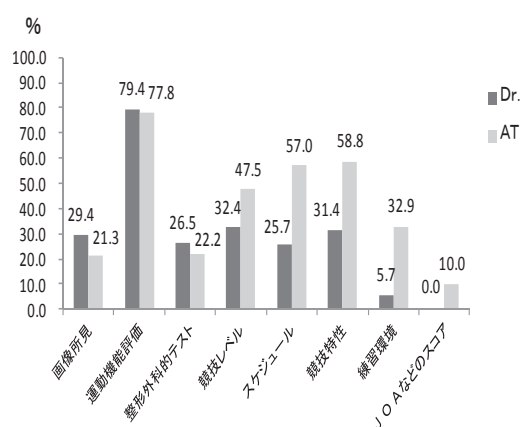


図5 競技復帰させるために必要となる【かなり重要な条件】

表2 スポーツ選手の診察時に戸惑いが無い
スポーツドクタープロフィール

スポーツ選手 診察時	回答者	競技復帰とは	日本体育協会公認 スポーツDr. (取得年数)年	日本整形外科学会 スポーツDr. (取得年数)年	チームDr. キャリア	医療機関勤務 キャリア	救護ドクター キャリア	スポポドDr. キャリア
戸惑わない	A	練習試合	20	20	世界レベルの選手	世界レベルの選手	全国レベルの選手	
	B	本人の満足度	12		世界レベルの選手	世界レベルの選手	全国レベルの選手	
あまり 戸惑わない	C	公式戦	6	4	全国レベルの選手	世界レベルの選手	全国レベルの選手	
	D	公式戦	13	13	全国レベルの選手	全国レベルの選手	全国レベルの選手	
	E	練習全て	5					世界レベルの選手

表3 スポーツ選手の診察時に戸惑いが無い
アスレティックトレーナープロフィール

	回答者	競技復帰とは	日本体育協会公認 AT (取得年数)年	全米アスレティック トレーナー協会AT (取得年数)年	理学療法士 (取得年数)年	鍼灸師 (取得年数)年	あんまマッサージ 師 (取得年数)年	チーム専員 キャリア	医療機関勤務 キャリア	救護AT キャリア	スポポドAT キャリア
戸惑わない	A	練習全て	11						世界レベルの選手		全国レベルの選手
	B	練習全て	12						全国レベルの選手		全国レベルの選手
	C	公式戦	13		20	26	27		世界レベルの選手		世界レベルの選手
	D	練習全て	13		28	23	24		世界レベルの選手		世界レベルの選手
	E	練習全て	10						世界レベルの選手		全国レベルの選手
あまり 戸惑わない	F	公式戦	12			15	15		世界レベルの選手		
	G	公式戦	5						世界レベルの選手		
	H	練習全て	10	13	29				世界レベルの選手		
	I	練習全て	15		23	25	25		世界レベルの選手		
	J	練習全て	6	12	6				全国レベルの選手	世界レベルの選手	
	K	練習全て	15			23			地方レベルの選手		全国レベルの選手
	L	練習部分参加				29	30		世界レベルの選手		
	M	練習試合			25				全国レベルの選手		

4. 考 察

アスリハにおける競技復帰について、Dr. と AT および指導者間との共通理解が図れている場合にはアスリハにおける問題がない競技復帰が可能になっており、逆に共通理解が図れていない場合には問題が残存

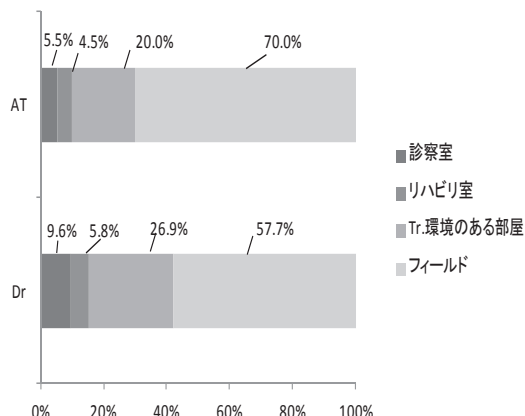


図6 競技復帰を判断するための理想的な場所はどこですか？

していながらの競技復帰であることが伺える。この結果は、円滑な競技復帰の遂行には Dr. と AT 間および指導者も含めたコミュニケーションが重要であることを示唆するものである。日本体育協会公認アスレティックトレーナー専門テキストのスポーツトレーナーの役割においては、「アスレティックトレーナーは、競技者のコンディションを最良にするための環境をつくるコーディネーターとして、競技者とドクター、競技者とコーチの間の円滑な連携を取り持つパイプ役としての役割が重要である」と記載をしており、コミュニケーション能力の重要性について記載されている。このコミュニケーションにおいては Dr. や AT の考えを選手や指導者側に押し付けるのではなく、選手や指導者が競技復帰をどのように解釈しているかについて、

Dr. や AT が理解することも必要である。したがって、Dr. と AT 側における共通認識事項を指導者に理解をしてもらうだけではなく、指導者側の意見や考えも踏まえて、競技復帰に対して Dr. と AT、そして選手や指導者との共通認識を図るための機会を設けることが必要であると考えられる。また、Dr. よりも AT の方が「選手本人の理解度」が問題ない競技復帰には重要である回答が多い点については、AT は選手にとって身近な立場であること、選手教育することも AT の 1 つの役割であることから、アスリハにおいて問題のない競技復帰をさせるためには AT が選手の理解度を高めるアプローチをする重要な役割を担っていると考えられる。

次に、Dr. も AT も競技復帰を判断する際には、十分な競技パフォーマンスを発揮するために必要な運動機能が十分に確保されているかを重要視していた。一方、AT はさらに「本人の理解度」を重要視しているとの回答が多かった。再発予防や 2 次的な傷害の予防を実現するには、何故その怪我をしてしまったのか、あるいは再び怪我をしないためにはどんな運動機能が必要であり、そのためにはどのようなリコンディショニングしなければならないかを選手本人が理解することがかなり重要になる。したがって、AT は各競技におけるパフォーマンスに関連する運動機能の役割を知り、具体的なリコンディショニング指導に関与するからこそ、Dr. よりも「選手本人の理解度」を重要視しているのではないかと考えられる。また、AT においては、試合日程をかなり重要視するとの回答も Dr. よりも多くなった。監督やコーチに近い立場である AT は再発のリスクや問題点が完全に消失しなくとも、チーム状況や試合スケジュールを考慮し、目標となる試合に合わせて競技復帰させることが求められるからである。

続いて Dr. ではスポーツ選手の診察時に、AT ではスポーツ選手のアスリハ実施時における「戸惑い」の有無における調査では、Dr. も AT も競技レベルが高いほど戸惑いを感じるとの回答が多かった。この点については、競技レベルが高くなると、選手から求める内容も幅広くなってくるからではないかと考えられる。一方、Dr. や AT が選手の競技特性や選手を取り巻く環境、そして選手自身が何を求めているのかということについてなどを十分理解していないことで、選手の意見と食い違ってしまうことがある。すなわち、総合的なコミュニケーションをどのように図るかがこ

の点についての課題になると考えられる。

逆に Dr. と AT 共に戸惑った経験がないと回答した方々の経歴からすると幅広く、十分な経験がある方々が多い傾向にあった。すなわち、これまでの様々なスポーツ選手のアスリハや診察および選手の特性などを経験したからこそわかる事があり、その経験がスポーツ選手の診察およびアスリハの実施に関する判断材料になっている。つまり臨床的な現場経験を積み重ねることでスポーツ選手を納得させることのできる能力が培われるのではないかと考えられる。

また、競技復帰とは何かという質問に対して、Dr. は公式戦を中心に試合を競技復帰として考えている方が多いのに対して、AT は練習に全て参加することが競技復帰と考えている方が多い結果となった。競技によっては、試合の一部分のみへの参加となることもある。例えば野球でいえば、代打や限られた 1 イニングのみ投げる場合がそれに当たる。試合への参加が競技復帰となると、問題があって全てのプレーができない状況で試合に出場した場合であっても競技復帰と判断されてしまうことになる。つまり、AT においては選手が試合の 1 部に参加可能であったとしても、アスリハが完全に終了したわけではないと考えているため、試合出場が競技復帰ではなく練習全てに参加することが競技復帰と回答した方が多かったのではないかと考えられる。また、公式戦への出場が競技復帰の目安であると、チームスポーツである場合だと、公式戦に出場することができない競技レベルの選手もいる。そうすると公式戦への出場が必ずしも競技復帰になるとは限らない場合も存在する。全ての練習に参加できなければ、試合に出場させないというチームがあることや、練習に全て参加できなければ、十分な結果が得られないため、競技復帰とは全ての練習に参加することであると考えている回答者もいた。さらに、回答の中には「競技復帰」は競技に一部でも参加することであり「完全復帰」という表現が競技に全て参加することと捉えている方もいた。その他では「色々な場面や状況によって競技復帰という考え方が異なる」と回答した方もいた。競技復帰とは「return to play」と言葉で表されていることが多く、「元の状態に戻ること」というように解釈される。以上を踏まえると、一部のプレーが出来るようになることは「元の状態に戻ること」ではないと考えることができる。

近年、競技復帰という言葉はアスリハに関する書物、あるいは各スポーツ医学に関係する学会などにお

いてテーマとして取り上げられることが多い。しかし、競技復帰とは何かを定義されている書物等は散見しない。それゆえに、現状では競技復帰の考え方についてはそれぞれの捉え方によって様々な解釈がなされている現状である。そのため今回の結果を踏まえ競技復帰について整理することはDr. とATにおける共通理解だけに限らず、その言葉を聞いた選手や監督コーチがどう解釈するか統一見解を持たせるためにも重要である。

最後に「競技復帰させるために重要な条件は何か」という問いに対しては、Dr. とAT共に「運動機能評価」がとても重要であると回答しており、スポーツ選手を対象とした運動機能評価の方法や診るべき視点をDr. とATの共通理解として統一見解を得ることができれば競技復帰の見極めをよりスムーズに判断することができるのではないかと考えられる。また、ATにおいては競技復帰させる条件の中に「スケジュール」との回答が多かった。ATは監督・コーチとの連携を図ることが必要であるため、チームや選手の練習・試合スケジュールに合わせて競技復帰に向けてのゴール設定を決めることが多い。そのため、選手の意向だけに限らず、チーム事情で早期競技復帰が必要な場合や、学校スポーツのようにまだ下級生という立場であれば、急がずじっくり時間をかけた競技復帰も可能になると考えられる。以上の点からATはDr. よりも

「スケジュール」を重要視すると回答した方が多かったのではないかと考えられる。また、「競技復帰を判断するために理想的な場所はどこですか」という設問では、Dr. 84.6%、AT 90.0%がスポーツフィールドあるいはトレーニング環境のある部屋と回答し、最終的な競技パフォーマンスを評価することが理想的であると考えている結果となった。すなわち、競技復帰を判断するためには、競技パフォーマンスを評価するべくフィールドレベルでの判断ができる環境およびその環境でアスリハをするATが競技復帰を判断するためにも重要な役割を担っていると考えられる。

5. まとめ

本研究はDr. とATを対象にスポーツ選手の競技復帰に関するアンケート調査を行った。アンケート調査結果からDr. とATにおいて共通見解が得られている点とDr. よりもATの方が重要視している点が明らかとなった。本結果を踏まえ競技復帰に対する考え方を整理することが必要であると同時に、競技復帰について選手や指導者がどのように考えているかも同時に調査する必要があると考えられる。

表5 スポーツ選手の診察およびアスレティックリハビリテーションでの戸惑い

	選手レベル	かなり戸惑う	戸惑う	戸惑う時もある	あまり戸惑わない	戸惑わない
Dr. 全体	世界	2.8%	13.9%	13.9%	5.6%	5.6%
	全国	0.0%	8.3%	22.2%	2.8%	0.0%
	地方以下	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%
	世界	6.0%	6.0%	27.4%	9.5%	4.8%
AT 全体	全国	7.1%	10.7%	25.0%	1.2%	1.2%
	地方以下	0.0%	2.4%	1.2%	0.0%	0.0%
医療機関 Dr.	世界	2.8%	11.1%	8.3%	2.8%	5.6%
	全国	0.0%	5.6%	16.7%	2.8%	0.0%
	地方以下	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%
	世界	2.4%	3.6%	13.1%	4.8%	2.4%
医療機関 AT	全国	6.0%	2.4%	17.9%	2.4%	1.2%
	地方以下	1.2%	2.4%	3.6%	0.0%	0.0%
チーム Dr.	世界	0.0%	5.6%	13.9%	2.8%	5.6%
	全国	2.8%	8.3%	16.7%	0.0%	0.0%
	地方以下	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%
	世界	4.8%	1.2%	10.7%	4.8%	2.4%
チーム AT	全国	4.8%	4.8%	19.0%	0.0%	1.2%
	地方以下	0.0%	0.0%	6.0%	1.2%	1.2%
スポット Dr.	世界	0.0%	2.8%	5.6%	0.0%	0.0%
	全国	0.0%	2.8%	11.1%	5.6%	5.6%
	地方以下	0.0%	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%
	世界	0.0%	1.2%	4.8%	1.2%	0.0%
スポット AT	全国	1.2%	1.2%	7.1%	1.2%	1.2%
	地方以下	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%

表4 何をもって競技復帰とするか

	選手レベル	練習の部分参加	練習全て参加	練習試合参加	公式戦参加	選手の満足度
Dr. 全体	世界	2.4%	4.9%	9.8%	26.8%	7.3%
	全国	0.0%	4.9%	17.1%	12.2%	9.8%
	地方以下	0.0%	2.4%	0.0%	2.4%	0.0%
	世界	2.9%	18.6%	15.7%	11.8%	0.0%
AT 全体	全国	0.0%	13.7%	14.7%	15.7%	4.9%
	地方以下	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%
医療機関 Dr.	世界	0.0%	2.9%	8.8%	26.5%	8.8%
	全国	2.9%	0.0%	11.8%	14.7%	8.8%
	地方以下	0.0%	8.8%	2.9%	0.0%	2.9%
	世界	4.5%	13.6%	12.1%	10.6%	0.0%
医療機関 AT	全国	0.0%	15.2%	16.7%	13.6%	6.1%
	地方以下	0.0%	3.0%	3.0%	1.5%	0.0%
チーム Dr.	世界	3.0%	3.0%	6.1%	21.2%	9.1%
	全国	0.0%	6.1%	18.2%	18.2%	12.1%
	地方以下	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%
	世界	3.3%	13.3%	11.7%	8.3%	0.0%
チーム AT	全国	1.7%	16.7%	11.7%	13.3%	3.3%
	地方以下	0.0%	6.7%	8.3%	1.7%	0.0%

参考文献

1. 山本利春：競技復帰を目的としたリハビリテーショントレーニングにおける留意点，ストレングス&コンディショニングジャーナル16（6）：2-7，2009.
2. 福林徹編：アスレティックリハビリテーションマニュアル，全日本病院出版会，東京，2006.
3. 小田桂吾，平野篤：中学・高校生，Team Doctor

Meeting2010再考：競技復帰へのプロセススポーツドクターとアスレティックトレーナーの役割，臨床スポーツ医学28（7），791-789，2011.

4. 山本利春：アスレティックトレーナーの役割，公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト第1巻アスレティックトレーナーの役割，財団法人日本体育協会，東京：26-34，2007.

（2012年12月13日 受理）

表6 スポーツドクターにおける競技復帰の条件

	選手レベル	回答項目	画像所見	運動機能	整形テスト	競技レベル	日程	競技特性	練習環境	客観的スコア
Dr. 全体	世界	かなり重要	14.3%	33.3%	13.9%	11.1%	13.9%	19.4%	2.8%	0.0%
		重要	25.7%	16.7%	25.0%	27.8%	27.8%	22.2%	38.9%	12.5%
		あまり重要でない	8.6%	0.0%	5.6%	8.3%	5.6%	5.6%	8.3%	28.1%
	全国	かなり重要	11.4%	36.1%	11.1%	19.4%	11.1%	11.1%	2.8%	0.0%
		重要	20.0%	5.6%	25.0%	19.4%	25.0%	27.8%	27.8%	9.4%
		あまり重要でない	8.6%	0.0%	5.6%	0.0%	5.6%	2.8%	8.3%	25.0%
	地方以下	かなり重要	2.9%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要	2.9%	2.8%	5.6%	5.6%	5.6%	2.8%	2.8%	3.1%
		あまり重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	3.1%
医療機関 Dr.	世界	かなり重要	5.7%	22.2%	8.3%	5.6%	11.1%	16.7%	2.8%	0.0%
		重要	22.9%	13.9%	19.4%	27.8%	22.2%	19.4%	30.6%	9.4%
		あまり重要でない	8.6%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%	21.9%
	全国	かなり重要	14.3%	19.4%	8.3%	8.3%	8.3%	5.6%	0.0%	0.0%
		重要	8.6%	8.3%	16.7%	16.7%	13.9%	19.4%	22.2%	12.5%
		あまり重要でない	5.7%	0.0%	2.8%	2.8%	5.6%	2.8%	5.6%	18.8%
	地方以下	かなり重要	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要	11.4%	2.8%	11.1%	11.1%	5.6%	8.3%	8.3%	6.3%
		あまり重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	3.1%
チーム Dr.	世界	かなり重要	8.6%	30.6%	5.6%	11.1%	16.7%	19.4%	5.6%	0.0%
		重要	25.7%	8.3%	27.8%	25.0%	22.2%	13.9%	27.8%	9.4%
		あまり重要でない	2.9%	0.0%	5.6%	2.8%	0.0%	5.6%	5.6%	21.9%
	全国	かなり重要	11.4%	30.6%	11.1%	16.7%	2.8%	8.3%	0.0%	0.0%
		重要	8.6%	0.0%	19.4%	8.3%	19.4%	13.9%	16.7%	9.4%
		あまり重要でない	5.7%	0.0%	0.0%	2.8%	8.3%	8.3%	11.1%	15.6%
	地方以下	かなり重要	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要	11.4%	2.8%	11.1%	11.1%	5.6%	8.3%	8.3%	6.3%
		あまり重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	3.1%
スポッ Dr.	世界	かなり重要	5.7%	22.2%	8.3%	5.6%	11.1%	16.7%	2.8%	0.0%
		重要	22.9%	13.9%	19.4%	27.8%	22.2%	19.4%	30.6%	9.4%
		あまり重要でない	8.6%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%	21.9%
	全国	かなり重要	11.4%	30.6%	11.1%	16.7%	2.8%	8.3%	0.0%	0.0%
		重要	8.6%	0.0%	19.4%	8.3%	19.4%	13.9%	16.7%	9.4%
		あまり重要でない	5.7%	0.0%	0.0%	2.8%	8.3%	8.3%	11.1%	15.6%
	地方以下	かなり重要	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要	11.4%	2.8%	11.1%	11.1%	5.6%	8.3%	8.3%	6.3%
		あまり重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	3.1%

表7 アスレティックトレーナーにおける競技復帰の条件

	選手レベル	回答項目	画像所見	運動機能	整形テスト	競技レベル	日程	競技特性	練習環境	客観的スコア
AT 全体	世界	かなり重要	13.3%	38.1%	10.8%	22.6%	27.4%	31.0%	13.1%	4.9%
		重要	27.7%	10.7%	30.1%	22.6%	19.0%	15.5%	29.8%	18.5%
		あまり重要でない	6.0%	0.0%	8.4%	2.4%	2.4%	1.2%	6.0%	19.8%
	全国	かなり重要	4.8%	34.5%	9.6%	19.0%	23.8%	22.6%	15.5%	3.7%
		重要	27.7%	8.3%	24.1%	19.0%	16.7%	19.0%	19.0%	14.8%
		あまり重要でない	9.6%	1.2%	8.4%	6.0%	2.4%	2.4%	7.1%	21.0%
	地方以下	かなり重要	2.4%	2.4%	1.2%	3.6%	2.4%	2.4%	2.4%	1.2%
		重要	0.0%	1.2%	2.4%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%
		あまり重要でない	1.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
医療機関 AT	世界	かなり重要	6.0%	17.9%	7.2%	10.7%	14.3%	15.5%	9.5%	3.7%
		重要	13.3%	6.0%	12.0%	13.1%	7.1%	7.1%	10.7%	7.4%
		あまり重要でない	4.8%	0.0%	4.8%	0.0%	2.4%	1.2%	3.6%	11.1%
	全国	かなり重要	6.0%	23.8%	7.2%	11.9%	13.1%	14.3%	8.3%	2.5%
		重要	16.9%	4.8%	12.0%	15.5%	13.1%	11.9%	13.1%	7.4%
		あまり重要でない	4.8%	0.0%	9.6%	1.2%	1.2%	1.2%	6.0%	16.0%
	地方以下	かなり重要	3.6%	6.0%	1.2%	6.0%	4.8%	4.8%	3.6%	1.2%
		重要	1.2%	1.2%	6.0%	1.2%	1.2%	1.2%	2.4%	3.7%
		あまり重要でない	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%
チームAT	世界	かなり重要	8.4%	19.0%	6.0%	10.7%	13.1%	15.5%	7.1%	2.5%
		重要	10.8%	4.8%	14.5%	9.5%	9.5%	6.0%	11.9%	9.9%
		あまり重要でない	4.8%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%	2.4%	3.6%	9.9%
	全国	かなり重要	4.8%	19.0%	4.8%	11.9%	15.5%	19.0%	8.3%	1.2%
		重要	19.3%	9.5%	18.1%	15.5%	10.7%	10.7%	11.9%	8.6%
		あまり重要でない	3.6%	1.2%	6.0%	2.4%	2.4%	0.0%	7.1%	14.8%
	地方以下	かなり重要	3.6%	6.0%	1.2%	6.0%	4.8%	4.8%	3.6%	1.2%
		重要	1.2%	1.2%	6.0%	1.2%	1.2%	1.2%	2.4%	3.7%
		あまり重要でない	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%
スポット AT	世界	かなり重要	6.0%	17.9%	7.2%	10.7%	14.3%	15.5%	9.5%	3.7%
		重要	13.3%	6.0%	12.0%	13.1%	7.1%	7.1%	10.7%	7.4%
		あまり重要でない	4.8%	0.0%	4.8%	0.0%	2.4%	1.2%	3.6%	11.1%
	全国	かなり重要	4.8%	19.0%	4.8%	11.9%	15.5%	19.0%	8.3%	1.2%
		重要	19.3%	9.5%	18.1%	15.5%	10.7%	10.7%	11.9%	8.6%
		あまり重要でない	3.6%	1.2%	6.0%	2.4%	2.4%	0.0%	7.1%	14.8%
	地方以下	かなり重要	3.6%	6.0%	1.2%	6.0%	4.8%	4.8%	3.6%	1.2%
		重要	1.2%	1.2%	6.0%	1.2%	1.2%	1.2%	2.4%	3.7%
		あまり重要でない	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%

表8 スポーツドクターにおける競技復帰に重要視すること

	選手レベル	回答項目	画像所見	運動機能	整形外科のテスト	日程	本人問題	リハビリ期間	競技パフォーマンス	客観的スコア	練習環境	競技レベル
Dr. 全体	世界	かなり重要視	13.9%	44.4%	13.9%	8.3%	11.1%	8.3%	27.8%	2.8%	2.8%	11.1%
		重要視	22.2%	5.6%	27.8%	30.6%	22.2%	36.1%	19.4%	2.8%	27.8%	27.8%
		あまり重要視	5.6%	0.0%	8.3%	8.3%	5.6%	2.8%	2.8%	30.6%	13.9%	0.0%
		重要視なし	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	8.3%	2.8%	5.6%
	全国	かなり重要視	8.3%	25.0%	8.3%	8.3%	13.9%	8.3%	30.6%	2.8%	2.8%	13.9%
		重要視	16.7%	13.9%	22.2%	25.0%	19.4%	22.2%	5.6%	2.8%	19.4%	22.2%
		あまり重要視	8.3%	0.0%	5.6%	5.6%	5.6%	5.6%	2.8%	25.0%	11.1%	0.0%
		重要視なし	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	0.0%
	地方以下	かなり重要視	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要視	2.8%	2.8%	5.6%	2.8%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%	5.6%	2.8%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
医療機関 Dr.	世界	かなり重要視	8.3%	36.1%	8.3%	8.3%	8.3%	5.6%	22.2%	2.8%	2.8%	11.1%
		重要視	19.4%	0.0%	19.4%	25.0%	19.4%	27.8%	13.9%	2.8%	25.0%	22.2%
		あまり重要視	5.6%	0.0%	8.3%	2.8%	5.6%	2.8%	0.0%	22.2%	5.6%	0.0%
		重要視なし	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%
	全国	かなり重要視	11.1%	30.6%	11.1%	5.6%	16.7%	8.3%	22.2%	2.8%	2.8%	11.1%
		重要視	11.1%	0.0%	16.7%	19.4%	11.1%	16.7%	5.6%	2.8%	13.9%	13.9%
		あまり重要視	2.8%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	5.6%	2.8%	16.7%	8.3%	0.0%
		重要視なし	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	0.0%
	地方以下	かなり重要視	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%	2.8%	2.8%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要視	5.6%	5.6%	8.3%	2.8%	5.6%	5.6%	0.0%	2.8%	5.6%	5.6%
		あまり重要視	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
チーム Dr.	世界	かなり重要視	11.1%	25.0%	8.3%	2.8%	2.8%	5.6%	13.9%	2.8%	0.0%	5.6%
		重要視	8.3%	5.6%	16.7%	22.2%	16.7%	25.0%	13.9%	0.0%	16.7%	16.7%
		あまり重要視	2.8%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%	0.0%	2.8%	16.7%	8.3%	0.0%
		重要視なし	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%
	全国	かなり重要視	8.3%	27.8%	8.3%	13.9%	16.7%	11.1%	30.6%	2.8%	5.6%	13.9%
		重要視	19.4%	11.1%	25.0%	25.0%	16.7%	22.2%	5.6%	2.8%	25.0%	25.0%
		あまり重要視	11.1%	0.0%	5.6%	0.0%	5.6%	2.8%	2.8%	25.0%	8.3%	0.0%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%
	地方以下	かなり重要視	2.8%	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%
		重要視	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
スポーツ Dr.	世界	かなり重要視	0.0%	8.3%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%
		重要視	5.6%	2.8%	5.6%	5.6%	5.6%	11.1%	8.3%	0.0%	2.8%	5.6%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	0.0%
		重要視なし	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%	0.0%
	全国	かなり重要視	8.3%	25.0%	13.9%	2.8%	13.9%	2.8%	22.2%	5.6%	2.8%	5.6%
		重要視	5.6%	2.8%	5.6%	22.2%	5.6%	22.2%	5.6%	2.8%	16.7%	16.7%
		あまり重要視	5.6%	0.0%	5.6%	2.8%	8.3%	2.8%	0.0%	13.9%	5.6%	0.0%
		重要視なし	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%
	地方以下	かなり重要視	2.8%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要視	2.8%	2.8%	5.6%	2.8%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	2.8%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	2.8%	0.0%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表9 アスレティックトレーナーにおける競技復帰に重要視すること

	選手レベル	回答項目	画像所見	運動機能	整形外科のテスト	日程	本人問題	リハビリ期間	競技パフォーマンス	客観的スコア	練習環境	競技レベル
AT. 全体	世界	かなり重要視	23.8%	46.4%	25.5%	29.5%	37.5%	28.9%	43.1%	7.7%	7.1%	35.0%
		重要視	59.5%	14.5%	48.9%	27.9%	17.2%	51.1%	11.1%	30.8%	57.1%	16.7%
		あまり重要視	9.5%	0.0%	14.9%	6.6%	6.3%	8.9%	4.2%	46.2%	28.6%	11.7%
		重要視なし	4.8%	0.0%	0.0%	3.3%	1.6%	2.2%	0.0%	7.7%	2.4%	3.3%
	全国	かなり重要視	11.9%	39.1%	17.0%	18.0%	21.9%	6.7%	37.5%	5.1%	11.9%	20.0%
		重要視	47.6%	13.0%	42.6%	27.9%	26.6%	48.9%	9.7%	28.2%	47.6%	28.3%
		あまり重要視	21.4%	1.4%	17.0%	13.1%	9.4%	24.4%	5.6%	35.9%	26.2%	10.0%
		重要視なし	7.1%	1.4%	2.1%	1.6%	0.0%	2.2%	0.0%	17.9%	0.0%	3.3%
	地方以下	かなり重要視	0.0%	1.4%	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%
		重要視	0.0%	1.4%	4.3%	0.0%	1.6%	4.4%	1.4%	0.0%	2.4%	1.7%
		あまり重要視	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	1.7%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%	0.0%	0.0%
医療機関 AT	世界	かなり重要視	8.3%	19.0%	9.5%	13.1%	15.5%	8.3%	17.9%	2.4%	2.4%	13.1%
		重要視	13.1%	6.0%	9.5%	8.3%	6.0%	13.1%	4.8%	7.1%	15.5%	8.3%
		あまり重要視	3.6%	0.0%	6.0%	2.4%	3.6%	3.6%	2.4%	10.7%	7.1%	2.4%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	1.2%
	全国	かなり重要視	6.0%	20.2%	6.0%	8.3%	11.9%	4.8%	17.9%	1.2%	4.8%	13.1%
		重要視	15.5%	8.3%	17.9%	13.1%	14.3%	17.9%	7.1%	6.0%	14.3%	11.9%
		あまり重要視	3.6%	0.0%	4.8%	7.1%	2.4%	3.6%	4.8%	11.9%	9.5%	2.4%
		重要視なし	4.8%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	7.1%	0.0%	1.2%
	地方以下	かなり重要視	0.0%	4.8%	0.0%	2.4%	3.6%	0.0%	3.6%	0.0%	0.0%	2.4%
		重要視	3.6%	1.2%	6.0%	3.6%	1.2%	6.0%	2.4%	1.2%	3.6%	2.4%
		あまり重要視	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	2.4%	1.2%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%
チーム AT	世界	かなり重要視	3.6%	16.7%	4.8%	9.5%	14.3%	2.4%	17.9%	1.2%	1.2%	10.7%
		重要視	15.5%	6.0%	14.3%	7.1%	6.0%	15.5%	3.6%	7.1%	10.7%	4.8%
		あまり重要視	1.2%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%	2.4%	1.2%	9.5%	8.3%	3.6%
		重要視なし	2.4%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%	0.0%	1.2%	1.2%	2.4%
	全国	かなり重要視	3.6%	21.4%	8.3%	9.5%	13.1%	4.8%	22.6%	2.4%	4.8%	7.1%
		重要視	19.0%	7.1%	16.7%	11.9%	11.9%	15.5%	4.8%	9.5%	13.1%	14.3%
		あまり重要視	6.0%	1.2%	3.6%	7.1%	4.8%	8.3%	2.4%	13.1%	8.3%	3.6%
		重要視なし	1.2%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	2.4%
	地方以下	かなり重要視	1.2%	4.8%	1.2%	3.6%	1.2%	2.4%	4.8%	0.0%	0.0%	1.2%
		重要視	3.6%	3.6%	6.0%	4.8%	3.6%	3.6%	2.4%	1.2%	2.4%	4.8%
		あまり重要視	2.4%	0.0%	1.2%	0.0%	2.4%	2.4%	1.2%	3.6%	6.0%	2.4%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%
スポーツ AT	世界	かなり重要視	2.4%	3.6%	1.2%	1.2%	1.2%	2.4%	6.0%	0.0%	0.0%	3.6%
		重要視	3.6%	3.6%	4.8%	4.8%	1.2%	4.8%	1.2%	1.2%	3.6%	0.0%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	3.6%	1.2%	2.4%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%
	全国	かなり重要視	3.6%	9.5%	2.4%	3.6%	6.0%	1.2%	7.1%	1.2%	1.2%	3.6%
		重要視	8.3%	2.4%	8.3%	3.6%	4.8%	8.3%	1.2%	2.4%	6.0%	3.6%
		あまり重要視	0.0%	0.0%	1.2%	3.6%	0.0%	1.2%	3.6%	3.6%	2.4%	1.2%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	1.2%
	地方以下	かなり重要視	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	1.2%
		重要視	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%
		あまり重要視	2.4%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%	1.2%	1.2%	0.0%
		重要視なし	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

【プロジェクト名】

大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携事業について

【プロジェクトの分類】

スポーツの振興

【研究期間】

2010年4月～2012年3月

【プロジェクト代表者氏名・所属部局・職名】

木村 寿一（国際スポーツ文化学科・准教授）

【共同研究者・（所属）】

松井 完太郎・土居 陽治郎・高見 令英・山平 芳美（国際武道大学）
渡部 鎌二（神奈川県立保健福祉大学）

【キーワード】

継続的支援、スポーツ教材の汎用性、語学力

【研究成果の概要】

本研究では、本学の学生がこれまでに築き上げた途上国におけるスポーツ指導のノウハウや教材について、多くの途上国で有効に活用してもらう支援システムを、青年海外協力隊のネットワークを利用して構築することができた。しかし、本学の卒業生が青年海外協力隊員として派遣されている任地に、これまでのプロジェクト経験者を後任隊員として派遣し、中・長期的かつ継続的な体育・スポーツ指導の実践を目的としたシステムは、後任者派遣の選定に不備があり調査の継続には至らなかった。

【プロジェクト予算額及び執行額】

（金額単位：円）

	予算額	執行額
2010年度	490,000	158,361
2011年度	574,000	95,560
合 計	1,064,000	253,921

大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携事業について

木村寿一, 松井完太郎, 土居陽治郎, 高見令英, 山平芳美, 渡部鎌二

International Budo University : Developing sports Education abroad with The Japan Overseas Cooperation Volunteers

Toshikazu KIMURA, Kantaro MATSUI, Youjiro DOI, Hideo TAKAMI,

Yoshimi YAMAHIRA and Ryouji WATANABE

1. プロジェクトの目的

2007年度から2009年度, 大学教育研究プロジェクト計画で「大学教育プログラムを通じた開発途上国におけるスポーツ教育活動」の研究が採択された。そしてカンボジアにおける体育・スポーツ教育に関する本学の教育システムを活用した継続的な協力・支援モデルが構築され, シェムリアップ州のスポーツ指導を含めたスポーツ環境の整備について成果を収める事が出来た。

2008年および2009年には青年海外協力隊員として派遣されていた卒業生の山平(共同研究者)の任地を訪れ, その活動支援を本学学生が行い, 卒業生と在学生のスポーツ国際協力の共同活動が実現した。その活動は, 青年海外協力隊員だけでは実現困難な活動を, 大学生がサポートするという画期的な取り組みで, 大学生が日本にいる間にカンボジアの卒業生隊員と連絡を取り合って準備を勧め, 渡航後に現地で打ち合わせを行い, 企画を実施するものである。勿論, 隊員の赴任先である現地教育機関からも高い評価を得た。

現在, 青年海外協力隊員の活動(2年間)は, およそ3代(6年間)を目安に継続的な派遣をおこなっているが, 前任者と後任者との間には殆ど面識や連携はなく, その支援効果には疑問が持たれた。つまり, 必ずしも出身校や専門競技が同一の者が後任隊員として選ばれるわけではなく, 全く異なった専門競技や志を持ったものが後任として赴任する問題がある。この

場合, 後任隊員が赴任すると, これまでの前任者が築き上げた活動が一変することが珍しくない。その様な問題点は, 支援を受ける途上国側にとって活動の中・長期的かつ継続的な発展を阻害しかねないものとなる場合がある。

そこで本プロジェクトでは, 前述の問題を改善すべくこれまでのプロジェクトのアイデアを基盤に, 本学の卒業生が青年海外協力隊員として派遣されている同じ任地に, 本プロジェクトの経験者を後任隊員として派遣し, 中・長期的かつ継続的な体育・スポーツ指導を実践するためのシステムを作ることを目的とした。また, 本学の学生が築き上げた途上国におけるスポーツ指導のノウハウと教材についてその有用性を探り, 多くの国で有効に活用してもらう為の支援システムを構築することを試みた。

2. 研究方法

2 - 1. 後任隊員について本学卒業生の青年海外協力隊派遣

2010年度の本プロジェクト研究から, 青年海外協力隊事務局の体育分野技術顧問である渡部鎌二氏が, 今後の活動への期待と有効性を調査すべく共同研究者として加わった。

そこで, すでに青年海外協力隊員として途上国各国に赴任している卒業生隊員(本研究関連プロジェクトに3年間参加)の後任に, 同じ志を持ったこれまでの大学教育研究プロジェクトに参加経験のある本学卒業

生の派遣の可能性（図1）について、実際に青年海外協力隊への応募から受験を実施し、派遣後の協力隊活動の継続的な支援状況とその効果について調査をおこなう予定であった。赴任地としては、山崎貴弘氏（後述）が赴任したモンゴル・ダルハン州の学校が候補地として挙げられた。

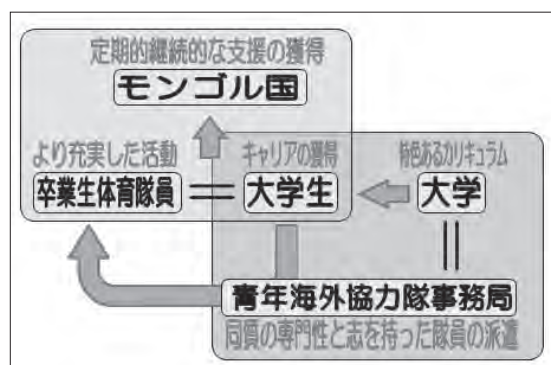


図1 卒業生の協力隊員としての派遣イメージ

2 - 2. スポーツ教材について本学卒業生の青年海外協力隊員への聞き取り調査

2007年度からの大学教育研究プロジェクトに参加した卒業生、土屋夏来氏（ボリビア：体育隊員：派遣期間2009年8月～2011年8月）、山崎貴弘氏（モンゴル：体育隊員：派遣期間2010年8月～2012年8月）、伊藤郁氏（エチオピア：体育隊員：派遣期間2010年10月～現在）ら3名が、青年海外協力隊員として派遣された。そこで赴任中および活動を終了した卒業生隊員と連絡を取り合い、これまでの研究プロジェクトに参加し、スポーツ教材の開発に携わったことが、実際の協力隊活動においてどのように有益であったか、また、それらのスポーツ教材を隊員活動中にどの様に利用していたかなどの聞き取り調査を実施した。

3. 研究進行状況の説明

3 - 1. 本学卒業生隊員の後任隊員に本学の卒業生を赴任させるモデルの構築

青年海外協力隊の活動は、個人の意思や志、技術やアイデアを持って、2年間の活動が実践されているのが現状で、その後赴任する後任隊員が必ずしも前任者の意思や活動をそのまま引き継ぐシステムが取られていない。そのため、隊員個人の資質に依存するところが大きく、後任隊員が赴任すると、これまでの活動が一変することは珍しくない。どうしても、限られた任

期中に成果を残そうとすると、隊員の得意な分野で勝負しようとする傾向が強く、同質の継続的な支援としては、途上国側に不鮮明な形で残される場合がある。その為、個々の隊員が任期中に構築したプログラムがバラバラに存在したり、任期終了とともにそのプログラムが頓挫したりするなど、統一感を持たない支援がおこなわれる場合がある。

今回の本プロジェクトにおけるモデル構築の試みは、前任隊員の活動を正しく引き継ぎ、前任者が活動に費やした時間と投資してきた資源を、継続的に有効活用するプログラムとして中長期的な成果に結び付けるシステムとなる。同じ大学に同時期に在籍し、同じプロジェクトを経験した先輩と後輩の関係において、先輩隊員の引継ぎを後輩隊員が後任者として派遣前1年程度から、既に任地の情報を収集し前任者との打ち合わせや活動の調整をおこなえることは、これまでの青年海外協力隊にはない画期的なシステムとなる。

そこで、本学の卒業生が体育隊員として赴任しているモンゴルに、中期的な活動の成果を達成するため、本学在学による卒業生隊員へ支援活動および、後任の体育隊員として引継ぎができる人材を本学学内で育成し、卒業後に派遣するモデルの検討・実践を試みた。幸いにも、在学中に青年海外協力隊への参加を希望していたA氏があらわれ、先にモンゴルに赴任している卒業生の山崎氏と、常に情報交換をおこなえる機会を得ることが出来た。

3 - 2. スポーツ教材の有用性と汎用性について

本学のカンボジアにおけるスポーツ教育支援活動は、文部科学省による平成18年度拠点システム構築事業として認定され、ボールやシューズの支援、バスケットボールやサッカーのゴールの設置、コートの整備、学生が作成したスポーツ（サッカー、バスケットボール、バレーボール）の指導教本・DVD等が、現地で有効に活用されていることが評価されている。

特に、指導教本やDVDは、在学中に「大学教育プログラムを通じた開発途上国におけるスポーツ教育活動」プロジェクトに参加していた前述の卒業生、土屋氏、山崎氏、伊藤氏が、青年海外協力隊員として派遣されていたそれぞれの国で、任国の公用語（ボリビア：スペイン語、モンゴル：モンゴル語、エチオピア：英語）に編集し直して現地で活用したという。また、この指導教本に興味を持った本学の卒業生でない青年海外協力隊員も、任地で赴任国の公用語に翻訳し

て活用している例も報告されている。

4. 研究成果

4 - 1. 本学卒業生隊員の後任隊員に本学の卒業生を赴任させるモデル

このモデルが検討されたのは、2007年度の大学教育研究プロジェクトを立ち上げるきっかけとなった、山平が青年海外協力隊員として派遣されていたカンボジア王国・シハヌークビル州の小学校教員養成学校及び付属小学校において、本学の在学生在が体育の授業や運動会の開催を支援したことがきっかけである。本来は、この支援に参加した学生達の中から、山平の後任として青年海外協力隊の受験を検討していたが、青年海外協力隊事務局の判断により後任隊員の派遣中止が決まり、やむなく他国での実施に切り替えなければならない状況となった。その後、この支援に参加した土屋氏、山崎氏、伊藤氏の3名が、前述の青年海外協力隊員としてそれぞれの任地に派遣された。そして、この中から体育隊員の活動が中・長期的に継続して効果が期待される山崎氏の後任隊員として、本学卒業生をモンゴルに派遣するモデルの検討をおこなうことになった。モンゴルが検討の対象となったのは、山崎氏の活動報告で、① 体育授業のシステムが確立されていること、② クラブ活動が盛んに行なわれていること、③ 課外活動・学外活動への理解があることが述べられており、今後の展望として、体育授業の内容強化やクラブ活動の大会開催（学校対抗戦やリーグ戦等）、運動会やサマーキャンプ（一部、既に実施済み）など、発展的な教育機会の充実が認められたからである。

山崎氏の赴任後、約1年してから、幸いにも在学中に大学教育研究プロジェクトに3年間携わった卒業生で、さらに山崎氏と同じバスケットボールを専門とした気心の知れたA氏（当時、日本の小学校で非常勤講師）が後任に名乗りを上げ、山崎氏の赴任中からE-Mail や Skype 等で連絡を取り合い、現地での活動や日本で準備しなければならないことなど、綿密な情報交換をおこなっていた。

しかし、A氏は2011年の青年海外協力隊秋募集において、一次選考の書類審査には合格したものの、二次選考の語学試験で一定の水準を満たすことが出来ずに不合格となった。青年海外協力隊の一次選考は、① 応募者調書、② 応募用紙、③ 職種別試験解答用紙（技術審査）、④ 語学力申告台紙、⑤ 健康診断書の審査からなる。特に④ 語学力申告台紙は、赴任国でのコミュニケーションを図るうえで、必要最低限の語学力をどの程度身に付けられるかを審査される重要な項目である。途上国からの要請では、体育隊員の場合、その多くは専攻指定言語が語学レベルDを求められる。語学レベルDは、英語で日常会話が出来る程度で、語学力の認定試験としては、TOEIC330点以上、TOEFL410点以上、英検準2級や3級、GTEC300点以上である。本来、このような語学力に関連した試験を受験し前述のレベルに達していれば、5年前までに遡って取得したものであれば資格として認められる。しかし、語学力に関連した資格を持っていない応募者には、二次試験においてTOEICを受験し、その時の得点が語学の資格として採用される。A氏の場合は、そのTOEICの試験で330点以上、獲得することができ

表1 青年海外協力隊 語学力目安表（青年海外協力隊 応募書類より）

語学レベル		英 語	
		TOEIC®	代替可能な資格
A	十分なコミュニケーションが可能	730点以上	英検1級・準1級、TOEFL® 550点（CBT213点、iBT79点）以上、国連英検A級・B級、IELTS® 6.0以上、ケンブリッジ英検（FCE、CAE/CPE）、GTEC650点以上、JICA 専門家定期テスト 200点以上、通訳案内業（案内士）
B	どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている	640点以上～730点未満	TOEFL® 500点（CBT173点、iBT61点）以上、IELTS® 5.0以上、GTEC560点以上、JICA 専門家定期テスト 180点以上
C	限られた範囲での業務上のコミュニケーションが可能	500点以上～640点未満	TOEFL® 470点（CBT150点、iBT52点）以上、英検2級、国連英検C級、IELTS® 4.0以上、ケンブリッジ英検 PET、GTEC510点以上、JICA 専門家定期テスト 150点以上
D	日常会話程度	330点以上～500点未満	TOEFL® 410点（CBT103点、iBT34点）以上、英検準2級・3級、GTEC300点以上

なかった。応募前から、TOEIC の対策を取りつつ試験に備えたが、仕事の傍ら勉強に励むには限界があったと考えられる。また、TOEIC より簡単と思われる英検 3 級の受験を応募前に検討していたが、受験日と勤務先の小学校の業務が重なり、受験することができなかったのが残念である。（現在は青年海外協力隊の応募では、二次試験における TOEIC の試験は行っておらず、全ての応募者に各自で語学の認定試験を受験し、その結果を申告する形式となっている。）

4 - 2. スポーツ教材の有用性と汎用性について

モンゴルに派遣された卒業生の山崎氏（2009 年度卒業）は、2012 年 8 月に任期を終え、無事、日本に帰国した。途中、アキレス腱の断裂にみまわれ、2011 年 11 月から一時帰国を余儀なくされたが、任地に再赴任し 2 年間の任期を全うした。この一時帰国の時期に、山崎氏は本学を訪れ、彼の赴任先での活動について多くの質問に答えてくれた。

まず、赴任当初は体育の授業には、年間計画や授業計画があるものの、各コマの指導案がなくその場しのぎの授業をおこなっている印象があった。そこで陸上競技の短距離の授業では、授業テーマを「走るための精選された練習」と定め、任地でも馴染のないラダートレーニングを実施した。もちろん日本の様にトレーニング用のラダーはモンゴルでは販売されていないので、山崎氏自身でロープやテープを利用し作成した。（写真 1）彼曰く、「日本いたら何でも購入することを考えるが、モンゴルでは身近にある物を利用して作ることを心掛けた」そうで、出来の良し悪しは別として、授業で利用できる程度の物は作成できたようだ。これは本学在学中にカンボジアでのスポーツ指導に携

わり、日本で様々な準備をした経験とその重要性、また、日本人が必要とする物が簡単に手に入らない状況でどう工夫するかなどが活かされたと述べている。

また、授業計画がある単元でも、「壁のぼり」といった内容や意図が良く分からないものは、現地の教師と相談し、単元をマット運動に変更しておこなった。そして運動の難易度を 3 つの群に分けて、生徒にそれぞれの運動能力に合った課題を自ら選択できるようにし、自分たちで技や演技の流れを作成させ披露させる授業をおこなった。ここでは、日本から持参したコンピュータとビデオカメラを利用して、生徒の演技を撮影・保存し、それを再生することで生徒達に自分の動きを確認させる工夫も行っている。（写真 2）山崎氏本人は、在学中のスポーツ指導教本製作では、映像や画像の編集を担当し、コンピュータを利用した授業教材への応用が、途上国で十二分に発揮できた形となった。途上国におけるこの様なアイデアは、実技で身体を動かすだけの授業になりがちな体育に、見る視点を与える斬新な内容であったと述べている。



写真 2 パソコンを使った体操の授業



写真 1 ロープとテープで作成した手作りラダー

また、製作に携わったスポーツ指導教本は、日本からデータを持参し、青年海外協力隊派遣前訓練の時からコツコツとモンゴル語に翻訳し、任地に赴任後、クラブ活動で練習している生徒達に配布した。クラブ活動は主にバスケットボール部とバドミントン部が活動を実施しており、モンゴルにおける汎用性は大きいにあったようで、近隣の学校で活動をおこなっていた他の隊員にも配布してあげた。カンボジアの為に作成した物が、モンゴルでも活用される嬉しい展開とはなったものの、その効果や有益性については正確な検証には至っていない。ただ、街の本屋に行ってもスポーツ関連書籍が手軽に入手できる状況にないことを考える

と、配布されたスポーツ指導教本から生徒達が学びえたものは、少なからずあったに違いないと考える。

スポーツ教材の有用性については明確にされなかったものの、汎用性については青年海外協力隊員の連携を利用して、少しではあるが着実に全世界、特に途上国に普及できる目途が立った。今後は、より素早い普及を目指すために、青年海外協力隊のネットワークを利用するとともに、インターネット等の情報通信網を活用することで、このシステムを構築していくことが課題となりそうである。

5. 大学教育研究プロジェクト関連の学会発表

(学会発表)

第17回日本運動・スポーツ科学学会大会（2010年06月：日本獣医生命科学大学）

- 国際協力におけるスポーツ教材の開発について：木村寿一，山平芳美，松井完太郎
- 大学教育プログラムと連携した青年海外協力隊の活動モデル—カンボジア王国小学校教員養成学校における体育教育を通して—：山平芳美，松井完太郎，木村寿一，柏崎克彦

日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会第8回大会（2010年08月：JICA 九州国際センター）

- 小学校教員養成学校における体育教育モデル—カンボジア王国シハヌークビル小学校教員養成学校における活動事例—：山平芳美，松井完太郎，木村寿一，柏崎克彦

第18回日本運動・スポーツ科学学会大会（2011年06月：日本体育大学世田谷キャンパス）

- 運動会を活用した開発途上国における体育科教育の可能性—カンボジア王国シハヌークビル州小学校の事例—：山平芳美，松井完太郎，木村寿一，柏崎克彦

日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会第9回大会（2011年09月：JICA 横浜国際センター）

- 開発途上国における運動会の有効性—カンボジア王国小学校体育科の事例研究—：山平芳美，松井完太郎，木村寿一，柏崎克彦
- 大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携について—活動の継続性と今後の展望—：木村寿一，山平芳美

参考資料

- 1) 国際協力機構青年海外協力隊応募要項
<http://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/jocv/require/>
- 2) 山崎貴弘氏の青年海外協力隊派遣時のブログ
<http://ameblo.jp/mogmog-yama/>

謝 辞

本大学教育研究プロジェクトは、国際協力機構青年海外協力隊事務局と連携を図り、国際武道大学の使命である海外で活躍するスポーツ指導者を育成すると同時に、その活動が中長期的な成果をもたらす実質的な連携システムを構築し、継続的な途上国の発展計画を立案する環境を整備する可能性を持っていた。しかし、本学卒業生の青年海外協力隊員の後任として、本プロジェクトを経験した卒業生を後任隊員として派遣することが出来ず、現地での継続的な活動を検証するには至らなかった。2012年度は、本プロジェクトを経験した在学生や卒業生から青年海外協力隊への応募希望者がいなかったため、大学教育研究プロジェクトを継続するのが困難であると判断し、2年間の調査をもって終了することとした。2012年度の大学教育研究プロジェクトを、この様な形で継続辞退するに至ったこととお詫びいたします。

(2012年12月13日 受理)

国際武道大学研究紀要 投稿規定

1. 紀要は原則として年1回発行し、寄稿の締切は各年度10月1日（1日が土・日曜日にあたる場合は翌月曜日に繰り下げる）とする。
2. 投稿は原則として本学教員に限る。但し、共同執筆者に本学以外の者を含む事は差し支えない。また、大学院修了者で本学の研究生として在籍している者及び本学大学院生は、指導教員と共著であれば投稿することができ、その場合、筆頭著者となることは差し支えない。
3. 研究支援委員会紀要編集部会において必要と認めたとときは、上記2. 以外から寄稿することができる。
4. 投稿者は、「国際武道大学研究倫理規程」、「国際武道大学「ヒトを対象とする研究」倫理規則」、「国際武道大学「動物を対象とする研究」倫理規則」を遵守するものとする。
5. 投稿原稿の種類は次のとおりとする。総説、原著、論文、短報、研究報告、資料、講座、展望、書評、その他。
6. 掲載原稿の採否は研究支援委員会紀要編集部会において決定する。但し、原著論文及び短報については、それに先立って学内及び必要に応じて学外の、2名の審査員により審査を行うものとする。
7. 論文の形式は所定の原稿執筆要領による。
8. 投稿の原稿・図表は、原本のほかにコピー2部をつける。
9. 掲載原稿原本は紀要発行時まで研究支援委員会紀要編集部会担当者が保管する。
10. 著者校正は3回とする。
11. 目次・本文・英文抄録・和文抄録・キーワードはインターネット上に公開（PDF）し、非営利機関に限りその利用を認めることがあるものとする。
12. 『大学教育研究プロジェクト報告書』、『授業研究』については、別に定める投稿規定によるものとし、巻末に一括掲載する。
13. 別刷は表紙付き50部を無償とするが、それ以上を希望する場合は著者負担とする。

投稿原稿の種類

総説（Review）：一つのテーマに関連する多くの研究論文の総括、評価、解説。

原著論文（Original Article）：研究結果、研究方法、研究材料、自他の研究成果の解釈等において新知見または創意が含まれているもの、及びこれに準ずるもの。

短報（Rapid Communication）：研究過程を将来の方向づけを行うためにまとめ予察的な考察を加えたもの、又は、研究成果の早急な公表を必要と判断されるもの、研究報告（Report）：研究成果、研究方法、研究材料、

自他の研究成果の解釈等を論じたもので、必ずしも審査を必要としないと判断されるもの。

資料（Material）：特定の目的に限定されず、将来の研究に広く利用されるべく収集又は集計された情報で、新知見、予察的な考察等を含む必要はない。

講座（Lecture）：既に学会等で確立された又は定説となった理論・研究方法等について、わかりやすく解説的・説明的に述べたもの。

展望（View）：将来の研究発展を促す新しい研究方法・機器などの紹介。

書評（Book Review）：近刊の単行本、学術論文等で特に紹介を要するものの内容抄録、批評。

その他（Others）：上記いずれの種類にも該当しない原稿で、研究支援委員会紀要編集部会において掲載を認めるもの。

原稿執筆要領

1. 和文原稿はA4版400字詰原稿用紙を用い、縦または横書きとする。ワードプロセッサを用いる場合もA4版の用紙を用い1ページあたり、24字×22行（横書き）、または29字×25行（縦書き）で作成する。原稿には英文抄録（400語以内）・和文抄録（600字以内）をつける。和文中に出てくる欧語はタイプする。
2. 欧文原稿には英文抄録（400語以内）・和文抄録（600字以内）をつける。
3. 欧文は全てダブルスペースでタイプ又はワープロ書きとする。
4. キーワード（10語以内）は英文抄録の後に付ける。
5. ランニングタイトルは、和文原稿は和文を30字以内、欧文原稿は欧文を40字以内とする。
6. 図表中の文字と説明は和文又は英文とする。作図は縮小製版できるよう鮮明なものとする。図表は原則として1つ1つを別の用紙に記載し、挿入する箇所を原稿本文中の欄外などに明確に指定する。また、アート紙を用いた写真図版については、研究支援委員会紀要編集部会の裁量により実費を著者負担とすることもある。
7. 引用文献は本文の次にページを別にして入れる。
8. 図表説明文はページを改めて引用文献の次に入れる。
9. 図表・写真などはページを改めて図表説明文の次に入れる。
10. 原稿量は印刷刷り上がり12ページを限度とする。それを超える原稿については、研究支援委員会紀要編集部会の裁量により実費を著者負担とすることもある。

研究支援委員会

委員長 魚住 孝至

紀要編集部会

立木 幸敏, 佐々木克実, 刈谷 文彦

林 伯原, 小磯 透, 神事 努

この研究紀要に関する問合せは下記あてに願います。

All communication relating to this journal should be addressed to the International
Budo University Journal, 841, Shinkan, Katsuura, Chiba

299-5295, Japan

The International Budo University Journal, No.28

国際武道大学研究紀要 第28号

2013 年 3 月 25 日 印刷

2013 年 3 月 31 日 発行

発行者 蒔 田 実

印刷所 (株) 正文社

千葉県勝浦市新官841
国際武道大学

千葉市中央区都町1丁目10番6号

発行所 国際武道大学

〒299-5295 千葉県勝浦市新官841

T E L 0470-73-4111
F A X 0470-73-4148

『愛洲陰之流目録』（東京国立博物館蔵）の調査報告
 —新陰流との関係及び『紀效新書』所載の
 「影流之目録」についての新知見—

宮本光輝，魚住孝至

**A Research Report on the four scrolls of “Aisu kage no ryu mokuroku” found
 in the Tokyo National Museum**

**— On the relation between *kage ryū* and *shinkage ryū* and new results
 concerning the treatise on *kage ryū* in the “Kikōshinsho”—**

Kōki MIYAMOTO and Takashi UOZUMI

Abstract

The authors had the opportunity to conduct research on the “Aisu kage no ryu mokuroku” at the Tokyo National Museum. The headmaster of the third generation following after the founder of *kage ryū* issued this treatise on swordsmanship in 1576. The “Aisu kage no ryū mokuroku” is comprised of four scrolls.

The first scroll “Empi” consists of two texts and nine drawings. The content of the two texts is the same as in the “Kage ryū no mokuroku” found in the “Kikōshinsho” of Chinese origin.

The “Kage ryū no mokuroku” was originally in the possession of Japanese pirates (*wakō*) and found its way to Ming Dynasty China after the general leading a punishment expedition against the *wakō* seized the treatise in 1561.

The second scroll consists of twelve drawings showing *tengu*, mystical creatures related to Shintoism and esoteric Buddhism, engaging in sword combat with a human opponent, while the third scroll comprises drawings of six basic postures of swordsmanship. The fourth scroll consists of a drawing of a sword with bends at three places and a loop shaped twist at the blade, and an incomplete text containing esoteric vows.

With this research report the whole form of *kage ryū*, which built the foundation of *shinkage ryū* became clear for the first time.

Key words : treatise on swordsmanship (剣術目録), *kage ryu* (陰流), “Kikōshinsho” (紀效新書), *shingake ryu* (新陰流), *empi* (猿飛)

- 6 陰流の始祖・愛洲移香斎久忠から七世・常政までの家譜。
- 7 この四行は本来、末尾に書き添える文章で、用紙の最後に書けなくなつて、冒頭にもつてきたと思われる。本目録は最初から四行分のスペースを取つて書いているところからして、原本の写本と見られる。
- 8 第二巻の奥書の系譜は、「湯原（次）郎兵衛尉藤原雅景」となつてゐる。
- 9 今村嘉雄『日本武道大系第一巻』、同朋舎、一九八二、一五四頁。
赤羽根龍夫／赤羽根大介『新陰流（正田伝）の研究』、春風館文庫、二〇〇八、三三二―三六頁。
- 11 「上泉伊勢守藤原信綱」、「西一頓源高東」、「山北三藏頼忠」となる。（下川潮『剣道の発達』（剣道の発達附録）、大日本武徳会本部、一九三一、三六頁。『剣道の発達』は第八章で終結した後、各流派の目録を附録として載せている。）
- 12 前掲書『新陰流（正田伝）の研究』より。
- 13 第三巻は「宇喜多助四郎殿江」となる。
- 14 「影流之目録 猿飛、此手ハテキニスキレハ意分太刀タリ。虎飛 青岸 陰見 又、敵ノ太刀ヲ取候ハンカ、リ、何ノ造作モナウ、先ヅ直偏カラス。彼以大事子切ヲ意婦偏幾ナリ。イカ、ニモ法ニ

- ニキリテ有偏シ。猿回、此ノ手モ敵多チイタス時ワカ太刀ヲテキ
ノ太刀ア者ス時、取偏キノリ。初段ノコトク心得ヘシ。第三山陰。」
15 (中世古祥道『増補愛洲移香齋久忠傳考』七〇頁。
『異称日本伝』での「意婦偏幾ナリ」を「意婦偏幾ナリ」と意識
してある。
- 本来「太刀」と表記されるが、「大刀」と誤って載せている。
16 「影流之目録　猿飛　此手ハてき二□□□太刀なり。虎竜・青岸・
陰見、又敵の太刀を□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□猿回此手も□□□□□時に太刀を□□□□□はつす時つ
かふ故□□□のことく心得へし。」(今村嘉雄『改訂史料柳生新陰流
18 (上)』、新人往来社、一九九五、五三頁。)『異称日本伝』は「ア者」となり、『玉栄拾遺』は「ハツ」とする。『愛
洲陰之流目録』では、「ハツ」である。
- 前掲書『剣道の発達』（剣道の発達附録）、三一―三六頁。

謝辭

本稿を作成するに当たり、調査でお世話になりました東京国立博物館には、資料の閲覧及び撮影の許可を頂き感謝申し上げます。

(二〇一二年一月三日 受理)

右のように、文字は多少の異同があるものの、『愛洲陰之流目録』と内容が同じであることが分かる。「猿飛」の項は、文字の一致が五、六割となっているが、意味は同じと解釈できる。例えば五行目の下の傍点を付した字は、模刻された字では「先」もしくは「克」に見えるが、この部分は『愛洲陰之流目録』では「動顛すべからず」とあったことを考えれば、ここは平仮名で「どうてんすべからず」であったことが明らかになった。

そして「猿回」の項の文章は、『愛洲陰之流目録』と比較しても、「太刀切續^{きづ}テ」以外、文字も同じである。

これまで、「影流之目録」は「第三山陰」以降の文章は失われており、断簡として扱われてきた。そして最後にトンボ絵が載せられていると思われる。しかし今回の調査で、山陰からは、絵図が始まること分った。これにより「影流之目録」も『愛洲陰之流目録』と同様に、「山陰」からは絵図で表すものであったことがいえる。

以上、『愛洲陰之流目録』と「影流之目録」の付合する箇所を述べてきたが、今後の課題とすべき点がある。

「猿飛」、「猿回」の文章は、大部分を読めるまでになったが、「山陰」以降の七つの絵図は一致する絵図はなく、勢法の数も十一勢ではなく、六勢となっている。また威継光が『紀效新書』に「影流之目録」を模刻する際の絵図を順番通りに書いてないため、乱雑に並べて勢法の順番が分らない。

勢法の数に関しては、目録の授与者に応じて変化する場合がある。例えば、新陰流の「燕飛」が八本となっているのは、上泉が発給した『影目録』と西一頓発給の新陰流目録では、「第一燕飛」

から「第八山霞」（西一頓は「第七山霞」、「第八獅子奮迅」）までとしているが、正田が発給した目録では、「第一猿飛」から「第六浦波」までしかない。

陰流の目録の第一巻「猿飛」は、十一本であったことが判明したので、これから精選したのが上泉によるか否かは課題として残る。

【おわりに】

これまで、武道史で中世の武術は史料の少なさにより研究が進まなかった分野であるが、この目録は、今後陰流のみならず、中世の古い剣術流派の形を研究するうえで、重要な参考文献となるものである。

註

- 1 万暦二十一年（一五九三）の「重刊紀效新書檄文」には、万暦十二年（一五八四）に刊行された記載はあるが、現存している最古のものは、李承顔刊本の万暦十六年（一五八八）である。
- 2 『陰之流私』は、永禄元年（一五五八）から天正元年（一五七三）の間に成立したと見られる（大森宣昌『武術伝書の研究』、星雲社、一九九一）。
- 3 中世古祥道『増補愛洲移香斎久忠傳考』南伊勢町教育委員会、二〇〇九。
- 4 四巻とともに、天文十七年（一五四八）『新當りう奥三ツ太刀』が一括されている。これは明らかに他流の別の目録である。収蔵される際に間違つて一括されたと思われる。
- 5 陰流は「猿飛」、新陰流では、上泉と西一頓、柳生宗厳は「燕飛」、正田豊五郎は「猿飛」と表記している。

年（一六八八）に刊行した『異称日本伝』¹⁴である。これは、全文を解説・翻刻しているが、全体の意味が通じ難いものとなっている。（しかしこの後「影流之目録」を扱うときは、『異称日本伝』の翻刻が転載されるようになる。例えば、愛洲一族の家譜『平澤家傳記』（一六九六）¹⁵や百科事典『古事類苑』¹⁶（武技部一剣術）である。）

もう一つ、柳生家の家譜の『玉栄拾遺』¹⁷（一七五三）も、新陰流の基になったものとして、『武備志』の「影流之目録」を翻刻しているが、解説不能で□とした文字が、全部で三十六もあるので、文意はほとんど分からない。

これまで陰流の伝書とされるものは、この「影流之目録」しか見られなかったが、今回の『愛洲陰之流目録』は、発給年も天正四年（一五七六）と『紀效新書』の著者が原本を得たとする年代と十五年の違いしかなく、しかも「影流之目録」の「猿飛」、「猿回」の文章とほぼ一致している。この目録によって、これまで「影流之目録」で解説不能であった多くの文字を読むことができ、意味が分かることになる。

以下、具体的に示すために、『紀效新書』に模刻された「影流之目録」の「猿飛」、「猿回」を載せ、次いで今回の解説できた文章を後に載せることにする。

「影流之目録

猿飛

此手ハてきニ春季連ハ意〇太

刀なり

虎亂 青岸 陰見
又敵の太刀を法カハンカカ
り何其すこしもとうてん直
ヘカラ出傳以大事に切
遠意婦篇幾ナリいかにも
法よく切りて有篇し

猿回

此手も敵多チイダ春時
ワカ太刀をてきの太刀〇〇¹⁸
春時法ヘ（キ）ナリ初段のこ
とく心得ヘし

原文では、①⑤の部分で通常の崩し方ではなく、難読である。変態仮名と見られるので、傍に平仮名を付した。これまで『玉栄拾遺』では、ほとんど難読で□□となっていた。『異称日本伝』では、①「スキレハ意分」、②「取候ハンカ、リ何ノ造作モナウ」、③「先ヅ直偏カラス」、④「意婦偏幾」、⑤「敵多チイタス」と読んでいたが、これでは、意味が分からない。それに対して、今回調査した『愛洲陰之流目録』では、①「ヨケレバ切」、②「ラツカイテ懸ル心少モ」、③「動顛スベカラス」、④「納ム可（ベシ）」、⑤「切出ス時」とあって、これなら意味の通じるものとなる。おそらく『紀效新書』の原本は、こうであったのを中国人が模刻した際に意味不明のまま正確に模刻したために、これまで読めなかったのである。今回の調査によって「影流之目録」の文意がようやく判明した。



図7 『紀效新書』「影流之目録」（馬明達 點校 pp.519-532。）

具足ヲ持テ懸ル去迎可勝サリトモ

ト在以摩利支天ノ掟ニモ如此以

イカニモ稽古仕候而モ朝夕

無思案候て者難立用候」

前半部分が摩利支天への誓言となるが、「太刀ヲ心ニ懸候エバ縦敵何ノ具足ヲ持テ懸ル去迎勝ベシ」と、しかし文末の「イカニモ稽古仕候テモ朝夕思案無ク候テハ、用ニ立チ難ク候」と、どれほど稽古を積んでいようと、自ら考えることをしなければ役に立つことは困難であることをいっている。

第四巻の目録には奥書がないが、紙質は同じ雁皮紙がんぴで、紙型・用墨・書体も同じであり、第三巻までと一括して作成・伝授されたものと見られる。第四巻も「天正四年三月」に湯原次郎兵衛から宇喜多助四郎へ発給したものと見られる。

【第一巻から第四巻を通して窺える愛洲陰之流】

これまで四巻を順に解説してきたが、この四巻全体を通して考えてみる。

第一巻「猿飛」は、十一勢法から構成されるものであった。これまで新陰流の目録によつて「猿飛、猿回、山陰、月影、浮舟、浦波、獅子奮迅、山霞」だけと思われていたが、それにさらに「陰劔、清眼、五月雨」があることが確認された。

また陰流の「猿飛」は「初重者は迄也」とあり、表太刀に位置付けられる流派の象徴的な太刀である。第一巻の末にある別紙の「中段」の太刀は、第二巻の人と天狗の組太刀に表わされている。

第三巻は「仕相之太刀」と題して、構えや勝太刀之切相に上手中の手の要訣など、実戦的と思われる太刀の遣い方を残している。第四巻は、「目かくし」と題しているが、断簡で全ての把握はできない。内容も密教的な要素が全面に出ていて、摩利支天への誓言である。刀の絵図も三つ折れて切先にかけて一回転を描いているので呪術的な精神を刀で具現化したものと思われる。

これら四巻からは、陰流は密教や修験道、山伏などの影響を受け樹立されていたことが分かる。この目録は、教習法を確立し展開しているが、新陰流のように、武士の覚悟や精神性を強調した所は見当たらない。本目録の年代は十六世紀末で流祖から四代目の発給であるが、陰流の成立自体は、十五世紀末期であった。第二巻では、長刀、素鎧、十文字鎧など多種多様な武器を仮想敵にあげていることも踏まえると、総合的な実戦剣術であった。

【本目録と『紀效新書』『影流之目録』の考察】

『紀效新書』では、上述したように「影流之目録」を模刻しているが、今までの目録の「猿飛」、「猿回」の文章を解説できたものは見当たらない。その理由は、『紀效新書』では変態仮名を解しない中国人が模刻した事に起因すると思われる。同じ模刻を載せる『武備志』は、漢字は正確であるが、変態仮名の部分はさらに変形している。この目録は漢字とひらがなで書かれている為、特にひらがなの部分が崩れて書かれており、難解なものになっている。

日本では、過去に『武備志』に模刻された「影流之目録」の解説を試みたことが二度あった。一つは、儒医の松下見林が元禄元

一ちのたち（絵図）

一前ひろ（絵図）

一はつしきり（絵図）

一しやうのかかり（絵図）

勝太刀之切相（口傳お、し）（絵図）

上手中手

一きる べし

一きる べからず

一よけ べし

一よけ べからず

一かゝる べし

一かゝる べからず

一かゝらへハ あし

一あしは かゝらへ

一右は 左

一左は 右

一目付所ひし也

以上¹³

「仕相之太刀」は、一人で以って、長巻、太刀、小太刀を遣って六つの構えを表している。

「勝太刀之切相」は、刀の絵図に太刀先三つの絵図を載せ、「口傳お、し」としているが、この目録から内容を窺うことは困難である。第三巻は、勢法を示したのではなく、実際の戦いに即して口伝で教えられた要訣であるように、「勝太刀之切相」は特にそれを示しているといえる。

最後の「上手中手」は、太刀遣いの良し悪しを口語で一つ書きにしているが、何の動作に対してかは書かれてない。「中手」は冒頭に挙げた二世宗通発給の『陰之流私』にも見られるが、内容は一致せず、唯一似ている文章は、十一番目の「目付所ひし也」の箇所である。ともかく「上手中手」は、太刀遣いの要訣を述べていることは確かなのである。

【第四巻】

第四巻は、「目かくし」として、特徴的な刀の絵がある。刀は、柄から中ほどまで三つに折れ、切先にかけて一回転をして描かれたもので、奇妙な形をしている。続けて密教的な誓言が七行書かれている。断簡となっており、全体を把握することはできない。

愛洲陰之流は、呪術的な要素をふんだんと使っているので、この刀は恐らくそれらの精神的なものを具現化したものと思われる。

内容は以下の通りである。

「目かくし（絵図）」

庵阿弥耶摩利支天ソワカ

此真言ヲ朝夕可案如此ノ

太刀ヲ心ニ懸候エハ縦敵何ノ



図6 第四巻（東京国立博物館蔵）

を左手に団扇（または扇子）を持っている。「第十二〇頂天狗」に「臨兵闘者皆陣烈在前怨敵退散…」と密教の九字も載せられている。古来より山は神聖な域であり、畏敬の対象であったが、同様に山に住む天狗もその対象であった。近世の剣術目録は人々との組太刀で現実的に表すが、中世においては呪術的な土俗信仰（その土地の風俗・習慣・習わし）が浸透しており、剣術においても天狗と対峙する目録はその典型的な例と見られる。

愛洲陰之流の第二巻の天狗の武器は、太刀のみに限らず、当時扱われていた武器を用いることができる勢法であったと見られる。

最後に「移香傳此道ヲ事十箇年力間不捨無油断く工夫致鍛練候也」（移香この道を傳える事十カ年が間捨てず、油断なく工夫鍛練致し候なり）と書いているが、第二巻の勢法は、移香が十年間油断無く工夫鍛練し成立させたものであった。

なお新陰流の柳生宗厳が慶長六年（一六〇一）に発給した『新陰流兵法目録事』には「天狗抄」がある。陰流目録の「知羅天狗」、「金毘羅天狗」は、新陰流の「天狗抄」では語尾が「天狗」を「房」に替えているが、「智羅房」、「金比羅房」と似ている。

上泉が永禄九年（一五六六）に発給した『影目録』には、「燕飛」、「参学」、「九箇」だけで「天狗抄」は見られないが、正田の慶長十年（一六〇五）の目録¹⁰に、「猿飛」、「参学」、「位詰」、の後「天狗書」とある。同じく上泉の弟子の西一頓の慶長十五年（一六一〇）の目録にも「天狗書」¹¹がある。陰流の目録に天狗の巻物があったことから、「天狗抄（書）」は、上泉以前から存在したことが窺える。だが、新陰流の「天狗抄（書）」は、天狗が仕太刀で、人が打太刀となっているが、陰流目録は天狗が打太刀、人は仕太

刀と逆になっている。

また、陰流目録には、天狗が長刀、素鎧、十文字鎧を遣い、第十二勢では、左手に軍配を右手に太刀を持った仕太刀に対して二人の天狗が太刀を持って懸っている絵図がある。慶長十年（一六〇五）に正田から古右兵衛に発給された『正田自筆書』¹²「新陰之流天狗書」の巻末に左手に軍配と右手に太刀を持った仕太刀に太刀と素槍を持った打太刀の二人掛かりが描かれている。ここには、「槍、鎌、十文字、薙刀、右同前」と書かれている。陰流ではさまざまな武器が描かれていたが、正田も「天狗書」は、太刀のみでないこと表しているのである。

【第三巻】

第三巻は、「仕相之太刀」として人が構えた六つの絵図、「勝太刀之切相」として太刀の絵図、そして「上手中手」として十一の一つ書きの部分から成る。目録の内容は以下の通りになる。

「仕相之太刀

一のべたち（絵図）

一はねたち（絵図）



図5 第三巻（東京国立博物館蔵）

第一勢法から第十二勢法まで絵図と勢法名を載せている。また内容も修験道や山岳信仰などを彷彿させる語句が散見される。内容は以下の通りとなる。文中の「○」は不明字である。

「此流之秘密是迄ニテ候

能々被分御覚ヘク候

先之位者心之内有

先如此目錄頭候也⁷

第一 文善月光(此手 大事有)(絵図)

第二 金毘羅天狗(引ヲ不待)(上下心有)(絵図)

第三 榮術天狗(カサネ〜セン〜是ヲ用候)(絵図)

第四 榮○天狗(切ニ秘事有 上下心有)(絵図)

第五 知羅天狗(肝要也 上下)(絵図)

第六 尊足天狗(彼構ノ事 ただ先々ふりた、さむなく)(絵図)

第七 通達天狗光(ヒザソク肝要也上下)(絵図)

第八 禪頂天狗(目カクシノ太刀ヲ可遣)(絵図)

第九 知吉天狗(小手シハリノ太刀可遣)

第十 命○天狗先(養老之山渡秘事也)



図 4 第二卷 (東京国立博物館蔵)

(絵図)

第十一 人命天狗(山陰返し 先)(絵図)

第十二 ○頂天狗 道俗天狗(臨兵闘者皆陣列在前怨敵退散ヒツツカキフリ)(絵図)

ツカキフリ)(絵図)

已上

移香傳此道ヲ事十箇年カ

間不捨無油断ク工

夫致鍛練候也⁸。

第二巻は、合計十二勢法から構成されている。

「此流之秘密是迄ニテ候(中略)先如此目錄頭候也」とあり、これが流派の秘密に属することを示す。第一巻「猿飛」に「中段者別紙有」とあったが、これは第二巻を指したものと思われる。

人と天狗の組太刀の絵図は、近世以前の剣術では修験道や山伏などの影響が見られるため、様々な古流でよく使われていた手法であった。新陰流の柳生十兵衛の『月之抄』には、私伝として「古流には天狗の名を目錄に書かせるあり」といつている。

この巻は、勢法を絵図で示すほかに、修験道、山伏などの山岳信仰の背景が示唆される。先ず勢法名に修験道や山伏(それらの融合したもの)の畏怖した天狗を実際に付けている点にある。京都の愛宕山には榮術太郎といわれる大天狗がおり、長野県の飯縄山に祀られる飯縄知羅天狗がいる。これら榮術天狗や知羅天狗などの有名な天狗の絵は、鼻の高く神通力の高い天狗の姿で描いている。ほかにも尊足、通達、禪頂など仏教や修験道が用いた天狗の名が使われている。

また第六・尊足天狗では、鎧を持った天狗に対して右手に小刀

上泉は、第九以下の勢法を省略し、八勢が続け遣いで行えるように再編成したようである。

【二刀について】

「第七獅子奮迅」、「第十清眼」、「第十一五月雨」は絵図で二刀の遣い方を載せている。新陰流の上泉の発給した『影目録』は、「第七獅子奮迅」と「第八山霞」の二勢を「燕飛」の巻の奥に附随しているが、「獅子奮迅」は二刀の遣い方の絵図を載せている。

上泉の弟子の西一頓が発給した目録でも、「第七山霞」、「第八獅子奮迅」があり、「山霞」は二刀の遣いの絵図を載せている。第七は名称は異なるが絵図は同じである。つまり、新陰流では、勢法名の違いはあるが、第七の勢法は二刀の遣いとなる。

『愛洲陰之流目録』第一巻の二刀遣いは、新陰流でも見られた第七に加えて第十、第十一の勢法にも二刀があることが分った。

【奥書の系譜について】

奥書は、仏教の守護神である摩利支尊天を始めとし、「同愛洲太郎左衛門尉移香入道源久忠」とある。移香は、陰流の流祖であるが、摩利支天からの示現によって開眼したことを表すのであろう。古い流派の目録の特色を示していると言える。

移香に続いて、「愛洲右京亮源朝信」、「新山助四郎」と続き「湯原次郎兵衛尉」が「宇喜多助四郎」宛に発給した目録である。

まず「愛洲右京亮」とあるが、愛洲一族の家譜を示した『平澤家伝記』では、一世・宗通、三世・常通、四世・在通であり、右京亮の名前は見られない。中世古氏は前掲書の中で、右京亮は

宗通の別名か、もしくは宗通の誕生前に、養子をとっていても不思議はないとしている。確かに二世・宗通は永正十六年（一五一九）の生まれで、移香が六十八歳の時の息子になるので、宗通誕生以前に養子をとっていた可能性も十分考えられる。

朝信の次の「新山彦四郎」は、第一巻のみにあり、後の二巻、三巻では、新山が除かれて三人の伝承となっている。（図3 三巻末）

「湯原次郎兵衛尉」と「宇喜多助四郎」は不明だが、両方の姓に関係があることを考えると備前（現岡山）であった可能性がある。備前国惣分村（現赤磐市惣分）には山城の惣分城があり、城主は湯原藤内で、その西に位置する坂辺村（現赤磐市坂辺）の坂辺城は、湯原勘兵衛が城主であった。宇喜多一族は備前周辺を支配していたことから、この目録は恐らく備前周辺において伝授されたものと推測される。

【第二巻】

第二巻は、文章による解説はなく、人と天狗の組太刀として、

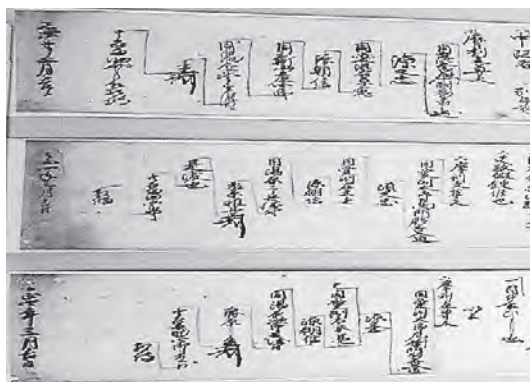


図3 三巻の末尾（東京国立博物館蔵）

される。「イカニモツヨク切テ懸テ後ヘサルベシ」とは、切った後、後ろに下がって間を切ることであろう。

第二猿廻は、「此ノ手モ」と始まることから、「第一猿飛」と同様の太刀遣いで、「敵切出ス時、我太刀ヲ敵ノ太刀ニ切續^{つづ}テ太刀ヲハツス時、切也」とある。「第一猿飛」では「敵ガヨケレバ切太刀」としか言っていないが、より詳しく言った表現であろう。「敵切出ス時」とあることから、敵の打ちに応じ対処するものと推測できる。しかも「初之如ク心得ベシ」とあるので、「第一猿飛」にあった「懸ル心少モ動顛スベカラズ」の内容であろう。そうすると、第一、二の太刀は、敵が切り出すのを受ける「待」の太刀であるが、内心は「懸」の姿勢で「動顛スベカラズ」いることをいうのであろう。

「第三山陰」以降、第十一までは、打太刀・仕太刀による勢法の絵図が掲載されている。図の右が仕太刀、左が打太刀と見られる。第七、第十、第十一は二刀遣い、第八は逆手持ちとなっている。第九の打太刀の刀に印が入っているのは、そこを切ることを示すのであろう。また第十、第十一には、太刀の先だけが三つ重ねて描かれているが、これは連続的に太刀を打つことを示すものであろう。

また、この目録中に「初重者^{しよじゅうは}是迄也^{まで}」と述べ、「中段者^{ちゅうだんは}別紙有」とあることから、「猿飛」は、陰流で最初に習う勢法であり、逆に言えば陰流の表太刀は「猿飛」であることが確認された。

陰流の「猿飛」の全体像はこれまで不明であったが、この目録において陰流の「猿飛」は十一勢法あることがわかった。

なお、『紀效新書』所載の「影流之目録」は、「猿飛」、「猿廻

の文章は一致するが、「山陰」以下はトンボ絵七つだけを載せており、まったく同じ絵図の形はない。おそらく元来は同様に絵図で示したものであったと思われるが、なぜ一図も一致しないかは、今後の研究課題とせざるを得ない。比較するに第一、第二の二勢の説明文は一致しており、これまで『紀效新書』の模刻では不明であった箇所が、これに拠って判明することは、後述する。

【新陰流との関係】

新陰流では、流祖の上泉伊勢守が永禄九年（一五六六）に発給した新陰流の『影目録』（柳生家蔵）の第一巻「燕飛^{えんぴ}」⁵では、「陰流において別に奇妙を抽出して新陰流と号す」（原文は漢文）と書いており、陰流を基にして、第一巻は、「燕飛」、「猿廻」を説明し、「山陰」、「月影」、「浦波」、「浮舟」、「獅子奮迅」、「山霞」は絵図とするが、勢法名が八つ一致し、絵図も三つがほぼ同じであるので、上泉は明らかに陰流目録に基づいていると判断できる。上泉は「燕飛」を「敵に随って轉變し手段を施す」とするので、陰流の太刀は、敵の働きに随って敵に対処することと受け取っていたようである。これは陰流目録が、敵切出す時に「動顛すべからず」対処することと同じである。

ただ違いもある。新陰流では「燕飛」を陰流から継承してきた表太刀とし、袋撓^{ふくしな}を用いず木剣を以て演じ、続け遣いで、先の八勢を一連の流れの中で遣う。対して『愛洲陰之流目録』では、仕太刀（右）が一貫して太刀一本で行っているが、打太刀（左）は太刀の二刀や太刀二刀などに变化していることから、陰流では一本一本を区切って遣われていたと思われる。

但可依弟子

愛洲陰之流目録

第一 猿飛

此手ハ敵カヨケレハ切太

刀也 又虎乱

清眼 陰劔 哥之

太刀ヲツカイテ懸ル心

少モ動顛スベカラス

以傳太事可切納ム

イカニモツヨク切テ懸テ

後ハサルヘシ

第二 猿廻

此ノ手モ敵切出ス時我太刀

ヲ敵ノ太刀ニ切續テ太刀ヲ

ハツス時切也初之如ク心

得ヘシ

第三 山陰（絵図）

第四 月陰（絵図）

第五 浮船（絵図）

第六 浦波（絵図）

第七 獅子奮迅（絵図）

第八 山霞（絵図）

（是ハ地具足ニナル心ナリ）

第九 陰劔（右口傳）（絵図）

第十 清眼（絵図）

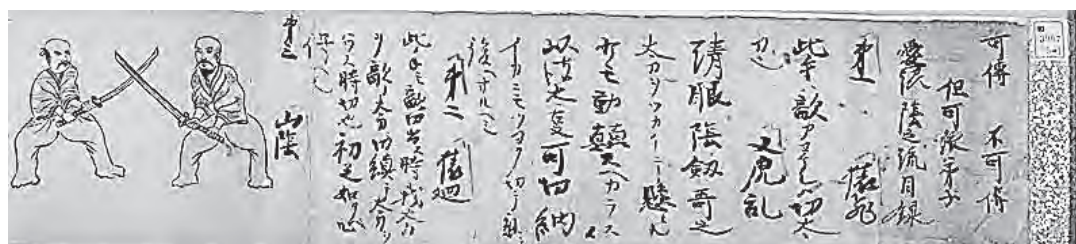


図2 猿飛冒頭（東京国立博物館蔵）

第十一 五月雨（絵図）

初重者 是迄也

中段者 別紙有

摩利支尊天

同愛洲太郎左衛門尉移香入道

源久忠

同愛洲右京亮

源朝信

同新山彦四郎

同湯原次郎兵衛尉

花押

宇喜多助四郎殿相傳

天正四年三月吉日

「第一猿飛」と「第二猿廻」は文章で表されているが、簡潔な言葉であるため遣い方の詳細を知ることが困難である。

「第一猿飛」は、冒頭に「此手ハ敵ガヨケレバ、切太刀也」とあり、敵が太刀を外す場面で遣う太刀であることを説いている。

「又 虎乱、清眼、陰劔」とあるが、「清眼、陰劔」は、次に列記される第十と第九の太刀名である。「虎乱」は、新陰流では二刀を遣う太刀名である。「太刀ヲツカイテ懸ル心、少モ動顛スベカラス。以傳太事可切納（大事を伝えることを以って、切納むべし）」。「猿飛」での核心の部分であり、少しも動顛しないことが大事と

現在東京国立博物館の公式ホームページ上に「愛洲陰流伝書」と題し、画像が四枚公開されている。ただ画像は、第一巻の巻頭と巻末、第二巻の中盤、第三巻の巻末であり、これだけでは、全貌を窺うことは困難であった。

そこで東京国立博物館に「特別熟覧」を申請して、平成二十四年九月二日に調査することができた。

本稿は、『愛洲陰之流目録』の全貌を報告するとともに、調査で判明したことについて考察することにした。

【愛洲陰之流目録の全体構成】

この目録は、四巻から成る⁴。一巻は、奥書なしの断簡である。紙質、紙形、書体、用墨も他の三巻と同じであることから、同じ時に、同じ者に一括して発給されたものと思われる。四巻には、順序を示す表記はないが、

『愛洲陰之流目録』とあるものが第一巻であり、次いでこれと同形式のものが第二巻、技ではなく真言が書かれた断簡が最後で第四巻と見られる。

・第一巻は、「第一猿飛」から始まり、「第二猿廻」まで文章で、「第三山陰」以降から二人一組を一勢法とし十一勢法の絵図を

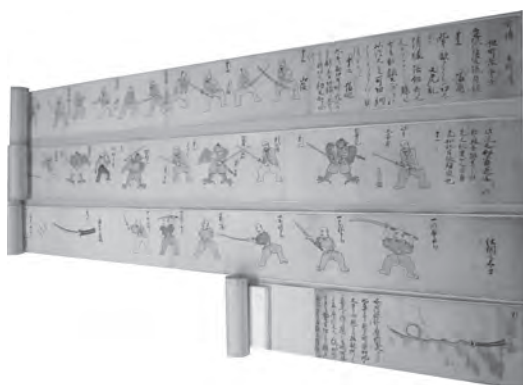


図 1 全四巻（東京国立博物館蔵）

載せている。巻末に系譜と発給年月が記されている。『紀效新書』所載の「影流之目録」と比較しても、第一・第二の文章及び第三の表題までは同じである。寸法（15.0×281.0cm）。

・第二巻は、人と天狗が立ち合う絵図で、十二本あり、それぞれ天狗の名前が付けられている。天狗は、太刀の他、長刀、素鎧、十文字鎧、二刀を持ち、天狗が懸る形で十二勢を載せている。巻末に系譜と発給年となる。寸法（15.0×301.0cm）。

・第三巻は、巻頭に「仕相^{しあい}之太刀」と題し、一人による六種の構えの名称と絵図を載せており、次いで、「勝太刀之切相」として太刀と太刀先三つを写し「口傳お、し」と添えている。最後に「上手中手」として、「きるべし」、「きるべからず」など十一の一つ書きを載せる。巻末に系譜と発給年となる。寸法（15.0×197.0cm）。

・第四巻は、巻頭に「目かくし」と題し、一本の太刀の絵を描くが、三つの折れが入り太刀先は一回転する形で、次いで真言の誓言が七行綴られている。寸法（15.0×42.5cm）。

第一巻冒頭に「傳フベキカ傳フベカラズカハ、弟子ニ依ルベシ」（原文は漢文）とあり、第二巻冒頭にも「此流之秘密是迄ニテ候」という文がある。これらは内容的には末尾にあるべきものであるが、いずれも同じ書体、形式で冒頭に書かれている。この点から見て、本目録は、原本を後年に書き写した可能性が高い。

【第一巻】

原本を翻刻すれば、内容は以下の通りである。

「可傳 不可傳

資料

『愛洲陰之流目録』(東京国立博物館蔵)の調査報告

—新陰流との関係及び『紀效新書』所載の

「影流之目録」についての新知見—

宮本光輝*

魚住孝至

(*国際武道大学大学院)

【はじめに】

この度、東京国立博物館に所蔵されている『愛洲陰之流目録』^{あいすかげのりゅうもくろく}について初めて本格的に調査することができたので、得られた内容を報告する。

陰流は、日本の古い剣術流派で、愛洲移香斎(一四五二—一五三七)が長享元年(一四八七)に日向国(現宮崎県)の鶴戸の窟に参籠し示現を得て開いたとされる流派である。陰流の代表的な太刀遣いに「猿飛^{えんひ}」といわれる勢法^{かた}(形)がある。この勢法は、後に展開する新陰流に大きな影響を与えたといわれている。

けれどもこれまでは陰流の勢法を載せた目録は、中国の『紀效新書(十四卷本)』¹に掲載されている「影流之目録」が知られているだけであった。

これは、十六世紀中期に日本の海賊である倭寇の討伐にあたつた明の將軍・戚繼光が、嘉靖四十年(一五六二)に陣中においてこの目録を得たので、上記の著書に模刻して載せたものである。

その内容は「猿飛」、「猿回」の二勢法を文章で説明し、「第三

山陰」より以下はトンボ(人型)絵で七図を載せているが、文章の解説が難しく絵の位置づけも不明で、これまで陰流の太刀全体を把握することは困難であった。

その他、陰流に関する伝書としては、『摩利支天之ししゃの事』があり、巻末に「移香」とあることから移香斎のものといわれている。内容は巻頭に「からす、くも、さる、□^いたち、むかて、ねすみ」など現実の生き物を挙げ、これらは摩利支天の使者であるとして、道行く時に遭遇した際の注意書きから始めており、修験道的な心得で技に関するものは窺えない。また二世・宗通(元香)が発給した『陰之流私』²があるが、立ち合いの心構えだけで陰流勢法の全体を示すものではない。

陰流に関する研究は、あまり見あたらない。その数少ない研究者の一人が中世古祥道氏である。中世古氏は、愛洲氏関連の古文書を調査し先行研究も吟味して、平成十年以降愛洲に関する著作を三点出版されている。その中の『愛洲移香斎久忠傳考』(平成二十一年・増補再版)に補遺されている「東京国立博物館蔵の「愛洲陰流」という資料について」³に、東京国立博物館に『愛洲陰之流目録』が所蔵されていることが記述されていた。この目録は、四巻から成るが、発給年も天正四年(一五七六)と相当に古い。

ただ中世古氏は、『愛洲陰之流目録』について奥書にある系譜を主に考察して名前と発給年を明らかにし、また第二巻(著書の中では、「天狗巻」と名付けている)の巻末部分の文章を考察しているだけである。

中世古氏の研究により『愛洲陰之流目録』が四巻現存している情報を得たが、四巻の内容を調査・考察したものではなかった。

江戸時代後期における小町像
—『群書類従』所載「小町集」の歌百十六首から—

黒羽友子

The Study of komachi' Imagination

Tomoko KUROBANE

Abstract

Of the 6 major poets of the Heian period, one of the most famous was Komachi.

Today little is known about her except her famous beauty and her single extant poem.
“hananoirowa uturinerina itazurani wagamiyonifuru nagamesesimani” immortalized on the traditional Japanese playing card.

While Komachi lived 1100 years ago, she continues to live on in the imaginations of Modern Japanese. This longevity is due in part to the publication of the Gunshoruijyu Komachi-shu, a collection of Komachi's poetry as well as other works, falsely attributed to her. In Edo period, especially amongst Japanese women, she even became cultic idol.

In analyzing her poetry, I would like to discover what Komachi so entranced the people of this period. I would also like to shed light on why Komachi became a cultic figure for women of the Edo period.

Key words : Onono komachi, komachishu, Gunshoruiju Komachi sinko

- 室城秀之著『小町集・遍昭集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸』『和歌文学大系 一八』平成一〇年 明治書院
- 角田宏子著『小町集の研究』和泉書院 二〇〇九年
- 滝沢貞夫編『風雅和歌集総索引』明治書院 平成三
- 滝沢貞夫編『続後撰和歌集総索引』明治書院 昭和五八
- 滝沢貞夫編『新拾遺和歌集総索引』明治書院 平成十一
- 滝沢貞夫編『新千載和歌集総索引』明治書院 平成五
- 滝沢貞夫編『続千載和歌集総索引』明治書院 平成二
- 滝沢貞夫編『新勅撰和歌集総索引』明治書院 昭和五七
- 滝沢貞夫編『新後拾遺和歌集総索引』明治書院 平成一三
- 滝沢貞夫編『新続古今和歌集総索引』明治書院 平成十四
- 滝沢貞夫編『続後拾遺和歌集総索引』明治書院 平成三
- 滝沢貞夫編『続古今和歌集総索引』明治書院 昭和五九
- 次田香澄校訂『玉葉和歌集』『岩波文庫』岩波書店一九八九
- 栃尾武著『玉造小町子壮衰書』『岩波講座日本文学と仏教 第4巻無常』岩波書店一九九四
- 錦仁著『浮遊する小野小町』笠間書院二〇〇一
- 西下経一校訂『後拾遺和歌集』『岩波文庫』岩波書店一九八三
- 根井浄・山本殖生編著『熊野比丘尼を絵解く』法蔵館二〇〇七
- 萩原龍夫著『巫女と仏教史』『明治大学人文科学研究所叢書』吉川弘文館 昭和五八
- 塙保己一著『群書類従 第十五輯 和歌部』続群書類従完成会 昭和五八
- 塙保己一著『群書類従 第十六輯 和歌部』続群書類従完成会 昭和九
- 林四郎著『古今和歌集四季の歌』みやび出版二〇〇八
- 林四郎著『古今和歌集恋の歌が招く』みやび出版二〇〇九
- 増田繁夫著『拾遺和歌集』『和歌文学大系三二』明治書院 平成十五
- 松田武夫校訂『後撰和歌集』『岩波文庫』岩波書店 一九九四
- 峯村文人校注・訳『新古今和歌集』『日本古典文学全集二六』小学館 昭和六〇
- 横田幸哉著『小野小町伝記研究』風間書房 昭和四九
- 吉原栄徳著『和歌の歌枕・地名の大辞典』校風社 平成二〇
- (二〇一二年二月一三日 受理)

系『群書類従』所載「小町集」である。

注・参考文献および資料

- 注一 塙保己一著『群書類従和歌部 第一六卷』続群書類従完成会 平成五 一三五頁
「……出羽郡司女。或伝。母衣通姫。……」
- 注二 錦仁『浮遊する小野小町』笠間書院 二〇〇一 二二七頁
- 注三 横田幸哉著『小野小町伝記研究』風間書房昭和四九〜六〇頁
- 注四 小林正夫校注・訳者『古今和歌集』『日本古典文学全集七』小学館昭和六十〜五九頁
- 注五 大塚英子著『古今集小町歌生原論』笠間書院 二〇一一 四二二〜四百二十八頁
- 注六 片桐洋一・福井貞助他校注・訳者『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』『日本古典文学全集八』小学館 昭和六〇
『伊勢物語』二十八段「あふごかたみ」、三十六段「玉葛」、三十七段「下紐」、百十五段「都島」、百十九段「形見」、百十三段「井手の山吹」などが説話化されている。
『大和物語』には、「岩の上に旅根をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」の歌とともに遍照僧正とのやりとりがある。
(四二三頁)
- 注七 栃尾武著『玉造小町子壮衰書』岩波書店 一九九四
- 注八 錦二〇〇一 前掲書
- 注九 大宮町小町資料館「妙性寺縁起」江戸時代文化年間(一八〇四〜一八一八年)の作といわれている。
- 注一〇 塙保己一著『群書類従 巻第二百七十二 和歌部百二十七家集四十五 小町集』続群書類従完成会 平成五
- 注十一 『全国小野小町 伝承地資料集』大宮町・大宮町教育委員会 平成十三 事情により出版はされなかった。関係者のご好意

で見させてもらった。

- 注十二 横田昭和四九 前掲書 三二七頁
- 注十三 片桐洋一著『小野小町追跡』笠間書院 昭和五〇 七頁
- 注十四 片桐 昭和五十 前掲書 八三頁 窪田氏、大塚氏、室城氏、角田氏も同意見である。
- 注十五 前掲書 流布本群書類従小町集百十六首から。この論文の主旨から、和歌はすべて類従本に依拠する。類従本の歌番号は類従本の順序に従ってそのまま付け加えたものである。
- 注十六 平塚氏は小大君和歌集にも同じ歌が見られる。これは早い時期で小大君の歌が小町集に混入したと思われるが、実は片桐氏などがいうように小町集が小大君に混入したと考えるべきである。(平塚トシ子『小大君集全釈』翰林書房 二〇〇〇年三三三頁)

引用・参考文献

- 大塚英子著『古今集小町歌生成原論』笠間書院二〇一一
- 片桐洋一・福井貞助他校注・訳者『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』『日本古典文学全集八』小学館 昭和六〇
- 片桐洋一著『小野小町追跡』『笠間選書三六』笠間書院昭和五〇
- 片桐洋一校注『後撰和歌集』『新日本古典文学大系六』岩波書店 一九九〇
- 窪田空穂校註『和泉式部集・小野小町集』(日本古典全書) 昭和三三
- 久保田淳校注『千載和歌集』『岩波文庫』岩波書店二〇一一
- 黒岩涙香著『小野小町論』社会思想社一九九四
- 小林茂美著『小野小町攷』桜楓社 昭和五七
- 小林正夫校注・訳者『古今和歌集』『日本古典文学全集七』小学館昭和六〇
- 佐々木信綱校訂『新古今和歌集』『岩波文庫』岩波書店一九九〇

の恋人を思っているという理解もあるが筆者は、時の残酷さに置く涙と考える。⑦⑧⑨⑩⑪は小町の晩年を詠んだと思われる歌である。

これらの歌から、小町の晩年を「あなめ」伝説と単純に結びつけることは難しいかと考える。唱導僧や比丘尼の話で取り上げられる地獄や極楽思想、無常観による仏教的教化からの小町像だけでなく、庶民の心の中には「今を生きる小町」がいたと考えられるのではないだろうか。特にあまり取り上げられることのない⑪は、類従本小町集の最後の歌である。この歌が最後を飾るものとして意識しておかれたか否かは定かではない。前述の片桐氏のように考えるのが賢明であるかもしれない。しかし類従本小町集の一番の「花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」と比べて、やはりそこには、最晩年の小町を見ることができると筆者は考える。また、当時の比丘尼等の教える地獄思想の中には、子供を産めなかった女性の地獄がある。子供が産れなかった女性にとっては老後の生活不安は問題であった。そして彼女たちの死後は地獄がまっているのである。しかし小町の歌の中では、はかなさ、さびしさはあっても、地獄はない（また小町自身の死後のことを咨嘆する歌もない）。

流布本の七十番以降は、従来研究の対象としてはあまり重点をおかれてこなかった。しかし、流布本一六首から読みとれる、江戸後期の民衆がみた小町像は、一人の感性豊かな女性の一生である。そこに地獄はない。今を生きることへの彼女の心をそのまま感じたからこそ、今を生きななければならない女性たちの信仰の対象と成りえたのであると考える。

結び 群書類従本小町集一六首から

流布本小町集には、小町の代表作といわれる「花の色は移りにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」からこの一六番「花咲てみなぬ物はわたつ海のかさしにさせる沖つしら浪」までの間に、小町の若さ、情熱、恋、涙、憂、哀れ、そしてあるがままにという晩年までの大きな流れがある。そこには「時」を生きる小町の姿がある。江戸時代後期というと、女性にとっては子供が生まれなければ離縁があり、死後は地獄が待っている。皮膚病・眼病は人の輪から疎外される病である。当時のこのような女性が救いを求めた小町像は、『群書類従本「小町集」』の中の小町の歌の心を通じて理解できると考える。

筆者が、小町に関心をもったきっかけは、小町を開基とする妙性寺である。本堂の隅に小町の尼僧姿の像が置かれていた。眼病・皮膚病の治癒、火事除け、安産を願ってどれだけ女性がこの寺を訪れたことであろうか。当時の女性の置かれた社会的環境を考えると、彼女たちの孤独、寂しさ、悲しさ、漂白する心は、類従本の中の小町と同じものであると考える。

古今和歌集の小町というと、「海人」と「海松目」と「見る目」、「浮き」と「憂き」など掛詞、縁語、漢文学の素養など華やかな王朝文化の中の女性がまず考えられる。しかし、ここで見る小町は、一人の女性としてその寂しさ、悲しさ、孤独、漂白する心と男を揶揄し、そして自分をも揶揄する強さを持つ女性の強さもある。当時の民衆、特に女性の共感を呼び、その心をつかんだのがこの小町像であったと考える。それを忠実に物語ったのが流布本

題しらず

読み人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくは忘るるときもあらましものを

⑩

はかなしや我身のはてよ浅みとり野へにたな引霞と思へは
(流布本一一五番)

歌の心は「はかないものだ。私の身も終わるときは、あの浅緑色の野辺にたなびく霞、それは私の火葬の煙なのだなあ」である。老齢となり自分の死期を感じているのであろうか。新古今和歌集では「あはれなり」で始まり、「つひには」などの言葉から「結果」というものを強調している感じが強い。しかし、流布本では「はかない」ではじまり「野べにたなびく霞と思えば」となり、自然に流れていく小町をみる。過去の自分への気持ち、あるいは未練よりも自然にまかせるという心を感じる。

「浅緑」は「野辺」の枕言葉。「野辺にたなびく霞」は火葬のときの煙をいう。

⑪

花咲てみならぬ物はわたつ海のかざしにさせる沖つしら浪
(流布本一一六番)

歌の心は、「花が咲いても実がならないものは、海の神様がかんざしにしているあの沖のほうに見える白波だよ。」と考える。

「わたつ海」は「海」の意味で「海」の枕詞であるが、この歌では「かざしにさせる」から「海の神様」と考える。「かざし(挿頭)」は髪や冠に、花や枝などを折ってさすこと。

後撰集 卷第十九 離別 羈旅 一三六〇

海のほとりにて、これかれ逍遥し侍けるついでに

こまち

花咲きて実ならぬ物はわたつうみのかざしにさせる沖つしら
なみ

小町の歌としては、あまり注目されることのない①②は、生きかたとしての一つの姿勢であるかのようで少しユーモラスでもあるが、言えば男を揶揄し、自分をも揶揄する心である。③は確かに老齡者の心であると思われる。これが本当に小町の歌か否かではなく、庶民はこれを小町の歌として理解したのである。ここには仏教的要素も感じるが同時に時を生きている小町を感じる、小町のこの今という時を生きているという実在感が、民衆の共感や小町信仰にある小町像と考えさせるものである。④は小町にとつての「あはれ」という言葉の深さをつくづく感じさせる歌であるが、これは、所謂「慾」ではない。生きるという慾ではない。自分の身の置き所を「あるがままに」におき、それはあきらめでもなく、なげやりでもない。年齢を経てはじめて見つかるものかもしれないが、誰でも見つかるというわけでもないであろう。⑤は自分への疑問、長いと言われる人生が一瞬の夢であり、実はその夢が現実だという、小町の生来の直感的といえる認識力によるものともいえるのであろうか。やはりこれは読む人それぞれがそれぞれに知ることができる小町の心である。人生は夢のようだったとはよく言われる言葉である。言ってしまうえば、「時」というものは残酷である。時は必ず過ぎる。その残酷さである。⑥は昔

⑥ あはれてふことは毎にをく露はむかしを恋るなみたなり梟

(流布本一一〇番)

歌の心は「木の葉にはいつも露が置かれているように、嬉しいときも、悲しいときも『ああ』とつい言ってしまう言葉には、いつも昔を恋しく思う涙がある」と考える。

「言の葉」に「木の葉」を掛ける。「あはれ」はうれしに
つけ、悲しいにつけ人や物や自然、事物ににふれて、「ああ、
はれ」と発する感嘆の声をもととする(「古語辞典」 旺文社
一九八八)。「ああ」と感嘆して発せられた言葉と考える。古
今集では「ため息」と解されているが、筆者はため息ばかり
ではなく、嬉しいとき、美しいものを見たときに発せられる
感動詞と考える。楽しいときも、美しいものを見たときも、
つい昔の恋人を思い出し、涙が出てくると解する。「をく露」
は「涙」のことである。

古今集 卷第十八 雑歌下 九四〇 読み人しらず
あはれてふ言の葉ごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり

⑦ 山里は物のさひしき事こそあれ世のうきよりは住よりけり

(流布本一一一番)

歌の心は「山里にすむと、なんといってもさびしく心細い
ことがある。だけど厭なことの多い世の中よりは住みよい
よ」である。

「山里」は都から離れて寂しく暮らすことをいう。「さびし
き事」は「さびしくて心細い」の意。「世のうき」は「世俗

の厭なこと」。

古今集 卷第十八 雑歌下 九四四 読み人しらず

山里はもののわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよか
りけり

⑧ 別つつみるへき人もしらぬままに秋の気色になりける哉

(流布本一一三番)

歌の心は、「出会って、別れてを繰り返すうちに、決まっ
た人も知らないまま、いつのまにか秋の景色になっていたの
だ」と考える。一〇四番と歌意は同じ。

「別れつつ」は「出会って、別れて」の意。「見るべき人」
は「決まった人」と考える。「秋」は「飽き」を掛ける。

⑨ かたみこそ今は仇なれこれなくは忘るる時もあらまし物を

(流布本一一四番)

歌の心は「あの方と愛し合っていたときの形見であるが、
今はもうそれが私を苦しめる仇のようなものだ。もしこの形
見がなかったら、私はあの方のことを忘れる時もあるでしよ
うに」である。

「あた」は仇の意。「まし(推量の助動詞)」は実際にはそ
うではないとわかっていることを、もしそうだったらと仮定
し、その仮定のもとで推量する。

古今集卷第十四 恋歌四 七四六

き身」と「憂き身」を掛ける。この歌は前の六五番と同じ心を詠んだものと考ええる。

続後撰集 卷第十五 恋歌五 九九四 小町

しる人もしられざりけりうたかたのうき身もいまやものわれして

見えし人のなくなりしころ

- ③ あるはなくなきはかすそふ世中に哀いつれの日まで嘆かむ
(流布本八一番) (注十六)

歌の心は「生きている人はなくなり、亡くなった人の数は増えていく世の中だ。

こんな世の中で、いつの日まで私は嘆いているのだろう」と考える。

新古今集 卷第 八五〇 題知らず

小野小町

あるはなくなきは数添ふ世中にあはれいづれの日まで嘆かん
小大君集 林本 一二〇頁)

世のはかなき事、人々のたまふに 小大君

あるはなくなきはかすそふ世中にあはれいつまでいはむとすらん

- ④ あはれてふ事こそうたて世中を思へはなれぬほたし也けれ
(流布本一〇八番)

歌の心は「あはれということは困ったことだ。世の中への

思いから離れられなくするものだった」と考える

「こと」は「事」と「言」を掛けると解する(室城平成一〇前掲書二四頁)。「世中」を「男女の仲」と考えれば「あはれてふこと」は室城の考えるように「愛しているといつてくれた言葉」である。しかし「世中」を「俗世間」と考えると「あはれてふ事」は「哀れな事」(趣あること)となる。筆者は「世の中」を俗世間と考える。「うたて」は「厭なこと、困ったこと」である。

古今集 卷第十八 雑歌下 九三九

題知らず

小野小町

あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしまりけれ

- ⑤ 世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらす有てなければ
(流布本一〇九番)

歌の心は「世の中は 夢なのか、それとも現実なのだろうか。現実とも夢ともわからない。私も、どうせあつてもないようなものだから」である。

ありてなければの主語は二つ考えられる、一つは「世の中」である。もう一つは「わが身」である。室城氏は「我が身」として「生きている実感が無い」ことをいうとした。筆者も同様に考える。

古今集 卷十八 雑歌下 九四二 読人知らず

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ

られている⑤⑥⑦の歌は、①②③④に比べて、自らの行動を伴う激しい思いではない。⑥は自分の意思ではなく相手がくるのであれば待つ、それも夜が明けてもである。激しさよりも静かな強い思いであるが、自分からは動かない。⑦はこれも秋の月であるが、やはり静かな月である。自分の心を怪しくしてしまうような月ではない。「心盡し」という言葉も激しさよりも、やさしさ、それも男を対象としているのではなく、広く自分のまわりに生きるものすべてにと考えられるほど静かな心である。⑧は月が見えなくならないように雲を吹き払つてと風に頼むこの歌は、恋歌として理解されていることが多い。しかしこの静かな心はもはや恋歌というよりは、自分の行くべき道のことを言っているとも考えられる。自分が行くべき道を照らす秋の月、それを隠さないでほしいという願いである。筆者は類従本の後半にある⑤⑥⑦⑧の月は、男との関係の中にある小町ではなく、自分の心だけを見ている小町、独りで存在する小町をそこに見ることができると思う。また、小町の心の変化をここに見ることができる。

類従本小町集を通じて見ると、月を見つめる小町の心が激しい思いから、自分を見つめる静かな心へと変化していると考ええる。また小町説話・伝説の影響から男・恋からのみ小町の歌の心を見ていくのではなく、「月」と対峙する一人の女性の姿が類従本小町集の中には見られると考える。

Ⅲ 小町の晩年を想定させる歌二一首

小町の歌の中で、流布本小町集の六五番目以降の歌の中から次の一首を取り出してみた。これらの歌こそ小町の真作か否かで

はなく、当時の民衆が見た小町像が如実にみえるといえる。いずれも、激しい恋心、情熱、流れる涙から比べると、穏やかな心、寂しさ、悲しさ、そして強さがある。

① 千度ともしられさり覺うたかのうきみはいやさ物忘れして
(流布本六五番)

歌の心は、「千回お逢いしたことも今は知らないことです。今は泡のようにほかない恋となり、私もつらい身なのですが、昔のことなんてすっかり忘れてしまいました」と考える。

「千度とも」は窪田では「憂い思いは千たびともしられな
いほどしたよ」とある(窪田昭和33前掲書287頁)。
室城は「千回逢ったとしても、今では思い出せないことだ」とある(室城平成10前掲書15頁)。筆者は「いやさ物忘れして」を「楽しかったことも今ではほかないこととなった」の意が込められていると考えるので、「千回逢ったとしても今では知らないことだ」と考える。「うたかた」は「泡沫」の意で、ほかなさの象徴。「うたかたの」は「憂き」の枕言葉。「うきみ」は「憂き身」である。

② みし人もしられさり覺うたかのうき身はいさや物忘れして
(流布本八六番)

歌の心は「会ったことがある人でも今はわかりません。このはかない泡のような私は、そうですねえ、あの悲しかったことや、つらかったこともぜんぶ忘れてしまつて」と考える「うたかたの」は泡のようにほかないもの。「うきみ」は「浮

なことをいうが、女のほうは、月の「哀れさ」を見れば、そんなことでもいいことよとでもいうような問答である。ここでもやはり、秋の月の光の力と、男になびくばかりではないという女性性の主張がある。

類従本の秋の月はさらに続き、小町の心に変化が見られる。

⑤ あやしくもなくさめかたき心かなをは捨山の月もみなくに

(流布本九六番)

歌の心は「自分でわからないほど私の心をおだやかにすることが難しいこの辛い心。あの姥捨山の月を見たわけでもなの」である。

「あやし」は自分には理解できない・異常なものに対する感じをいう。「をは捨山」は「姥捨山」である。信濃国の歌枕。長野県千曲市と同県東筑摩郡筑北村の境にある冠着（かむりき）山かという。慰めがたい心痛を象徴する風物となった。

続古今集 卷第十九 雑歌下 一八五四 小野小町

あやしくもなくさめかたき心かなをはすてやまの月もみなくに

⑥ 長月の有明の月の有りつつも君しきまさは侍もこそせめ(流布本一〇二番)

歌の心は、「もしあなた様がこられるのでさえあれば、私は有明の月のように、夜が明けてもお待ちしていますものを」と考える。「長月」は陰暦の九月。「有明の月」は朝になって太陽がのぼってからも空に残っている月をいう。「ありつつ」

はこのままの意で「待つ」に係る。

拾遺和歌集に柿本人麻呂の歌として所収されている。

拾遺集 卷第十三 恋歌三 七九五

題しらず 人麿

長月の在明の月の有つつも君し来まさは我恋ひめやも

⑦ 木のまよりもりくる月の影みれば心盡しの秋はきにけり(流布本一〇六番)

歌の心は「木々の間からもれてく明るい月の光をみていると、限りなく物思いをする秋はもうきているのだな」と考える。

古今和歌集 卷第四 秋歌上 一八四

題しらず 詠み人しらず

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり

⑧ 天つかせ雲ふきはらへ久堅の月のかくる道まとはなむ(流布本一〇七番)

歌の心は「風よ、雲をふきはらえ。隠れようとする月が、その道に迷ってしまうように」であるが、二つの意味を考えるとができる。「私はまだ月をみていたい」と、「通つてくる男のために」との二つである。筆者は晩年の小町を想定し、「月をみていたいから」とであると考える。

⑤は、自分で自分の心をおさえることができない。姥捨て山の月でもないのにである。ところで、類従本の後半のみに取り上げ

「つき」は「月」と「手だて」を掛ける。「思ひ」の「ひ」が「おき（煥）」と「起き」にかかり、「走り火」と「焼け」などすべて縁語とされる。「走り火」は激しく音をたてて燃える火であり、小町は心が激しくばちばちと音をたてて燃えるほど焼け焦がれている状態だというのである。

古今集卷第十九 雑躰 一〇三〇 小野小町

人に逢はむつきのなき夜は思ひおきて胸走り火に心焼けをり
中たえたるおとこの忍ひてきてかくれてみけるに月のいとあ
はれなるをみてねんことこそいとくちおしけれとすのこにな
かむれはおとこいむなるものをといへは

④ ひとりねの侘しきままに起あつつ月を哀といみそかねつる

（流布本二六番）

詞書は「交際の絶えた男が忍んできているので、ちょっと隠れて様子をみると、月の光がしみじみと哀れで、寝ることがつまらなくなり、縁側で月をながめていると、男が月を哀れむのは忌むことだといってきた」と考える。

歌の心は「一人寝のあまりの寂しさに起きて、月をながめていました。月の光が身に染みるように思え、月がとても哀れと思え、これを忌むなんてできない」と考える。詞書によって後撰和歌集とは解釈が少し異なってくる。後撰和歌集では、「月をあはれと思ひ、それを忌むことができないのは、独り寝をしてきたからですよ」と責任を相手に置くが、類従本は、詞書が具体的で、状況がはっきりする。男が疎遠に

なつて独り寝が続いたからではなく、その程度の男と寝るよりは、月の方がもっと趣があるといったのであると考える。類従本の方が、女の意味、即ち小町の意味がはっきり伝わっている。

後撰集 卷第十 恋二 六八四

詠み人しらず

月をあはれと言ふは忌むなりと言ふ人のありければ
ひとりねの侘しきままに起あつつ月を哀といみそかねつる

この四首の「月」の歌には小町の生き方を感じさせるものがあると感じられる。特に①の歌は、山里の荒れた家で秋の月を眺め、煌々とした月の光の中の自分である。当然小町以外の人の存在はない。ただ小町独りの存在である。それでは寂しいのかあるいは孤独なのか、あるいは伝説でよく言われる落魄の小町なのだろうかと思われるかもしれないが、筆者は「哀れ」の中で毅然と生きる小町の姿を見る。月は万葉の歌人の世から、当時の人々には生活の中でいつもその存在を感じなければならなかった。従って②の歌のように、なぜ私を寝させてくれないのと問いかける対象ともなった。特に、「秋」という季節は、自分を見つめる季節でもあった。③も情熱的な恋心を月に託してといえる。④は少し面白く滑稽ともいえる歌である。自分をほったらかしにしていた男が突然やつてきた。女のほうもとまどつたのであろうか、いそいそと相手をするのではなく、ちょっと様子を見るべく縁側に独りで出て、月をみていた。男は月をみるのは体によくないというよう

Ⅱ 類従本「小町集」の中から「秋の月」を取り上げる。

小町の歌の世界では「秋の月」は、歌の心を託すのには最も身近な存在で、その心を素直に表現できるものであった。また、類従本「小町集」の中では、小町の心の変化が明らかに詠まれていると考える。「秋の月」を詠んだものとして次の八首を取り上げる。

山里にて秋の月を

- ① 山さとのあれたる宿をてらしつつ幾夜へぬらん秋の月影（流布本一〇番）

詞書は「山里で秋の月を」という。

歌の心は、「今私が住んでいる宿は、山里にある荒れた宿です。でも秋の月が煌々と私と私の宿を照らし、すっかり幾夜も過ごす私です」である。

「幾夜」は「幾世」を掛ける。続後拾遺和歌集では「幾夜」は「幾世」である。小町はこの荒れた宿で「幾夜」を過ごし、月「幾世」を過ごす。「秋の月」と、「山里の荒れた宿」というと盛りを過ぎた小町を想定する。「秋の月」・「荒れた宿」というと、落ちぶれた淋しい小町を感じるかもしれないが、筆者は幾世も照らす煌々とした月、幾夜かをこの豊かな自然の中で「あわれ」を満喫する小町を考える。

続後拾遺集 卷第十五 雑歌上 一〇二九

山里にて月をみてよめる 小町

やまざとの荒たる宿をてらしつつ幾世へぬらん秋の月

又

- ② 秋の月いかなる物そわか心なにともなきにいねかてにする

（流布本二一番）

詞書は「又」であるが、意味的には前の歌「山里の秋の月」に連ねてと考える。

歌の心は「秋の月はいったい何ものなのだ。このこうこうと照る月の光が私を寝させてくれない。わたしの心には、寝られないようなことは何もないのに」である。「山里にて秋の月を」でも述べたように、「秋の月夜」は決して人の心を静かにさせるものとは考えられない。そこには目に見えないもの達の生命力、あるいは「生きている」そのものを感じさせるものがある。小町が一人で生きる。しかしそれは孤独だけを強調するものではなく、「あはれ」を知る豊かな感性のある人であると考ええる。

新勅撰集 卷第五 秋歌下 二八三 小野小町

あきの月いかなるものぞわがころなにともなきにいねがてにする（『新勅撰和歌集総索引』明治書院）

- ③ 人にあはむ月のなきよに思ひ置て胸じゃしりひに心やけおり

（類従本二十四番）

歌の心は「あの方にお逢いする手でもない夜は、月のない闇夜のようなもの。私は、あの方への思いで起きています。胸騒ぎに、ぱちぱちと火の粉をあげて燃えるような火が走り、心が焼けるようです」である。

続古今集 卷第十三 恋歌三 一一九二 小野小町
夢ならばまたみるよひもありなきしなになかなかにつつま
るらん

⑪ 世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらす有りてなければ
(類従本一〇九番)

歌の心は「世の中は 夢なのか、それとも現実なのだろう
か。現実とも夢ともわからない。私も、どうせあつてもない
ようなものだから」である。

古今集 卷十八 雑歌下 九四二 読人知らず

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ

⑦⑧⑨⑩の夢は、⑥までの小町の情熱を感じた歌とは異なる。

これらの歌には夢への信仰はもう見えない。⑪は全く異なる夢で
ある。自分の身さへ本当にあるのだろうか、生きているといえる
のだろうか、まるで今までの自分がすべて幻であったかとも思
っているのだろうかというほど懐疑的である。この夢の変化から
類従本の中では、小町は情熱的な恋をする女性から、現実に覚め
てきた女性、そして自分の生そのものまでも懐疑的になった女性
という変化を知ることができる。前半の①②③④⑤⑥は古今和歌
集の歌である。それに対して、⑧は新千載集 詠み人小町 ⑨は
風雅集 詠み人小町 ⑩は続古今集 詠み人小町 ⑪は続古今集
詠み人小町 ⑫は古今集作者 読み人知らずである。古今集の成
立が九〇五年で、新勅撰集は一二三五年、続古今集一二六五年、
新千載集は一二六五年成立となり、風雅集一三四九年など流布本

群書類従本の五〇番以降には、古今集からだいぶ時を経た勅撰集
からの歌が多くなり、この小町の歌の変化が、民衆の中における
小町像の変遷と考え、この類従本「小町集」が書かれたときが小
町信仰の小町像に通じるものであると考える。

「夢」の歌はもう一首ある。類従本「小町集」十八番であるが、
この歌は窪田氏によれば、小町の歌ではないと考えられている。
(窪田昭和三三前掲書)。返歌として贈られてきたものであるとの
判断である。

かへし

頼ましと思はむとてもいかせん夢より外に逢なければ(類従
本一八番)

歌の心は、「頼りにはならないと思っても、夢よりほかに逢う
夜もないので、どうしようもないでしょう」である。

この返歌の中では、相手の高貴な男性は、夢を信じるという強さ
はない。しかし相手が夢に託そうとする自分への熱い想いを否定
もできずというところである。「夢を信じる」というものではな
いと考える。

詞書は「かえし」であるが、窪田氏によれば、「上の歌を人に
贈って、その人からの返歌があり、そのまた返歌かと思われる」
である。この「上の歌」はこの歌の歌意から考えても十六、十七
は小町の恋人からの返歌「うたた寝に……」と考える。十八はそ
の歌への 返歌となる。新勅撰集では「詞書」はない。

わらず人目をきにしていることへの侘しさ。⑤は夢路では頻繁に会えるのに、現実一度会うことができればという気持ちである。

⑥は夢路なら人もとがめないでしょう。この六首は小町の歌の真価として評価され、また情熱的な恋をする小町の姿を彷彿とさせる。従来の小町研究ではここまで重点がおかれて解釈されてきた。

しかし類従本の夢の歌はまだまた続く。比丘尼・唱導僧等の活躍等で、全国で小町が語られた後である。

⑦ 恋侘びぬ暫もねはや夢のうちにみゆれは逢ぬみねは忘れぬ

(類従本五〇番)

歌の心は「恋しくて、恋しくて苦しい、すこしの間でも寝たい。もし夢でみることができれば、逢えたことだし、もし夢に見なければ、少しの間忘れられる」と考える。

「こひわぶ」は自動詞「恋ひ侘ぶ」で、「恋慕の思いで悩む」ことである。「寝ばや」は「寝たい」である。

新千載集 卷第十二 恋歌二 一一五六

恋侘びぬ暫もねはや夢のうちにみゆれは逢ぬみねは忘れぬ

題知らず

⑧ 夏のよの侘しきことは夢にさへみるほともなく明る也けり

(類従本五三番)

歌の心は「夏の夜の寂しさというのは、秋の夜の寂しさとは違って、夢に見る間もなく、夜が明けてしまうことです」である。

風雅集 卷第四 夏歌

題しらず

小野小町

夏の夜のわびしきことは夢をだにみるほともなく明る也けり

⑨ 現にもあるたに有をゆめにさへあかても人のみえ渡る哉

(類従本五四番)

歌の心は「現実にも逢っているのだが、夢の中までよくも飽きもせずに会うことだ」と考える。やや冷めた心を感じる。

「ある」は「生る(生きている)」と考える。「あかても」は「飽かで」は「飽く」の未然形に打消しの接続助詞「で」のついたもの。

続古今集 卷第十三 恋歌三 一一九一

恋歌とてよめる

小野小町

うつつにてあるだに有を夢にさへあかでも人のみえわたるかな

⑩ 夢ならはまたみるよひも有なましな中々の現なりけん(類従本八二番)

歌の心は「これが夢ならまた夢で逢う夜もあるかもしれないけど、どうせ、これはなかなか現実になるものではないものね」と考える。はかない夢よりもっと現実味のないものが現実である。

「なまし」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に仮想の助動詞「まし」のついたもの。未来の推量を表すと考える。「なに」は上代語として「どうせ」の意である。

④ 現にはさもこそあらめ夢にさへ人めつつむとみるか侘しき

(類従本一四番)

詞書は、「さる高貴な方が人目を忍んで来られた時に」である。

歌の心は、「現実には人目を避けて来られることは難しいでしょう。だけど、夢の中まで人目を避けておられるのか、夢の中でも逢えないのがつらく寂しい」である。

「やむことなき人」は高貴なお方である。小町の高貴な方との恋というのは、小町説話の中でよく見られる設定である。古今集では六五六、六五七、六五八と三首の「夢」の歌が続く。当時、平安時代の人々の恋愛には、「夢」に対する信仰とまではいかないでも、夢に信じるものがあつた。

古今集 卷第十三 恋歌三 六五六

題知らず

小町

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ

⑤ 夢路には足もやすめすかよへ共現にひとめみしことはあらず

(類従本二五番)

歌の心は「夢のなかでは、逢いたくて、足を休めることもなく足しげくかよったけれども、現実には一度お逢いできたときほどではないです」である。一度だけでも、またお逢いたいですという気持ちがあると考ええる。

小町の歌の中で、夢は古今集卷第十二 恋歌二の五五二、

五五三、五五四から卷第十三 恋歌の六五五、六五七、六五八まで六首ある。これも、小町の方から夢路を通って行くのであり、小町の積極的な情熱が感じられる。

古今集 卷題十三 恋歌三 六五八 小野小町

夢路には足もやすめす通へどもうつに一目見しことはあらず

⑥ かきりなき思ひの儘に夜もこむ夢ちをさへに人はとかめし

(類従本七一番)

歌の心は「限りなくあなたを思う火が燈火となつて、そのまま暗い夜道をあなたのところへいきます。夢路までも人はとがめだてしないでしよう」と考える。

「思ひ」は「思う」と「思ひの火・燈火」を掛ける。

古今集 卷第十三 恋歌三 小野小町

かきりなき思ひの儘に夜もこむ夢ちをさへに人はとかめし

この「夢」の歌の研究の中で一般的によく言われていることは、夢の信仰と中国の『鶯鶯伝』との関係である(大塚平成二〇一一前掲書)。平安時代では自分の夢に出てきた相手は自分を想う人である。また、着物を裏返しにして寝れば、夢路を辿って相手に逢えるなどである。①は相手のことを思って寝ると相手に逢えた。②はふとうたた寝をすると恋しい人に逢えた。③は夜の衣を裏返しにして寝て逢おうとする。夢の中にふと出てきた人は、自分のことを想っているからだと考えられていた。この三首に比して、あとの三首④⑤⑥は、「夢路」を捉えている。④は夢路にもかか

波古語辞典」「しりせば」は「しっていたら」で現実とは反対のことを思っている。「まし」は事実と反することを想定して使われていると考える。「つ」は瞬間的な状態の完了をいうので、夢でみたのも瞬間であった。

古今集 卷第十二 恋歌二 五五二

題しらず

小野小町

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と記せば覚めざらましを

御返し

② うたたねに恋しき人をみてしより夢てふ物は頼み初てき（類従本一七番）

詞書は「このことをあの方に話したところ、あわれなことだといわれ、その返歌」である。この十六、十七、十八を一連の歌の贈答と考えると、この歌は小町自作のものではなくなる。詞書の「御返し」の「御」を考えると、これは高貴な方からの返歌と考えるのが妥当と考える。

歌の心は「たよりないものと思っていた夢ですが、これから、夢というものでも頼みにしはじめてしまった」である。

古今集 卷第十二 恋歌二 五五三 小野小町

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

③ いとせめて恋しき時はうは玉の夜の衣をかへしてそぬる（類

従本十九番）

歌の心は「どうにもならないほど恋しくて苦しいときは、夜衣を裏返して寝ます」である。

「せめて」は動詞「責む」（苦しむ）と副詞「せめて」（非常に）を掛ける。「玉」は「夜・黒」などの枕言葉。平安時代は、夜着を裏返しにして着て寝ると、恋しい人が夢に現れるという信仰があった。『万葉集』二八一二、二八一三、二九三七では「袖返して夜着物を着て寝る」と、一つは先方の夢に自分が現れる、もう一つは自分が相手の夢にあらわれることができるというのと二通り信じられていたと見える。古今集では「着る」であるが、この流布本小町集では「寝る」である。夢の歌が三首あったが、「思ひつつぬれはや」は、小町が相手のことを思いながら寝るのである。「うたたねに恋しき人」は、思いがけもなく相手と夢で逢えた。それらと比較して「いとせめて恋しき時は」は、非常に相手への思いが強く、この夢は、小町が夢路をたどって相手に逢いにいくという、もっと積極的なものを感じる。当時の夢への信仰心がいかに現実と結びつけて強くとらえられていたか、深く感じるものである。また、その強さを考えると「かへしてそぬる」の中に、小町の思いの強さも感じられる。

古今集 卷第十二 恋歌二 五五四

かへし

こまち

いとせめて恋しき時はうは玉の夜の衣をかへしてぞ着る

やむことなき人の忍ひ給に

同氏は類従本小町集の最後の歌一一六番目の「はなさきてみならぬものはわたつみのかさしにさせる沖つしら浪」は、あまりにも説話化しにくい歌であるので、最後まで残ってしまったのであると述べられているが、筆者はこの類従本が書かれたときの小町信仰へまで発展した民衆の中の小町像の影響であると考ええる（片桐昭和五〇前掲書 九〇頁）。筆者は類従本小町集の百十六首の中にこそ当時の多くの民衆が見た小町像、それは小町信仰にまで発展した小町像があると考ええる。従来、歌の真偽から類従本「小町集」百十六首に見られる小町像はあまり考察されてこなかった。筆者はあえて歌としての真価ではなく江戸中期から後期にかけて民衆がみた小町像をみるために類従本「小町集」百十六首からの小町像を考察してみたい。

「小町集」の先行研究としては、前田善子氏の『小野小町』（三省堂、昭和十八）があげられる。この研究の底本は前田善子氏蔵の異本である。次は昭和三年の窪田空穂校註『和泉式部集・小野小町集』（日本古典全書）（朝日新聞社）である。底本は群書類従本からの百十六種であるが、欠落部分もある。最近のものとして室城秀之著『小町集・遍照集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸』（和歌文学大系 十八）（平成十 明治書院）がある。底本は正保版歌仙集『小町集』と『私家集大成Ⅰ 中古』の「小町Ⅰ」（笠間書院）である。また、角田弘子著『小町集の研究』和泉書院二〇〇九年がある。底本は「西本願寺三十六人集」から六十九首、七〇番目からは流布本「小町集百十六首からである。また水垣久氏がウェブサイトで「大和歌と波流能由伎」で「小町集」を取り上げておられるが底本は確認できていない。

（2）「類従本小町集」百十六首から、その小町像

小町の歌というとはやはり小町集の一番初めに所収されている歌「花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」である。大多数の日本人が思い出すこの歌は、一一〇〇年を経てまだ、色褪せることなくいつも新鮮な感動を与えてくれる。この歌のように小町の歌を通じて当時の人々が共感を覚えた小町像を考察してみたい。

「夢」「秋の月」「小町の晩年」をテーマに考察を試みる。

まず古今集にある一八首の中から従来、夢の一群としてもっともよく解釈されてきたものから取り上げる。

I 「小町の夢の歌六首」

ゆめに人のみえしかは

① 思ひつつぬれはや人のみえつ覧夢としりせは覚ざらましを

（類従本一六番）（注五）

詞書は、「夢であの方にお逢いできたので」である。

歌の心は、「あの方のことを思いながら寝たので、夢でちらっとみたのでしょう。夢とわかっていたら目を覚まさなかったのに」である。

古今集の「夢」の歌として収集されている五五二、五五三、五五四の一つである。「人を思つて寝ると夢に見るという信仰による心」とされている。「思ひつつ寝る」は、恋しい人をお願いながら寝ると、夢の中で逢うことができると思われていたことに発する。

「ぬればや」の「ば」は接続助詞、「や」は疑問の係助詞。（「岩

持ちをそこに取り上げたものと考えられる。前述のように江戸時代後半（千八百年代後半）から、日本では地誌の編集が各地で盛んに行われるが小町信仰に関する地誌編集も同時代である。この地誌の中では、必ず小町の和歌、薬師如来の和歌が見られ、小町辞世の和歌などもある^{〔注1〕}。小町信仰の中では小町の和歌は重要な要素であったと考えられる。このことから、群書類従の小町集は、当時の小町信仰における小町像を考察する上では、貴重な資料となると考える。

第2章 流布本系『群書類従本小町集』に見られる小町像

（1）「小町集」に関して

前にも少し述べたが、「小町集」と言われるもので最も古く成立したものは、平安中期の西本願寺本三十六人集系統（六十九首）とされている。原本は散逸したが、その忠実な模写本『桂宮本歌仙集』の中の「小町集」、「醍醐本三十六人集」中の「小町集」等が現存している。最初の「小町集」の成立年時は天永三年（一一二二年）春と推定されている。白河法皇の還暦を祝って作成されたものである。

一般に流布本といわれる正保版歌仙歌集本は、藤原顕家本（安元二年顕家自筆、散逸）から増補・転写を繰り返して正保四年（一六四七年）に刊行され、歌数は百十五首である。この流布本系の中には歌仙本、類従本、前田善子氏蔵異本、神宮文庫蔵異本がある。類従本と言われる塙保己一著『群書類従 卷第二百七十二和歌部百二十七 家集四十五 小町集』は、一八一九年刊行完了されたものである。四十一番の「みるめあらば」の次に「いつは

とは時は分ねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける」が所収されている。流布本の祖本と考えられる『藤原顕家自筆本系統本（安元本）』の中では四十二番「みるめあらはうらみむやはとあまとははうかひてまたんうたかたのみは」の次に四十三番「いつとはときはわかねとあきの夜そものおもふことのかきりなりける」が載せられていることから、本来の形として所収されたものと思われる^{〔注2〕}。その結果百十六首となる。

西本願寺本六十九首と流布本系百十六首の違いとして、詞書がとりあげられる。ともに『古今和歌集』『後撰和歌集』から小町の歌、小町に因む歌を選びながらも、流布本系は詞書に依る「歌物語的な構成」を意識して編集されている^{〔注3〕}。このことにより、江戸時代の小町信仰が人々の間に浸透していく中で、人々がこの流布本から和歌を通じて捉えた小町像を知ることができる^{〔注4〕}。

しかし、流布本が何度も転写、増補を繰り返してきたこと、小町の姉、小町の孫、三国の町、躬恒、詠み人知らずなどの歌も所収することから、小町の和歌の資料としての価値が長年問われてきた。片桐氏が語るように、類従本の「小町集」後半から見られる「新古今集」「新勅撰集」「続後撰集」「続古今集」「玉葉集」「続千載集」「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」「新続古今集」など鎌倉時代以降の勅撰集から所収された小町の歌とされているものへの疑問である^{〔注5〕}。従来の小町研究では、小町の真作か否かに議論の中心がおかれてきた。類従本「小町集」の中の「他本歌十一首」に関しては片桐氏は「小町の歌ではないと断定できる」と述べている（片桐昭和五〇前掲書 八九頁）。また、

社との関係も出現してきている^{注八}。

当時の庶民の日常生活で最も浸透していた当時の比丘尼の活動は様々な形で行われたが、最も一般的には「地獄絵図」などを携え、賑わう場所で「賽の河原」「諸仏の功德」を説くものであった。この唱導僧や比丘尼による全国への流布は、江戸時代後期に至るまで活発に続いていく。

同時に、『新勅撰集』（一二三五年）、『続古今集』（一二六八年）、『風雅集』（一二四九年）、『新千載集』（一三六五年）など、勅撰和歌集が成立する。流布本ではこれら勅撰和歌集から西本願寺本六九首以外の一首が小町の歌として取り上げられていった。

この一首が取り上げられた背景には、小町に関する伝説、説話、そして民衆の小町への関心、その中にはおもしろおかしく興味本位に語られた部分もあるといえる。

- ④ 板本として江戸初期（一六四七年）に流布本系正保版歌仙歌集本一一五首が絵入りのもので出版された。これは前述のように藤原顕家の自筆本に転写、増補を繰り返されて成立したものであるが、②③で述べた変遷する小町像を色濃く反映したものとなったと考えられる。

流布本系と西本願寺系統本の大きな違いは歌の数のみではなく、たとえば小町の歌としても最も世に知られている「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」が、流布本系では一番初めに載せられている。それに対して西本願寺本系では、二七番目に載せられている。また

詞書にも変化が見られる。これらのことも、変遷する小町像が流布本には大きく影響しているという一端を示していると考えられる。

- ⑤ 小町の伝説化が全国に浸透し、小町信仰が盛んになっていった時代が一六〇〇～一七〇〇年代である。日本全国で百近くもある小町に関する、奪衣婆像、百歳像、小町老衰像、深草少将と小町の墓などの多くの史跡の建立がこの時期とされている。薬師如来による眼病・皮膚病の平癒、安産、火よけ等の小町信仰が全国的に広まった時代である。筆者が訪れた小町を開基とする京丹後にある妙性寺をはじめ、小町信仰は女性がその中心であった^{注九}。小町伝説や説話にみる興味本位な小町像の中にはきわめて男性本位のものと言ってもさしつかえないようなものも多くある。そのような小町像をはじめ、民衆の間では様々な小町像が錯綜していたと考えられる。では小町信仰の中心となった女性は、いったいどのような小町像をみていたのであろうか。それを考察できる一つの手段として、江戸末期に書かれた『群書類従「小町集」』を手がかりにしてみたい。

- ⑥ 塙保己一（一七四三～一八二一年）による『群書類従』流布本系小町集が刊行されたのは一八一九年である^{注一〇}。群書類従本小町集は四十一番を追加して百十六首からなる。今までの小町の歴史を辿れば、『群書類従』流布本系「小町集」は、小町信仰にまで発展した当時の庶民の間にあった小町への気

承和五年（八三八年）から仁明天皇崩御後六年目の斉衡二年（八五五年）まででと考えられている^{注五）}。小町は仁明朝の華やかな王朝文化の中で生きた歌人である。

（2）平安中期から江戸時代後期にいたるまでの小町像の変遷
小町の出現から江戸時代後期の小町信仰にいたるまでの1000年間を変遷する小町像。

① 平安中期『伊勢物語』『大和物語』等での説話化^{注六）}

小町説話の始まりである。『伊勢物語』二十八段「あぶごがたみ」三十六段「玉葛」、三十七段「下紐」、百十五段「形見」、百十三段「井手の山吹」などである。小町の色好み、多情、驕慢などの説話は、小町の和歌とこれらの物語を、おもしろおかしくこじつけて生まれてきたと考えられる。

またこの時期に六歌仙の一人である歌人小町として「小町集」が成立している。最も古く成立したものは、西本願寺本（一一二二年）の中の三十六人家集の中の「小町集」である。西本願寺本は「白河法皇六十の御賀の制作」とされている、「小町集」は六九首取り上げられている。長年この六十九首を以て小町の真作とされてきた。この西本願寺本は後奈良天皇から西本願寺に与えられたときは三十六歌仙の三八帖がそろっていたとされている（一五四九年）。しかし、その後散逸を繰り返して、人麻呂集上・下、業平集、小町集は江戸時代に補写されたものである。しかし長く伝えられてきたものであり、現在ではこの西本願寺本小町集六九首が小町の真作としても

つとも信頼がおかれている。

② 平安末期から鎌倉初期に『玉造小町子壮衰書』が一般に出回り、一人の女性としての小町の伝説化が始まった^{注七）}。小町の一生、特に老後の小町のイメージが作られていった。小野貞樹との贈答歌などを根拠に夫と妻の関係であったことなどが言われることもあるが、やはり歴史的事実として根拠となるものではなく、この『玉造小町子壮衰書』の小町老衰像が以降の小町伝説、小町信仰にも大きく影響をあたえていくことになった。が、黒岩涙香氏が指摘するように、この『玉造小町子壮衰書』の中で記された女性は、小町とは全く異なる人物と考える。ただ「小町」という名が共通していただけと考える。実際この本の中では中国文化の影響が色濃く、実際の小町の生活からは考えられない環境に生活する女性の姿である。仏教的説話のために、「小町」という名が便宜的に利用され、それが民間に流布されたと考える。

鎌倉後期から室町時代に『通小町』等の謡曲で流布されるようになった。

③ 謡曲に見られる小町は「玉造小町子壮衰書」や「深草少将の百夜通い」などの伝説からの影響、仏教の無常思想からの影響も大きかった。

また、世間一般への流布として唱導僧や比丘尼による当時の活躍を看過することはできない。錦氏も、「熊野神社の再興と覚厳院」で詳述しておられるように、小野を祭る熊野神

興と覚厳院」で詳述しておられるように、小野を祭る熊野神

江戸時代後期における小町像

―『群書類従』所載「小町集」の歌百十六首から―

黒羽友子

序論

王朝歌人の小野小町の名は日本人であれば誰でもしるところである。また「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」の和歌に小町の心を感じた人も多いのではないだろうか。平安時代前期に六歌仙の一人として活躍した歌人小町の和歌は千年を経た今も私たちに伝わる。そして一六〇〇―一七〇〇年には、日本全国に百力所余の史跡を残す小町信仰になる。一人の女性歌人がこれだけ多くの人々の心を動かした力はどこにあるのか。それを本稿では江戸末期に刊行された流布本系『群書類従・小町集』に見られる「小町像」として考察を深めてみたい。

第一章 歴史的人物としての小町と小町像の変遷

(1) 小町の出自及び活躍期

小町に関しては未詳とされている部分が多い。『群書類従和歌部 第一六卷』によれば小町の生年月日などに関する記述はなされていない。「出羽国郡司女」だけである^{注1)}。小町の詳細が残されていないのは出自及びその社会的地位が低かったからである。小町信仰を物語る資料となる地誌編纂が盛んになされる江戸期

の小町に関する伝記の中では、「小野良実」をその父とする説が、定着していたようである。名門小野家を出自とすることは小町が信仰の対象となる契機としては重要なことであった。地誌などに見られる伝説の研究から小町の実像にせまろうとされていた錦氏の『浮遊する小町』の中でもやはり小町の父として「小野良実」の名が記されている^{注2)}。古代の歌謡・物語伝承や、芸能・祭祀を詳しく記述している『記・紀』（古事記と日本書紀）を詳細に研究された小林氏は、小野氏が和邇氏の分流氏族から出た一族として登場し、「小野良実」という名の記述はなく、似たものとして「小野美実」の名がある。しかし、生存する年代に無理があるとしている^{注3)}。横田氏の研究では、小町がその出自ゆえに漢籍に深い教養があり、和歌を十分に学べる環境であったことをのべられている。小町の漢籍への深い教養は、小町の歌人としての評価、古今集にある小町真作とされる和歌への高い評価へとつながるものである。小町の生涯では未詳の部分が多いからこそ、その出自、漢文学の素養は歌人としての小町には欠かせない事実として重要視された。

現在もつとも小町の実像を伝えていると考えられるものは『古今和歌集仮名序』にある「小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるようにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なるべし」という小町への言葉である^{注4)}。

小町の活躍期に関しては、和歌の中で確実に交流があったとされる人物、在原業平、僧正遍昭、小野貞樹、安倍清行、文屋康秀の確認できる活躍期などから、小町の活躍期を仁明天皇即位後の

ソクラテスの在りか
—『大ヒッピアス』をめぐる—

上林昌太郎

Where is Socrates?
— A Study of *Hippias Major* —

KANBAYASI Syôtarô

Abstract

Hippias Major has been regarded as one of the early elenctic dialogues. Firstly, I say that, as for the traditional developmental view which groups dialogues into early, middle and late periods, one has to do away with ungrounded prejudices and to appreciate each dialogue as freely as possible, which is the standard attitude of Platonic scholarship today. And I declare I don't touch the problem of authenticity of this dialogue, which problem began in 19th century Germany with F.E.D.Schleiermacher.

Next, I explain briefly the *dramatis personae*, date and place of dialogue. Then I relate the flow of dialogue, accounting for problems at the same time. The subject of this dialogue is what fairness is. Hippias, a sophist, answers successively, 'a fair girl', 'gold', 'a gentleman's ideal life', which is successively refuted by Socrates or Socrates' *alter ego*. Then Socrates suggests and proposes answers successively, 'properness', 'usefulness', 'advantageousness', 'pleasure through sight and hearing', 'advantageous pleasure', each of which is successively refuted, only to get at no final answer.

I do not investigate further the arguments and/or answers above, but look at the uniqueness of this dialogue, namely Socrates' another self as an objective human being, and give some consideration to it.

Key words : Plato, *Hippias Major*, Socrates, Hippias, *alter ego*

引用文献一覧（文献への指示は、出版年を添えた著・訳・編者の姓による。ただし、書名の直後の括弧内に記した略号による場合もある。）

加藤信朗『初期プラトン哲学』（東京大学出版会、一九八八）

J. Burnet (ed.), *Platonis Opera II, III* (Oxford, 1967 (1901), 1965 (1909))

R. G. Bury, *Plato Timaeus, Critias, Cleitophon, Menexenus, Epistles* (Cambridge et London, 1929)

J. M. Cooper (ed.), *Plato — Complete Works* — (Indianapolis et Cambridge, 1997)

F. M. Cornford, *Plato and Parmenides* (London, 1939)

A. Croiset, *Platon — Œuvres Complètes — II (Hippias Major, Charmide, Lachès, Lysis)* (Paris, 2003 (1921))

P. Destrée et N. D. Smith (edd.), *Socrates' Divine Sign: Religion, Practice, and Value in Socratic Philosophy* (Kelowna, 2005)

E. A. Duke et alii (edd.), *Platonis Opera I* (Oxford, 1995)

C. Gill, 'Translating Plato' in *Phronesis XLIII* (1998), pp. 197–206

W. K. C. Guthrie, *The Sophists* (Cambridge, 1971 (1969))

———, *A History of Greek Philosophy IV — Plato, the Man and his Dialogues: Earlier Period* — (Cambridge, 1975)

E. Husserl, *Cartesiansche Meditationen — Eine Einleitung in die Phänomenologie* — (Hamburg, 1995³)

C. Kahn, 'The Beautiful and the Genuine: A discussion of Paul Woodruff, *Plato, Hippias Major*' in *Oxford Studies in Ancient Philosophy III* (1985),

pp. 261–287

———, *Plato and the Socratic Dialogue — The Philosophical Use of a Literary Form* — (Cambridge, 1996)

H. G. Liddell, R. Scott et H. S. Jones, *A Greek-English Lexicon*⁹ (LSJ 通称) (Oxford, 1940)

M. L. McPherran, *The Religion of Socrates* (Pennsylvania, 1996)

G. E. L. Owen, 'Thienai ta phainomena' in *Aristote et les Problemes de Méthode* (Louvain et Paris, 1961) pp. 83–103

É. des Places, *Platon, Œuvres Complètes XIV, Lexique, Ire Partie* (Paris, 1970 (1964))

J. Riddell, *The Apology of Plato* (Oxford, 1877)

L. Robin et alii, *Platon — Œuvres Complètes — IV (Phedre)* (Paris, 2002 (1985))

C. Rowe, *Plato and the Art of Philosophical Writing* (Cambridge, 2007)

T. J. Saunders (ed.), *Plato — Early Socratic Dialogues* — (Penguin Books, 1987)

D. Sedley, *The Midwife of Platonism — Text and Subtext in Plato's Theaetetus* — (Oxford, 2004)

A. E. Taylor, *Plato — the Man and his Work* — (London, 1960⁷ (1926))

P. Woodruff, *Plato — Hippias Major* — (Oxford, 1982)

(110111年十一月十三日 敬啟)

- いもの」が分断されてしまった以上、「美わしいものは快を与え
るものである」と「美わしいもの」の根拠づけに功利主義を用い
る発想をソクラテスが得たのは自然である」と説明する (Woodruff
1982, 77) が、これは説得的である。
- 22 ウォーターフィールドは、*It is surely not the giving of auditory or
visual pleasure that justifies calling laws etc. fine.* と説明する (Saunders
1987, p.256 n.2)。
- 23 ウッドラフは、*fine laws and the like could be fine in virtue of producing
pleasures of sight and sound* と説明する (op. cit., p.81 n.159)。
これを「我々が議論の基礎に措定したこと」とソクラテスは表現
する (299b2-3)。要するに、297e5-298a1 (cf. 298a6-7) で基礎に
措定した第七回答である。
- 25 大抵の述語はこのタイプであるから、ヒippias はあのように対
応した。「美わしい」は検討対象だから、当然例示されない。
- 26 *'tēi ousiai tēi ep' amphoteira heponenēi'*. 302e5, d2, e6, 10, 11 の
heponenai (「付随する」) に「つづける」の *des Places* 1964, p.192 の説明
être attaché (à, en parlant d'un caractère) がよく、この *ousia* (本
性) も変っていて、カーンが『大ヒippias』をアリストテレス
哲学以後の贋作とする根拠の一つである (Kahn 1985, p.270)。
『本性』の言い換え。
- 27 「聴覚を通じてかつ視覚を通じて快いものが美わしいのである」(298a6-7)。
ギリシア語の形容詞 *kalos* は「美しい」や *beautiful* よりもはるか
に広い意味を持つ。英語圏の研究者のうちウッドラフなどが *fair*
を用いる所以である。小論の「美わしい」は私の工夫であるが、
これまた広い意味を持つ漢字の「美」は活かし、「うつくしく」
よりも広い「うるわしい」の表記に用いた。
- いずれにせよ、*kalos* は *aesthetical* と「より」も *ethical* な概念
であり、*agathos* と相覆う。*kalokagathos* の語法ゆえに由来しな
う。プラトンがまず第一に、直ちにイデアを立てる義・美・善
(*dikaos, kalos, agathos*) の三概念は、いずれも倫理・道德概念と
理解するのが正解である。
- 30 『バイドロス』のビュデ版テキストの副題後半は「倫理的対話篇」
である (Robin et alii 1985, p.2)。
- 31 『弁明』のソクラテスが、おのれには腑に落ちぬデルポイの神託
を論駁すべく最初に訪れた国事家のもとを立ち去りながら自問す
る状況 (21d2-8) に類似する。
- 32 「ソクラテス」は「健全な力の持ち主」の意である。『国事家』に
はソクラテスのほかに「若いソクラテス」が登場し、主人公エレ
アびとの対話相手を務める。
『パルメニデス』後半ではその場に居合わせた最も若いアリス
トテレス(「最善の目的乃至終極の持ち主」)が六十五歳のパルメ
ニデスに知的訓練を施される。彼はのちに三十人制の一員となつ
た人物と記述される (127d2-3) が、当然、同名の哲学者を読み
こみたくなる (Comford 1939, p.109 n.1 はこれを拒むが、Owen
1961, p.92 はプラトンの意図を仄めかす)。
- 33 ヒippias がソクラテスの父親の名前を承知していたか、従って、
ソクラテスの彼がソクラテス自身むしろソクラテスの *alter ego* で
あると承知していたか、は別の問題である (cf. Saunders 1987,
p.257 n.1, p.242 n.1)。
- 34 葬送演説の想定年代がソクラテスの死後であることも周知のこ
とである (cf. 'Aspasia and Socrates are supposed to be cognizant of
Greek History down to the peace of Antalcidas (387 B.C.), a dozen
years after Socrates died!' (Bury 1929, p.331))。

- contemporary with Socrates rather than with Protagoras and Gorgias
と表現する (Guthrie 1971, p. 280)。
- 7 Saunders 1987, p.240 n.1を見よ。なお、T・J・ソーンダーズが編集したこのペンギン本プラトン訳注で『大ヒッピアス』を担当したのは R. Waterfield である (pp.211-375)。
- 8 前四三三年ごろ、つまり、『大ヒッピアス』の対話の十余年前、アテナイ来訪中のプロタゴラスにヒッポクラテス青年を紹介すべくソクラテスがカリアス家に赴いたとき、ヒッピアスは彼を取り巻くエリス国民あるいはそのほかの国民の、自然就中天体に関する天文学上の質問に答えていた(『プロタゴラス』315b9-c7)。自然研究は彼の得意分野の一つである。
- 9 E.Kapp が提唱し Saunders 1987 が採用したように *theleia* を *Eleia* の誤記とするより通意し、288a5 のヒッピアスのセリフ、「我々のところ【エリス】では、はなはだ美しい雌馬が生じるのだから」が落ち着きはする (cf. Saunders 1987, p.241 n.4)。
- 10 「所謂「中期対話篇」の術語と取る必要はない。*eidōs* はありふれたギリシア語であり、プラトンにおいても、所謂「イデア」以外の意味で用いられる。
- 11 以下、「適う、適切である」という語が頻出する (290c7, 8, 9, d2, 5, 7, 291a1, 3, 5, b4, 5, c3)。これは、第四回答の伏線である (cf. 293d8-e4)。
- 12 *ploutouni, hugiainonti, timōnenōi hupo tōn Hellenōn, apikōmenōi eis geras, tous hautou goneas teleutēsantias kalos peristellanti, hupo tōn hautou ekegonōn kalōs kai megaloprepōs taphēnai* がラテナイズした原文である。Saunders 1987, p.246 n.1 が指摘する如く、いかにも知識人らしい、修辞を凝らした造文である (*ploutouni* と *hugiainonti* の脚韻、*goneas* と *ekgonoi* の対照、同じ長さの、しかも漸次長くなる語句の対句、*peristello* の同義語 *haptō* 使用による
- 同一語反復回避がウォーターフィールドの指摘である。(最後の点について言えば、なるほど、ソクラテスは、子孫に用いられるのも、両親を弔うのも、*haptō* で済ましている (293a8-9, b11))。これを聞いたソクラテスが、「いやはや、驚くべく、見事に、貴兄にふさわしく語られしものかな」と言う所以である (291e3)。同じ消息は、「これほどまでの *diuturnambos* 【この場合「大げさな語句」(LSJ, s.v.)】とも表現される (292c7)。
- 13 295d5, 298b2-3, d1-2 に鑑み、*nomoi* の同義語である。
- 14 「能力あり」と「有用なり」を重ねるのは、後の吟味の伏線。
- 15 この論点に賛同するヒッピアスのセリフ、「国事や国家において、能力あること最も美わしく、能力なきこと最も醜い」(296a2-4)は、当時の知識人の面目を躍如たらしめる、と言うべきである。
- 16 この箇所の議論の流れは、ウッドラフが「ソクラテスが定義しようとするのは単なる有用性ではなく有益性であることをヒッピアスは 296d4 でおもてに出す。これをソクラテスは定義の新提案と考える」と説明する如くである (Woodruff 1982, p.68)。
- 17 「プラトンに係わらず、ギリシア語の日常用法は *khrēsimon* と *ophelimon* の区別を間々無視する」と註した A・クロワゼによると、フランス語の *efficace* と *avantageux* は明瞭に区別されるが、*utile* は双方にわたって用いられる (Croiset 1921, p.30 n.1)。
- 18 ヒッピアス主導の第一第二第三回答(ウッドラフの所謂「第一階梯」(Woodruff 1982, 46))を指すと考えてよいだろう。「もつと可笑しい」所以は、「美わしいもの」と「善いもの」を分断する破目になさる (op. cit. p.77 n.149) である。
- 19 「美わしいものは善いものである」とは当然自明の前提である (cf. Saunders 1987, p.255 n.1)。
- 20 *mousikē* の妥当な説明は、*poetry sung to music* (LSJ s.v.)。
- 21 ウッドラフは、第六回答の吟味を通じて「美わしいもの」と「善

(4)『大ヒッピアス』の奇妙さの擁護

『メネクセノス』はペリクレスの葬送演説のパロディーである。ペリクレスの演説は実は彼の愛人アスパシアが起草したものであり、従って、アスパシアに弁論術を教わったソクラテスにとつてペリクレス並の葬送演説は朝飯前であるのだが、偶々アスパシアが起草した演説を耳にしたのでこれをメネクセノスに語って聞かせる、というのがこの対話篇の内容である³⁴。この対話篇において哲学の議論がなされるわけではない。むしろ、国事上の演説がいかに詰まらないか、ということを示すのがこの対話篇の眼目である。プラトンにはこのような対話篇もあるのである。詩人を志していたとも言われるプラトンは、その才能の絢爛を用い、極めて多様な対話篇をものした。従って、奇妙さゆえに『大ヒッピアス』を贋作扱いする用はない。

(5) 結語

ソクラテスのうちには、ソクラテスを常に吟味し論駁するもう一人のソクラテスがいた。思うに、我々ひとりひとりのうちにも遙かののち（一九三一年）、「デルポイの言葉「汝自身を知れ」は新しい意味を獲得した。実証学は世界を喪失した学問である。我々はまず判断中止^{エポケー}によって世界を喪失し、普遍的な自省において世界を再び獲得せねばならない。「戸口の外に行くな。汝のうちに帰れ。うちなる人間（interior homo）のうちに真実は住む」とアウグステイヌスは言う」の一節で講演を締めくくった現象学者がいた（Husserl 1995, p.161）。彼（フッサール）の構想はソクラテスのそれと同一ではあるまい。しかし、「うちなる人間」に『大ヒッピアス』の彼を窺うことは、見当ちがいではないだろう。

註

1 この英訳プラトン全集については、C・ギルに的確な書評がある（Gill 1998）。また、プラトン研究への好個の手引きという点、加藤一九八八の「序章 プラトン解釈の問題点」を髣髴させる。大家にして所謂「発展史」を維持する向きも多い。たとえば、D・セドリー（Sedley 2004）である。しかし、かつてほどの割り切りをしないのが、当然、今日の学問水準である。

3 贋作説の嚆矢は F.E.D. Schleiermacher (1768-1834) の由。プラトンのテキストは OCT (Duke et alii 1995, Burnet 1901, 1909) を用いる。

4 贋作説のカーンに真贋をめぐる論者のリヴューがある（Kahn 1985, p. 261）。真作説の P・ウッドラフ、R・ウォーターフィールドともこの問題にはサラリとしか触れない（ウォーターフィールドについては Saunders 1987, p. 213 を見よ）。

なお、たとえば McPherran 1996³ また、Destree et Smith 2005 所収の諸論文『大ヒッピアス』に言及する M.L. McPherran⁴ G.V.Riel⁵ T.C. Brickhouse et N.D. Smith⁶ P.Destree は全員『大ヒッピアス』の真作性を疑わない。学問の世界に多数決は馴染まぬが、参考にはなるう。

5 「レオンティノイ大使としてアテナイを公に訪れたゴルギアスは、民会で卓越した演説をしたのみならず、私に公開演説をして若者から多大の報酬を得た」（282b4-c1）と前四二七年のゴルギアス訪問が言及されている以上これ以降であること、ペロポネソス戦争（431-404 BC）の敵対国エリス（エリスはスパルタの同盟国である）からヒッピアスが訪れ得たのはアテナイとエリスの非交戦期であることがテイラー所見の根拠である。

6 ガスリーはヒッピアスを another of the younger generation of Sophists,

自分の身内や友人の安全を確保すること】について対話するのは恥かしくないか、と。また、「美わしさ」を知らずして、「美わしい」議論や行為と「美わしくない」議論や行為をどのようにしてお前は弁別するのか、と。こんな状態【大事なことに関する無知の状態】にいながら生きていくほうが死んでしまうよりも善い、とお前は思うのか、と。このように、ソクラテスは世の知者と彼の板挟みになっている。

(2) 描写の回顧

(1)の順に従って alter ego の描写を回顧し、いささかのコメントを加える。

(イ)「徳は何か」を弁えぬ者が「徳は教え得るか」のような問いを問うてはならない、とは『メノン』におけるソクラテスの主張であるが、これはソクラテスの根本の立場であった(『プロタゴラス』末尾にも同種の主張がある)。このように、「シカジカとは何か」という重い問いを問うてやまず、安易な回答を破砕してやまないソクラテスにかかると、ひとはシビレ^{シビレ}エ^エに刺されたようになり、物が言えなくなってしまうのである(『Politeia』)。(ロ)「真実以外に一つ顧慮せぬ野人」は、ニーチェのツァラトゥストラの原型となったカリクレス、通常の正義など踏みじり、善悪の彼岸に到らんばかりのカリクレスに善悪美醜正邪の分別心がないお残存することを顕わにした『ゴルギアス』のソクラテスの舌鋒を殊に髣髴させる。また、「揚げ足取り」は、所謂「ソクラテス的対話篇」中の随所に見出せる。(ハ)「知っていると思っ知らないことを言うことを許さない」とは『弁明』の「無知の自覚」にほかならない。(ニ)「理屈ゴネの議論」の排斥と「自分自身、

自分の財産、自分の身内や友人の安全を確保する裁判所や評議所などでの議論」の称揚は前五世紀のアテナイ紳士の常識であった(『メノン』71d5など)が、ソクラテスはこの常識に反する在り方をした、と『ゴルギアス』485e3-486d1などは我々に告げる。要するに、ソクラテスをしてソクラテスたらしめたのが、彼、つまり、ソクラテスのうちなるもう一人のソクラテスであった、と『大ヒッピアス』は言うのである。

(c) alter ego と神霊の声

ソクラテスが(1)(1)で「神霊による運」と表現していることが示すように、alter ego と『弁明』などの「神霊者」^{トダイモニオン}には当然ながら関係がある。Riddell 1877, pp.109-117 などを利用して「神霊者」が出現するプラトンのテクストを総覧することは、いまは控える。

子供のときからソクラテスに現れた神霊の声、神霊者の印が常に制止者として機能した、と『弁明』は言う。一般のアテナイ紳士同様、国事に関わろうとしたソクラテスを制止して私に生きる道を選ばせたのは重大な節目に機能した事例であるが、『パイドロス』の事例はそれほど深刻ではなく、「恋愛」についてなした議論の誤りをソクラテスに気づかせるよう機能した。いずれにせよ、ソクラテスには始終神霊者が現れ、ソクラテスは神霊者の制止の声に常に従い、常によりき結果を得た。

『大ヒッピアス』の alter ego は、ソクラテスの神霊者を具現化、実体化したものと言えるのではないか。このような対話篇は、ほかに類を見ない。この独自性あるいは奇妙さは、『大ヒッピアス』贋作説の論拠の一つともされた。

(口) alter ego の活躍

第一回答から第三回答までは回答の吟味をソクラテスが彼になりかわって行う趣向になっていて、第一回答の吟味において尊貴な事象を論じる際「竖琴」「土瓶」を持ち出す彼に響きして「無教育野郎」と難じるヒippiアスに、「彼は真実以外なにも顧慮せぬ野人だ」とソクラテスは答える。第二回答吟味においても、「金」の回答を以て彼の折伏に自信満々なヒippiアスに対して、「簡単には回答を受け入れず凹まない人物」とソクラテスは彼を描写する。また、「豆スープ」「土瓶」「菜箸」を持ち出す彼に響きして彼の名を問うヒippiアスに、「名前を言っても君は知るまい」「彼は揚げ足取りで甚だうるさい」とソクラテスは言う。

(二) alter ego の正体

さらに、第七回答を思いついた際、ソクラテスはヒippiアスに、「あの大胆な人間に「聴覚と視覚を通じて快いものが美わしい」と答えたなら彼の大胆さを我々は阻止できる、と君は思わないか?」と尋ねる。また、彼は、ソクラテスがたわごとを言い、何も言っていないのに言っている振りをするならば、ソクラテスが最も恥じる相手である。「彼は誰か」とのヒippiアスの問いに答えて、「彼はソプロニスコスの子【息子】(ho Sophroniskou)で、知らないことを知っていると云うことも、まだ探究していないことを容易に言うことも、私に許さない」とソクラテスは言う。

この「ソプロニスコスの子【息子】」という表現が、彼がソクラテスその人、むしろ、ソクラテスの alter ego であることを明示する。古代ギリシア人の名前は個人の名前であり、彼等に姓はな

い。古今東西を問わず親は子供にめでたい名前をつけるから、複数の人物が同一の名前を持つこと珍しくない³²。同一名の人物を区別するために彼等は父親の名前を用いる。アテナイにおいては、さらに地区の名前も用いる。たとえば、ソクラテスの最も正式な呼称は「アロベケ地区の、ソプロニスコスの子、ソクラテス」である。このような次第で、「ソプロニスコスの子【息子】」はソクラテスを指す以外ないのである³³。

(1) alter ego の詳述

しかし、彼が最も多く語られるのは、第八回答の破綻が示されたのである。

ヒippiアスは、ソクラテスの、また彼の議論を理屈ゴネのクズ呼ばわりして退ける一方、大いに価値あり美わしいのは、裁判所や評議所などで美わしく善しかたで議論し、自分自身、自分の財産、自分の身内や友人の安全を確保することだ、と言い、このような在りかたを推奨する。これに対してソクラテスは彼に言及し、己の立場を説明する。彼はソクラテスのごく近い身内で、ソクラテスと同居している。「神霊による運」に制圧されたソクラテスはいつも彷徨い、道を失くし、ギリシア人一般がすることをせず、知者から見れば「理屈ゴネ」にかまけている。ソクラテスが己の困惑を知者に話すと、知者はヒippiアス同様の推奨をするが、それに納得して家に帰り、家人達に推奨内容を伝えると、ソクラテスを常に論駁する彼がソクラテスを痛罵する。論駁を被ったおかげで「美わしさ」が何かさえ知らないことをこんなに明白に示されたにもかかわらず、「美わしい」事業【裁判所や評議所などで美わしく善しかたで議論し、自分自身、自分の財産、

語である」は矛盾撞着するので、第七回答は破綻する。

(8) 最終第八回答とこれに対する吟味

第七回答も破綻したいま、ソクラテスが、精確にはソクラテスの alter ego が提案する回答は、「ほかの感覚による快」とは異なつて「美わしい」と尊ばれる、「視覚と聴覚による快」「視覚による快」「聴覚による快」は快のうち最も無害で善い快であるので、「美わしさは有益な快である」である。しかし、「善さを作るもの」である「有益さ」によつて「美わしさ」を説明するのは「美わしさ」と「善さ」の分断という不合理を前提する以上不可である、とは第六回答に対する吟味を通じて既に説明されている。ゆえに、第八回答も破綻する。

三 概要回顧

以上、『大ヒッピアス』の概容を見た。ビュデ版テキストのタイトルには「美【美わしさ】」について、反駁的対話篇^{アナトレフタイコス}という副題が付されている (Croiset 1921, p.8)。副題の後半が示すとおり、本対話篇は「シカジカ【様々な倫理・道徳概念²⁹】は何か」の問いをめぐり、ついには回答の得られぬまま終るタイプの対話篇である。副題の前半は『パイドロス』のそれと同一である³⁰が、『パイドロス』にはイデアー論が明瞭に登場し、美とは何かが積極的に語られる。ゆえに、『大ヒッピアス』は発展史的立場からソクラテスの前期対話篇に数えられてきたのであるが、その中でもどのあたりに位置づけるべきか、との議論がある。たとえばウッドラフも『大ヒッピアス』中にイデアー論の萌芽を探り、中期対話篇に近い、前期のなかでも比較的遅い時期に『大ヒッピアス』を

比定した。

また、うえに述べた概要のうちに於ても、議論の各段階に様々な問題を見いだせよう。「所謂「前期対話篇」の哲学的内実は意外に手ごわい」というソーンダーズの批評 (Saunders 1987, p.35) は的確であり、「概要」に浚いあげた諸点を洗い直す作業は有意義であろう。

しかし、この作業を小論はもはや行わない。「はじめに」に記したように「ソクラテスは何であつたか」を可能な範囲で考察し、小論を結ぶ。

四 ソプロニスコスの息子—もう一人のソクラテス—

(一) ソクラテスの alter ego の描写

まず、ソクラテスの alter ego の描写を順次見てゆく。

(二) Enter alter ego Socrates. (ソクラテスの alter ego 登場)

ソクラテスの alter ego が初めて姿を見せるのは、266c5 である。「美とは何か」を弁えぬのにどうして美醜を論えるのか」と最近ヒュプリステイコウス^{ヒュプリステイコウス}無礼なしかたでソクラテスに問い、ソクラテスを難問に投げ入れ【先へと進み行くべき道をソクラテスから奪い】、ソクラテスを笑い物にした或る人物^{テイヌス}として、である。「美とは何か」を答え得なかったソクラテスは「彼のもとを立ち去りながら、己に怒り、己を責め、【ヒッピアスのような】知者に遭遇して回答を得たうえでその回答を学習し終えたならば再び彼に回答しよう、と己に約束した³¹」。こうしてヒッピアスとの対話が始まる。従つて、彼こそが、『大ヒッピアス』におけるソクラテスの対話問答活動の黒幕である。

(ハ)第三段階(余談…^い対全体と両構成部分に同一述語が付される場合と付されぬ場合)

ヒippiアスには、視覚による快と聴覚による快のどちらも被らない受動状態を視覚と聴覚の両者による快が被る、などという事情がそもそも理解できない。「僕【ヒippiアス】も君【ソクラテス】も被っていないことを僕等二人が被っているのを君が見つけるだなんて、決していない」、「僕【ソクラテス】には、僕が被っていない、従って】そうあらず、君【ヒippiアス】もそうあらず」ことを僕等二人が被っていることも、僕等二人が被っていることを僕等のどちらも被っていないこともあり得る、と僕には見える」と双方の意見は食い違ふ。

ヒippiアスは「正しい」「不正だ」「金製」「銀製」「老いた」「若い」などの述語しか考えていない²⁵。成程これらは、Pを述語、a、bを対²⁶個体とし、大雑把に記号表現するならば、 $(Pa \wedge Pb) \rightarrow (Pa \wedge b)$ と述語と呼ぼう。これに対し、ソクラテスは「一」「二」「奇」「偶」のような述語の存在に気づいている。僕は一人で奇数、君も一人で奇数、しかし、僕と君は二人で偶数なのだから、「我々二人がシカジカであるなら各人もシカジカであり、各人がカクカクであるなら我々二人もカクカクである、ということ「完全な必然」ではない」。これらは「ソクラテス型述語」と呼ぼう。ヒippiアスは、「このようなの【ソクラテス型述語】はそうでないが、先に僕が言ったような【ヒippiアス型述語】はそうだ」と抗告する。しかし、ソクラテスがこれに答えて言うように、反例は一つあれば充分である。

(二)第四段階(第三段階の結論に鑑^いみた述語「美わしい」の型の特定)

ソクラテスは、第二段階の結論を再確認する。「視覚と聴覚両感覚による快」が美わしい所以は、「各感覚による快は被るが両感覚による快は被らないもの」あるいは「両感覚による快は被るが各感覚による快は被らないもの」ではなく、「両感覚による快も各感覚による快も被るもの」である。「両感覚による快は美わしいし、各感覚による快も美わしい」と承認されたのだから」と。従って、視覚快と聴覚快が共に美わしいのは両者に付随する本性によって²⁶であり、一方には付随しない本性によってではない。両快が美わしい所以は、両快にも各快にも付随せねばならぬ。しかし、醜い快もあるのだから、「快であること」がその所以ではない。「視覚と聴覚によること」がその所以である。しかして、「視覚と聴覚によること」という受動状態²⁷は視聴の両感覚には付随するが、その各々には付随しない。ゆえに、視聴の各感覚による快はこの受動状態ゆえに美わしいのではない。従って、議論の基礎²⁸措定に即し、「視聴の両感覚による快は美わしい」と言い得るが、「視聴の各感覚による快は美わしい」とは言い得ない。しかし、「美わしい」が「ヒippiアス型述語」ならば視聴の各感覚による快も美わしいのであるから、「美わしい」は何型述語か、問わねばならない。ソクラテスには、「美わしい」が「ヒippiアス型述語」であること自明に思われるが、ヒippiアスもこれに賛同する。

(ホ)第五段階(結論)

このようにして「聴覚と視覚を通じて快いものが美わしい」(議論の基礎措定たる第七回答)と「美わしい」はヒippiアス型述

は別である」という、満足いたしかねる不合理な結論、最初の議論¹⁸よりもっと可笑しな議論が生じてしまふ¹⁹。

(7) 第七回答とこれに対する吟味

道を無くしたソクラテスがそれでも道を見つけ出して得た回答は、「聴覚と視覚によって我々に快を与えるものが美しい」である。美しい人間、刺繍細工、絵画、彫刻はそれを見る我々を喜ばせるし、美しい音、音楽²⁰、議論、物語はそれを聞く我々を喜ばせるからである。²¹ ヒッピアスもこれに賛同する。しかし、ソクラテスはこの回答にも問題を見出す。

まず、美しい事業や法律が美しいのは視覚と聴覚によって快を与えるからなのか、という問題がある²²。しかし、これについては、ソクラテスは「ひよっとすると視覚と聴覚の埒外ではないかもしれない²³」の一文で済ませてしまふ。

ソクラテスが本格に取り組むのはもう一つの問題である。この問題に気づいた時、第六回答と同じしかたで【つまり、「有益なものが美しいものである」という回答に潜む問題を乗り越え得ずに】道を無くしてしまっていること、それなのに道を見つけたと思っていること、を彼は既に豫見している。大変な眼力である。以下、ソクラテスが問題を煮詰める段取りを回顧する。

(イ) 第一段階（「美しい」快の絞りこみ）

視覚と聴覚による快のみを特筆して「美しい」と呼び、視覚と聴覚以外の感覚による快、つまり、食い気、飲み気、色気などの快は「美しい」と呼ばぬ所以をソクラテスは尋ねる。これらもまた快であるには違いない。しかし、これらを「美しい」と呼ぶ者がいるならば、人々の嘲笑を招くのが落ちである。実際、

最も快い性事は最も醜い【「見難い」と考えられるがゆえ、性事を行う者は人目をばばかる。このように、我々が「美しい」という述語を付するのは全ての快に、ではなく、視覚と聴覚に生じる快に、である²⁴。視覚と聴覚による快は美しいが、これ以外の快は美わしくない。

(ロ) 第二段階（視覚と聴覚による快が美しい所以）

視覚による快は視覚と聴覚の両者による快ではないし、聴覚による快も同断である。また、或る快と或る快が相違する場合、啻に程度の相違にとどまらず、一方は快だが他方は快でない、というほどに相違しはせぬ（両者とも、あくまで快のままである）。ゆえに、視覚と聴覚による快をそれ以外の快から仄び出して「美しい」と呼ぶ所以は、「視覚と聴覚による快が快であること」ではあり得ない。「視覚による快と聴覚による快」は共有するが、「ほかの快」は有さぬもの」がその所以でなければならない。次に、視覚による快が美しい所以が「視覚によること」であるならば、聴覚による快は美わしくないこととなる。従って、「視覚による快と聴覚による快が共有するもの」に「美わしさ」の根拠は求められる。かくして、「視覚による快と聴覚による快は同一のものを有し、これが両快を美わしくする。両快に共通するこれは、各快に特有でもある。両快も各快も美わしくある方式はほかにない」との結論が得られる。

さて、この結論に添えたソクラテスの発言、「両快は或ることを被っている【受動している】が各快はそれを被っていない【受動していない】場合この受動状態が両快を美わしくすることはない」にヒッピアスが絡んで来、OCT三頁余の余談が始まる。

も、何時でも、誰にも、その美わしさが承認されるとは限らない。むしろ、これらについては、個人間であれ国家間であれ、係争が絶えない。従って、美わしくあらしめるものに美わしく見えることは必ずしも伴わないし、美わしく見えしめるものに美わしく見えることは必ずしも伴わない。「美わしくあること」と「美わしく見えること」は必ずしも両立しないのなら、「美わしくあらしめるもの」と「美わしく見えしめるもの」のいずれを「適切さ」として選ぶのか、があらためて迫られる。

ヒippiアスは「美わしく見えしめるもの」を選ぶ。かくして、「美わしさそのものが何か、を知ること」は、ヒippiアスとソクラテスから逃げ去ってしまった。

(5) ソクラテスの新提案たる第五回答とこれに対する吟味

ソクラテスは新しい見解を再びみずから披歴してヒippiアスの意見を求める。新見解は、「有用なものが美わしいものである」である。そのゆえは、「目が美わしい」と我々が言うのは、見る能力がない目について、ではなく、見ることに對して能力があり有用である¹⁴目について、であるからである。同様に、「身体全体が美わしい」と言うのは、あるいは徒競走^{ドッロモス}、あるいはレスリング^{バレスリン}に對して能力があり有用である身体についてである。さらに、人間についてのみならず、動物、器物、乗り物、道具、事業、法律など万事について消息は同一である。つまり、おのおのの事物の本性に即して有用なものを「美わしい」、無用なものを「醜い」、と我々は言う。ヒippiアスはこれに賛同する。

これを吟味してソクラテスが見出す問題点は、左記の如きである。

あることを為し遂げる能力を持つものは能力を持つ程度に応じて有用であり、持たないものは無用である。ゆえに、能力は美わしく、無能力は醜い¹⁵。ところが、万物のなかで知恵が最も美わしく、無学・無知が最も醜い以上、矛盾が生ずる。過ちを犯す者意図せずに【「知らずして、即、知恵なく無知を以て」】悪事をなす者も能力あつてこそ過ちを犯し、悪事をなすのであるけれども、悪事遂行能力、悪事遂行に有用な事物を「美わしい」と我々は言わないからである。したがって、「能力あるもの」「有用なもの」は「美わしいもの」ではない、との結論が導かれる。

(6) 第五回答の手直しによる第六回答とこれに対する吟味

みぎの結論に対するヒippiアスのセリフ、「能力と有用性が善いことに關する場合、これらは美わしい」を承け¹⁶、ソクラテスは、「能力があり有用なものが端的・無条件に美わしい、ということとは去ってしまった。しかし、我々の心魂が言いたかったのは、「善いことをなすのに有用であり、能力あるものが美わしいものである」だったのではないか。ところが、これ【「善いことをなすのに有用であり、能力あるもの」】は有益なものである」と言い、ヒippiアスも賛同する。かくして、「有益なものが美わしいものである」という第六回答が得られる。¹⁷

ソクラテスの指摘する、第六回答の問題点は左記の如きである。「有益なもの」とは、「善いものを作るもの」である。「作るもの」とは「原因」である。ゆえに、「美わしいもの」は「善いもの原因」である。ところが、「原因」と「原因がその原因である所のもの【「結果」】は別である。つまり、「作るもの」と「生じるもの」は別である。ゆえに、「美わしいもの」と「善いもの」

ったことをヒippiアスは理解し、「それによって爾余一切が飾られるもの、その形相¹⁰が付加されたなら爾余一切が美しく見えるもの」である「美しいものそのもの」に対する第二の回答を行う。

(2) ヒippiアスの第二回答とこれに対する論駁

ヒippiアスの第二の回答は、「金^{きん}にはかならない」である。なるほどこれは右記の、六行みぎから三行にわたる記述にかなう。

ソクラテスは善き彫刻家ペイディアスのアテナ像を例に採り、彼が目や顔や手足を金ではなく象牙で飾り、瞳は石で象眼したではないか、と言う。このように、適所の適材¹¹は美しく、然らざるは醜い。ソクラテスは、美しい豆スープで満杯の美しい土瓶を火にかけると、無花果製菜箸は豆スープの香りづけになるし、土瓶を微塵にする恐れもないから、無花果製菜箸は金製菜箸よりも土瓶に適い、したがって金製菜箸よりも美しい、と言って駄目を押す。ヒippiアスは、ソクラテスが回答を求めている「美しいもの」とは「いつ、どこで、だれにとっても醜く見えることがない底のもの」であることを理解し、第三の回答を行う。

(3) ヒippiアスの第三回答とこれに対する論駁

ヒippiアスの第三の、右記の次第により「あらゆる男子にとって、いつでも、どこでも最も美しいものは何か」に対する回答は、「富み、健康であり、ギリシア人から尊敬され、長寿に達し、亡くなった両親を美しく埋葬し、子孫から美しくかつ太っ腹に弔われること¹²」である。

何に付加されても、付加される対象【石、杖、人間、神、行為、学問など】が美しいものとなるような美しいものそのものの、

美そのものが何か、が問われているのだから、問われているのは「万物にとっていつも美しくあるもの (ho pusi kalon kai aei estin)」「否、「いつも美しくあるであらうもの (estai)」なら、「いつも美しくあったもの (en)」でもある。ならば、かつてのトゥロイア戦争の英雄アキレウスにとっても、アキレウスの父方の祖父アイアコスにとっても、両親に遅れて弔われるのが美しいことになる。しかし、アキレウスの母テティス、アイアコスの父ゼウスは不死なる神々であるから、アキレウスもアイアコスも逆縁となること必然である。

今度はソクラテスのほうが、精確にはソクラテスの *alter ego* に託けてであるが、第四の回答を示唆する。註11で注意したように、第二回答の吟味の際に気づかれた点の敷衍である。

(4) ソクラテスの示唆による第四回答とこれに対する論駁

それは、「適切さそのもの、適切さそのものの本性」である。

ソクラテスはこれに吟味を加えるべく、適切さは適切さが付加されるものを美しく見えしめるのか、それとも、美しくあらしめるのか、それとも、その何れでもないのか、と問う。ヒippiアスは、或る人に適合する衣装がそのひとをより美しく見えさせることを理由に、「見えしめる」のが正解だ、と答える。ならば、「適切さ」は「美しくさに関する誤謬^{アパテイ}」であることとなり、「美しくさそのもの」の回答にはならない。「美しくさそのもの」は、「すべての美しいものが美しいものである所以」なのだから。以上をソクラテスに指摘されたヒippiアスは、「適切さは、それが付加されるものを美しくあらしめ、かつ見えしめする」と答える。ところが、法律^{ノミマ}や事業は、本当に美しいものであつて

諺の意味が知れたと思うから」というソクラテスのセリフも然りである。

「美わしさ」に焦点が定められる所以は左記の如きである。

ピタコス、ピ阿斯、タレス、アナクサゴラスなど過去の知者が政事から身を遠ざけ、金銭に恬淡としていたのに対し、プロタゴラス、ゴルギアス、プロディコス、ヒッピ阿斯など現代の知識人は政事にも関わり、若者の教育に携わって多大の報酬を得もする。金儲けでは知識人中随一と自慢するヒッピ阿斯にソクラテスは、「エリス大使としてラケダイモン【スパルタの別称】へ赴いた貴兄は、ほかの諸国にましてラケダイモンで荒稼ぎをしたのではないか」と尋ねる。法治国であるラケダイモンにおいては徳が貴ばれる以上、徳を与える知識人たるヒッピ阿斯は引っぱり風であるはずだから。「否」と答えたヒッピ阿斯に勿論皮肉でラケダイモン人の非を鳴らしたソクラテスは、ラケダイモン人がヒッピ阿斯に子弟の教育を託しはしないに拘わらずヒッピ阿斯を称讃する所以を尋ねる。それが天文学や幾何学など人事に迂遠な知識ではなく、人間くさい歴史、地誌、故事来歴の知識であり、「若者が果たすべき「美わしい事業」とは何か」の知識である、と答えたヒッピ阿斯に、「美とは何かを言い得ぬ者が、或るものは美わしい、あるいは醜い、とどうして言えるのか」とソクラテスを詰問する或る人物【実はソクラテスの alter ego】にソクラテスは言及し、「美わしい事業」を言挙げしたヒッピ阿斯に「美わしいもの【美わしさ】そのものは何か、教えてくれ」と依頼する、という次第である。

ヒッピ阿斯は、こんな問に答えるのはわけもない、と自認して

いる。「答えられないようなら、我がわざ【高額報酬を代償に知識を切り売りする知識人の技術】など素人だましになってしまふ」と彼の意気たるや軒高である。

(1)「美わしいものそのものは何か」という問に対するヒッピアスの第一回答とこれに対する論駁

ヒッピアスの最初の回答は、「美わしい乙女」である。美わしい乙女が美わしいものであること、万人に明らかであるから。

ソクラテスは、美わしい雌馬 (theleia hippos) の、堅琴、土瓶もそれぞれに美わしいものではないか、と言い、ヒッピアスの回答が成功していないことを示す。ヒッピ阿斯は、雌馬はともかく堅琴と土瓶に驚愕する。「美わしさ」のように尊貴な事象を論じる際に「堅琴」や「土瓶」のような詰らない名前が言挙げされたからである。そこでヒッピ阿斯は、堅琴や土瓶のような器物にも美わしいものがあることは認めるが、乙女や雌馬に比するならば、器物の美わしさは知れたものである、と言う。ソクラテスは「猿のうち最も美わしいのも、人間の種族に比するなら醜い」というヘラクレイトスの言葉を引き、「知者ヒッピ阿斯は「土瓶のうち最も美わしいのも、乙女の種族に比するなら醜い」と言うのだね」と言う。これに同意したヒッピ阿斯に、「同一の論法で「乙女のうち最も美わしいのも、神々の種族に比するなら醜い」ではないか」とソクラテスは言い、ヘラクレイトス自身の言葉、「人間のうち最も知恵ある者も、神に比するなら、知恵の点でも、美わしさの点でも、ほかの点でも、猿に見える」を引いて駄目を押す。「美わしいものそのもの」を問う問に対するヒッピアスの回答が、比較対象に応じて美わしかつたり、醜かつたりするものでしかなか

原著論文

ソクラテスの在りか―『大ヒippias』をめぐる―

上林昌太郎

はじめに

J・M・クーパーが、みずからの編集した英訳プラトン全集 (Cooper 1997) に付した二十頁の Introduction は、今日、プラトン研究を志す者にとって「簡にして要を得た心得」と称すべき好文である。クーパーは、プラトン研究に際して客観的に確定した事実が僅かに過ぎないことを指摘する。そして、ひところは定説をなす観があった前、中、後の三期にわたるプラトン対話篇の配置、これと連動するプラトン哲学発展史の安易な前提はかえって個々の対話篇が含む哲学的メリットの十全な享受を妨げるゆえ、客観的に確定できない豫見は一切排してプラトン対話篇に虚心に対すべきである、と彼は言う。このような立場は、C・カーン (Kahn 1996) や J・M・ロウ (Rowe 2007) の共有するところでもある²⁾。

さて、小論において私が志すのは、前期対話篇に位置づけられてきた対話篇のうち、一種の時代精神と言すべき懷疑主義の風潮が澎湃した十九世紀ドイツにおいて「贋作」の可能性が取り沙汰されて以来、今日に至るまで贋作説が再生産されてきた『大ヒippias』に目を注ぎ、この対話篇のうちに、「ソクラテスは何であったか」を説明する手がかりの一つを得ることである³⁾。

私は、一般に贋作説は安易である、と考える。トゥラシユロスが最終第三十六番対話篇と数えた十三通の書簡を含め、プラトンの真作として伝来した対話篇は真作とするのが当然である。従って、真作説に立つ者に真作証明がではなく、贋作説に立つ者に贋作証明が求められる。ゆえに私はこの対話篇も真作とする者であるが、小論の意図は「如何なるソクラテス像がこの対話篇から析出されるかの検討」に留まり、真贋の議論には踏み入らない⁴⁾。

一 登場人物、場所、時、構成

登場人物は、ソクラテスと、久しぶりにアテナイを訪れたエリスの知識人ヒippiasの二人のみ。時は不明だが、W・K・C・ガスリーの引く (Guthrie 1975, p. 177) A・E・テイラーの「ニキアスの平和時 (421-416 BC)」との所見 (Taylor 1926, p. 29)⁵⁾によるならば、ソクラテスは五十前後、ソクラテスと同世代のヒippias⁶⁾も似た年恰好になる。対話篇の形式は最も簡単な掛け合いで、ソクラテスとヒippiasのセリフが交互に記されるのみである。

二 対話篇の概要

開巻劈頭のソクラテスのセリフ「美わしく知恵あるヒippiasだ!」は、対話篇の主題が「美わしさとは何か」であることと照応する工夫の造文であろう。同様に、末尾の一文、「私は貴方がた両者【ヒippiasなどの知者と彼等に反対する或る人物】結論を先取りすれば、ソクラテスの *alter ego*」との付き合いによって裨益される、と思っている。「美わしいものは難しい」との

The International Budo University Journal

No. 28 (2012)

CONTENTS

Original Articles

On the Study of Chinese Swordsmanship in Ming Dynasty

— the State of Swordsmanship in Ming Dynasty, Ancient Pithy Formula Songs for Practicing
Swordsmanship and the Characteristics of Ancient Sword Methods as the Research Centre —

..... Lin Boyuan 1

A Correlative Study between English Grammatical Knowledge and the Comprehension of Transcribed
English Dialogues

..... Yoshie MOCHIZUKI 11

Eine Lehrmethodische Forschung der österreichischen Lehrmethodik des alpinen Skilaufs 2011/12 I

..... Makoto TSUKAWAKI 25

Report

Investigation about the skill of the Korean university Kendo players

..... Tetsuro INOUE, Kimiharu IWAKIRI, Akira IJIMA and Dong Churl PARK 37

Reports on Education and Research Activities

Project Research

The Opinion Poll About the Game Return of the Sports Doctor and the Athletic Trainer

..... Masashi KASAHARA, Toshiharu YAMAMOTO, Takashi OGIUCHI,
Yuki KENMOCHI, Kyouhei TAKEDA and Masaharu ENDOU 43

International Budo University : Developing sports Education abroad with The Japan Overseas Cooperation
Volunteers

..... Toshikazu KIMURA, Kantaro MATSUI, Youjiro DOI, Hideo TAKAMI,
Yoshimi YAMAHIRA and Ryouji WATANABE 55

Original Articles

Where is Socrates? — A Study of *Hippias Major* —

..... Syōtarō KANBAYASI 61

Report

The Study of komachi' Imagination

..... Tomoko KUROBANE 75

Material

A Research Report on the four scrolls of "Aisu kage no ryū mokuroku" found in the Tokyo National Museum

— On the relation between kage ryū and shinkage ryū and new results concerning the treatise on kage
ryū in the "Kikōshinsho" —

..... Kōki MIYAMOTO and Takashi UOZUMI 95